

山 ぎやう

第44号

平成25年11月

関東氷上郷友会



おもわず新しい



人びとが暮らしの中で願っていたことに、それ以上のモノで、最良のカタチで応えていきたい。
そして、人びとの「心」を包み、「夢」を装うことができる企業
ネクスタはそういう存在であり続けたいと考えています。

ネクスタ株式会社

東京支店 111-0051 東京都台東区蔵前2-4-5 K-FRONTビル TEL 03-3861-2331

ネクスタ ラッパイ株式会社

東京工場 121-0011 東京都足立区中央本町5-22-12 TEL 03-3849-6611
千葉工場 270-0202 千葉県野田市関宿台町2192 TEL 04-7196-1721

ネクスタ パッケージ株式会社

栃木工場 323-1104 栃木県下都賀郡藤岡町藤岡4938 TEL 0282-62-3321

山
ざ
ら

第44号

母招くお炬燵こた恋しや里の秋

山ざる 第44号 目次

〈表紙〉 笹倉鉄平画／〈目次・扉〉 俳句Ⅱ渡邊隆男／写真Ⅱ徳田八郎衛

歳々年々人同じからず……坂上勝朗 5

平成24年度「ふるさとの会」開催……6／安本義正氏講演要旨……8

平成24年度「ふるさとの会」出席者……10／祝寿の方々ご紹介……11

懇親会スナップ……14

《ふるさと随想》

望郷——中学卒業の頃……丸川健三郎 18

二つの上久下小学校……久保良雄 23

柏高時代のこと……西畑健一 32

長年の思いが叶った日……森田栄子 34

ハルピンの思い出……木呂子恵美子 35

ふるさと『田路史』から……荻野哲男 38

ふるさとは遠くにありて……池上忠志 40

藤原岩市を知っていますか……徳田八郎衛 43

《近況・エッセイ》

人間万事塞翁が馬……山下文隆 60

丹波人の気質……柿原康一郎 63

小野田寛郎元陸軍少尉……前田武彦 65

TPPをどう考えるか……八木信行 68

油絵と合唱でシニアライフ……谷 敬三	74
同級会を励みに……木辻照男	77
鶏卵を立てる……青木保夫	79
エンジョイクラブの活動……	81
歌集『凌霄花』……井出恭子	83
折々の記(10)……井本義一	87
但馬・和田山の竹田城跡を訪ねて……山本喜則	94
《インタビュコーナー》	
安井孝之さん／イノベーション・ジャーナリズムを根付かせたい……編集部	105
《私の職場》郵便局の株式上場を目指して……谷垣邦夫	110
《丹波ブランド紹介》	
〈その4・市島の酒造場〉水の良さで4社集中……小田晋作	114
《東日本大震災の被災地から》	
「平成三陸大津波」からの復興を目指して……野村節三	120
留学生と第三次被災地訪問……上 高子	128
《丹波通信》田舎体験施設「かじかの郷」……荻野祐一	132
《丹波のまつり①》山南町・上滝のまつり……大野義昭	136
《ふるさと人物記》田ステ女の俳諧……小松京華	139

ふるさとトピックス（丹波新聞から）……51／会計報告書……59
《丹波を撮る》……徳田八郎衛 52
《MYギャラリー》由良利枝子／谷 敬三／久保良雄／上田道代……95
《山ざる文芸》俳壇・詩座・歌壇……99
BOOKS……151 会員だより……155
《インフォメーション》平成25年度柏陵同窓会東京支部総会・懇親会……164
《協賛広告》……168／編集後記……180

表紙画に寄せて

◆常岡画伯二代

常岡文亀さんの日本画が明治座欄間の中央に飾られ、永年日本を代表する画家として讃えられました。何とその常岡画伯が十年間も我らが山ざる誌の表紙画をご執筆いただいたのです。いずれも郷土色ゆたかな入念の作、ご子息の鋭・幹彦さんがあとを受け、郷土の風物から日本海の波濤、はてはスイスアルプスにまで取材、丹波人の血をたぎらせるような力作をご提供いただきました。

◆可部美智子さんの陶彫

可部美智子さんの37号から43号を飾った、あどけない陶彫像が何ともお見事でした。可部さんの手により陶彫に魂が吹き込まれ、まるで生きているかのような存在感のある作品群。

春よ来い、早く来い、赤い鼻緒の草履はいて……

忘れていた子ども心、懐かしい思い出の童話が蘇る。

あの頃の夕空のあかね色のあの雲は、いつも私たちの宝もの。あの児といっしょに、いつまでも見つめていたいものです。

◆笹倉鉄平さんが登場

木は木よりも木らしく、花は花よりも花らしく……、この44号から、いよいよ笹倉さんの登場です。この絵は写真ではなく、緻密で丹念に描き上げられた原画をシルクスクリーン版画にしたものです。笹倉さんの絵は、何ととっても「光」の美しさ。背後から発せられる逆光、反射光ともいえる幻想的な光は暖かく平和で心地良いもの。西欧の風景を描いていても、笹倉さんの心には、丹波の風景が重なって映るそうです。

渡邊隆男・記

歳々年々人同じからず

会長 坂上 勝朗



このところ昭和二十五年
度葛野（かどの）中学校卒業
生のクラス会は、毎年開かれ
るようになりました。それま
では、隔年の集まりだったの

ですが、四〇五年前から年中行事に昇格となったので
す。そのおおきな理由は、この歳になりますと、年々
あの世に行ったり、からだが思うように動かなかつた
りで、集まれる人が会ごとに減る現状を踏まえ、今生
の出会いを少しでも多くという、やさしい幹事さんた
ちの慮りであろうと思われます。家も親もない境遇で
は、そうそう帰省の機会もないのですが、このお蔭で
毎年ご無沙汰している、かつてのご近所さんにもご挨拶
ができ、故郷の変わって行くありさまも、目の当た
りにすることもできて、同学年の幹事のかたがたに感

謝申し上げる次第です。

それにつけても、思い出されるのが「年々歳々、花
相似たり、歳々年々、人同じからず」という言葉です。
またこれとセットで「今年花落ちて顔色あらたまり、
明年花開いてまた誰かある」も思い浮かびます。この
言葉は、初唐の劉廷芝（りゅう） ていし・六五（一
六七八？）の「白頭を悲しむ翁に代わりて」という七
言二十六句の詩の一節で、無常の時の流れに対する感
慨を表す時に、その都度引用されてきましたので、多
くの方々がご存知と思います。

若くて、当たるところ敵なしの日々を送っている間
は、こんな言葉もそう重くは受け取れなかったのです
が、自分のこの世に許された残り時間を、いやでも認
識させられる現今ともなりますと、痛切にこの言葉の
意味が迫ってまいります。

「だから、どうなんだ……」などと問い詰められると、
ハッタと返答に詰まってしまうのですが、無常なれば
こそ、その面白味を味わえた人生。あと少しとはいえ、
変化に対応できるよう油断なく暮していきたいと思う
このごろです。

和やかに賑やかに郷友の集い

平成24年度「ふるさとの会」開催

平成二十四年度の「ふるさとの会」は十一月十七日（土）十一時より、昨年より変更になった東京都千代田区の学士会館で行われました。

総会に先立ちアトラクションには京都文教短期大学学長である安本義正さん（氷上町出身）より「水滴の奏でる小宇宙」と題して、水琴窟に関する研究成果を講演いただきました。（詳細は8ページ）

総会では坂上勝朗会長のご挨拶に引き続き議事に入り、今年は役員の改選となり、役員会で推薦を受けられた会長以下全員の候補者（別記）の報告をし、会場より盛大な拍手のもと新役員が決定しました。引き続き谷口副会長（会計担当）から会計報告・監査報告があり、会場より拍手で全ての議案を了承頂きました。

その後、満八十歳を迎えられた郷友の方にお祝いを申し上げる「祝寿会」に移り、ご案内を差し上げた十九名の方のうち参加頂いた笹倉強さん、笹倉郁子さん、安原三智子さん、大石佐代子さん、渡辺貴美子さんに、坂上会長より祝辞と花束を贈りました。皆さんお若くとても年齢を感じさせない見事な容姿に感心するばかりでした。



安本氏の講演に聴き入る参加者



祝寿の花束を手に。左から大石佐代子さん・安原三智子さん・笹倉郁子さん・渡辺貴美子さん・笹倉強さん

懇親会は岸本副会長の司会で開会、兵庫県東京事務所の本所長の挨拶と兵庫県知事のお祝いのメッセージが披露、又今回初めて郷里よりご参加頂いた氷上高校の余田校長より同校バレエ部の活躍ぶり、更に柏陵同窓会の谷水会長より丹波の近況などと共にお祝いのお言葉を頂きました。引き続き丸川ご兄弟での乾杯の音頭で、いよいよ会話の輪があちこちに広がりました。

今年は安本講師の氷上町や同期の方の参加も多く、安本さんをお困りでお話弾んでいるのが印象的でし

た。いつもの楽しい宴会になりました。

又、認定NPO法人「アジアの新しい風」を主宰されている上高子さんから、日本の楽しい故郷の会を紹介すべく特別に招待されたベトナムからの留学生二名のご紹介と、それぞれのご挨拶あり、今回はるばるおいで頂いた氷上高校のバレエ部の活躍を応援しようと参加会員より支援金を募り校長先生にお渡しすることも出来ました。

いつもながら、あつという間に予定時間が終わってしまうという楽しいひとときを過ごしました。

恒例のお楽しみ抽選会は、参加者全員にチャンスがあり、空くじ無しで「丹波の山芋」、「丹波黒豆」、「黒豆・丸大豆の煮豆」などがそれぞれ全員に渡るようにされ、参加者全員何かのお土産を頂いて帰ることが出来ました。又、昨年よりみんなで楽しめるよう、合唱指揮者の笹倉強先生の指揮で「里の秋」の大合唱になり、大いに盛り上がりを見せました。

和やかで盛会な会も来年、又元気に会えることをお約束し閉会となりました。

(岡 吉明・記)

安本義正氏講演要旨

水滴の奏でる小宇宙

人は日頃五感を發揮して生活しています。視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚とそれぞれ大事な要素ですが、その中の聴覚は、母体内にいる時からいち早く発達しており、様々な物音を聞いています。臨終の際も聴覚は機能しており、菩薩が降りて来てお迎えに来て下さる最後まで音は聞こえています。



講演する安本義正氏

私たちは一日中様々な音に囲まれて生活しています。今日は「水琴窟」と、それから生じる「妙音」について、水琴窟の音に耳を傾けていただきながら、製作

〈講師紹介〉 水上町出身。京都市在住。柏原高校14年生。大阪大学工学部卒・大学院修了後同大学産業科学研究所にて音響科学に関する研究活動に従事。工学博士取得後、昭和58年京都文教短期大学にて人間教育・健康教育・科学研究に携わり、平成20年より学長（現在に至る）。日本サウンドスケープ協会監事、日本音楽療法学会評議員・監事、全国保育士養成協議会副会長他。講演活動等多数。

方法や音の特性などについてお話し、心身の癒し効果についてもお話ししたいと思います。

寺院や神社の庭や茶室近くの蹲に「妙音」の出る仕掛けがなされています。江戸時代にはもともと排水装置として造られたものですが、琴のような音色が生じることから水琴窟と呼ばれるようになり、その魅力ある音を楽しむようになりました。

近年、人間の心身を癒してくれる「水琴窟」として注目され、静かなブームになっていますが、私の学園でも創立一〇〇周年記念事業の一環として、平成十六年にその歴史の響きを表現する水琴窟を設置しまし

た。その内、我家にも欲しくなり庭に造りました。雪見障子から水琴窟が見えるようにと三疊間を増築しまして毎日楽しんでます。

人は何故水琴窟に魅せられるのでしょうか？それは文化的側面・内観的側面・科学的側面があります。

文化的側面としては、「音の文化」としての側面があります。各地の神社・寺院の境内に敷きつめられた砂利の上を歩くときの音や「鹿おどし」の音などとともに、水琴窟の音の文化的・歴史の変遷を見ていくことは大変興味のあることです。

内観的側面としては、音による「気づき」です。京都の石庭で瞑想にふけるというのがありますが、水琴窟の妙音も、一時間ほど耳を傾けることによって、自分の内面を見つめ、生活を振り返り、自分の心の有り様に気づいて、生き方までも考えさせてくれるものです。水琴窟の妙音を聞いて、「水滴の奏でる小宇宙」という詩を残して心不全で亡くなった学生がいました。残念なことでしたが、素晴らしい感性の持ち主でしたのでご紹介します。

科学的側面としては、「ゆらぎ」です。自然界には

静止しているものではなく、常に変化しています。その変化も一定ではなく不規則変化をしています。ゆらぎとは不規則変化の様子で、変化の変化、予測が困難な変化ということが出来ます。「音のゆらぎ」には、周波数のゆらぎ、強さのゆらぎ、時間のゆらぎがあり、水琴窟の音には、これら三つのゆらぎが存在します。水琴窟では、しずくが瓶の中に落ちて水面にぶつかり、瓶の中で三つのゆらぎをもつ反響音となって、私たちの心身を癒してくれるのです。現在、自然界の様々な音や楽器の音などの聴取実験を行い、脳波や心電図を分析しながら、癒しの効果について研究しています。

※

全国水琴窟所在一覧を含む詳細なカラー版の立派な資料に沿ってお話いただきました。

水琴窟の音を聞かせていただきながら音に癒されることの大切さを考えさせられました。研修会を控えておられるお忙しい日に京都から駆けつけて下さり、多額の寄付までいただきました。心に響く講演をありがとうございました。紙面をお借りしてお礼を申し上げます。
(謝辞&文責・岡田昌子)

◎平成二十四年度「ふるさとのかい」出席者

(順不同・敬称略)

〈来賓〉

榎本 輝彦 兵庫県東京事務所 所長

渋谷 寿永 兵庫県東京事務所 課長

余田 敏 兵庫県立氷上高校 校長

谷水 克己 柏陵同窓会 会長

〈祝寿〉昭和7(1912)年生まれ

笹倉 強 笹倉 郁子 安原三智子

大石佐代子 渡邊貴美子

〈講師〉

安本 義正 京都文教短期大学 学長(氷上町)

〈会員〉

○青垣町(3名)

足立和巳 足立真一 安原三智子

○市島町(7名)

高見秀史 藤田 純 藤田純子 丸川健三郎

丸川宥次郎 山本喜則 吉見弘文

○柏原町(10名)

岡 吉明 岡 洋子 岡田昌子 小田晋作

小谷 崇 大録和代 高尾久子 藤本芳子
細木敦子 三贅洋子

○春日町(5名)

金出一郎 木呂子惠美子 富田貞子 廣瀬靖典

松田けい子

○山南町(16名)

池田 忍 植木十和子 梅田重二 大野義昭

梶原やす子 形田恒夫 久保良雄 勢川武彦

中居篤子 原谷洋美 廣内卓生 廣内雅子

藤本貴士 藤原ひさ子 前田和市 渡邊貴美子

○篠山市(1名)

菅野芳子

○氷上町(20名)

浅香壽一 足立明子 足立 謙悟 足立義雄

足立松子 安達健一郎 上 高子 上野重喜

上野忠明 岸本 勲 岸本敏子 岸本卓也

坂上勝朗 坂上 登 谷口浩章 藤田玲子

前田 守 前田 亘 山岸幸子 渡邊隆男

○西脇市(4名)

大石佐代子 笹倉 強 笹倉郁子 廣瀬真澄

祝寿の方々と紹介

郷友会では毎年の総会で八十歳を迎えられる会員に祝寿のお祝いをしておりますが、今年その記念の年に当たられる19名の方に、以下の項目でアンケートを依頼しました。そのうち、6名の方から回答頂きましたのでご紹介します。(誕生日順)

- ① 生年月日
- ② ご出身地
- ③ 上京の年月日
- ④ 上京の動機
- ⑤ これまでに最も印象に残ることは
- ⑥ 祝寿を迎えられてひと言

〈生まれた年Ⅱ昭和8年・癸酉・1933年〉満州撤退勧告案が可決されたため、日本は国際連盟を脱退し、中国での戦線を拡大していった。思想・学問の自由が大弾圧が加えられ、世相は一段と暗さを増した。昭和天皇に待望の皇太子が誕生した。

辻 安左衛門様

- ① 昭和8年1月19日
- ② 氷上町中
- ③ 昭和46年4月
- ④ 勤務先(会社) 転勤のため。
- ⑤ 八十路を迎え、戦中戦後を乗り越えて高度成長期、右肩上がりの景気の中、連日夜の11時、12時の帰宅は当然、子供達の寝顔を横目に翌朝は出勤。若かったのですね。苦も苦労とも思わず張り切ったサラリーマン生活でした。
- ⑥ 生まれ故郷を後にして早いも

ので半世紀も過ぎ去ろうとしています。昭和46年に大阪から東京勤務を命ぜられ府中市にある社宅に入居、腕白盛りの男の子2人の将来の事も考慮、空気、緑、自然環境の良い埼玉県の片田舎ですが、住めば都。人情厚く、多くの知人、友達にも恵まれ終の住処として今に至っています。平成24年1月に肺に疾患が見つかり手術、その後通院をしながら今は妻と二人でのんびりと日々を過ごしています。

岡田 充利様

- ① 昭和8年1月31日
- ② 柏原町
- ③ 昭和53年4月

祝寿の方々と紹介

足立 正様

- ④ 3回目の東京転勤です。
- ⑤ 昭和20年8月15日の敗戦翌16日、柏原中学校の大先輩大西中将の自決です。家より3人中将の自決でしたので。
- ⑥ サラリーマン30年、自営30年
多くの人にお世話になりました。
唯々感謝々です。

- ① 昭和8年3月13日
- ② 氷上町御油
- ③ 50年前
- ④ 人生のなりゆき
- ⑤ 8年前、脳コーソクで2週間入院したこと
- ⑥ 自分が80歳を迎えることが出来たのが自分でも信じられない思いであります。

写真は囲碁の会で（後列右から2番目が筆者）



池田 和子様

- ① 昭和8年3月31日
- ② 柏原町

- ③ 昭和34年12月8日
- ④ 結婚のため
- ⑤ 子どもを3人出産してから教職につきました。最初は私立の幼稚園5年勤めて公立の小学校の教師になりました。
高校時代から図書館教育のお手伝いをさせていただいたのが縁で小学校でも図書主任や読書教育の研究校に、また千葉県県の図書館部会で活躍する場を与えられ、読書の重要性に気付かせて頂きました。
短い教職の中で校長職を与えられ、教育の重要性と人間の育つ過程の大切さも知りました。今はモンテッソーリ教育の素晴らしさを学び、幼児教育の大切さをひしひしと感じ、邁進しています。人間の過ごす過程は一つも無駄がな

祝寿の方々と紹介

いことを知らされています。
⑥今日も毎日、幼児と共に歩み、学んでいけることに感謝しています。一人でも自分で自立した人間に育って欲しいと願いつつ、日々働かせていただけることに感謝しています。

菊池 洋子様

- ①昭和8年6月12日
- ②氷上町(旧幸世村)
- ③昭和27年3月
- ④大学入学のため(芸大)
- ⑤芸大卒業時にメサイア(ヘンデル作曲)のソリストに選ばれ、生まれて初めてのオーケストラの伴奏で歌った事と、結婚して子どもが生まれた事が大きな記憶として残ってお

ります。ただ、その一人娘が1年程前、先に逝ってしまいました。
⑥夫婦共々80歳を過ぎても何とは平穩に生きている事を心から感謝しています。

北村 貞子様

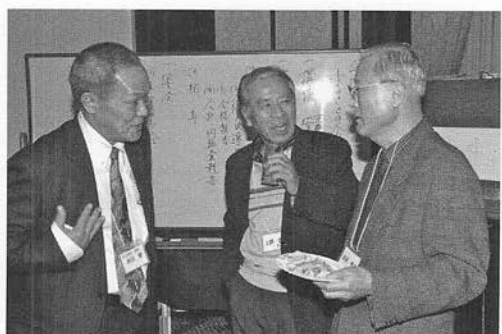
- ①昭和8年12月16日
 - ②柏原町
 - ③昭和50年4月1日
 - ④主人の転勤
 - ⑤旅の思い出
- 今から20年程前、姉とス페인へ行った事。印象に残っているのはグラナダのアルハンブラ宮殿、サグラダ・ファミリア・グエル公園等々。また柏高の友人6人と60歳から毎

年1回旅行が10回余り続いた。北海道、九州、ハワイ等……楽しい思い出が残っています。

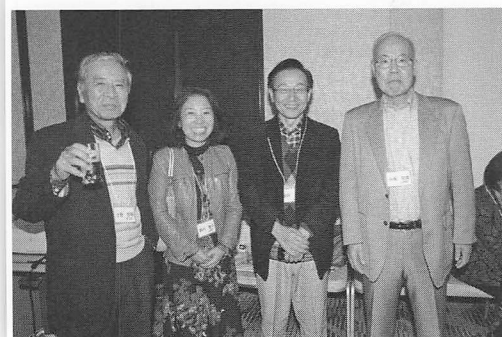
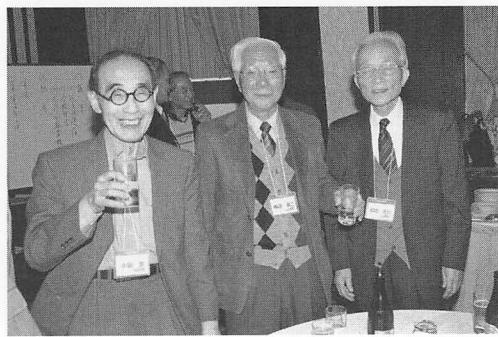
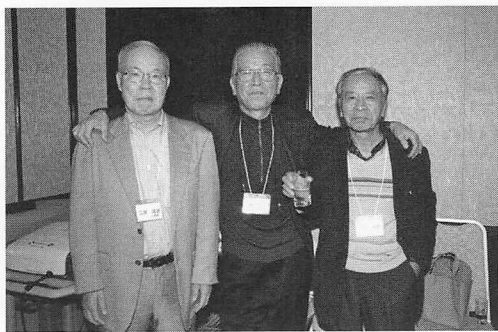
⑥振り返ると、若い時は主人の転勤等で8回引越し、この綾瀬に住んでは30年以上も過ぎ大病もせずにこの年まで、元気で過ごせたのは感謝です。今は趣味のパッチワークキルトの有名な先生の教室に通い若い時の着物で、ベツドカバーを作っています。2500枚位のカット布をつなぎ合わせ、蘇る慶びを感じています。大作ゆえ時間がかりますが、出来上がりを楽しみに忙しい日々を送っております。

懇親会 スナッフ

撮影：岡 吉明











ふるさと随想

望郷―中学卒業の頃

丸 川 健三郎（市島町）

望郷の思いには空間とともに時間も含まれるかも知れない。私の場合、思い出をたどって見ると中学卒業の頃の故郷に強い執着があることに気がつく。以下はその頃の思い出の断片である。

* 中学の同級生 *

私の中学卒業は昭和二十七年三月のことである。昭和二十年の終戦からは大分経ってはいしたが、まだ、戦争の影響が色濃く残っていた年代であった。

例えば村における疎開者の存在がある。我が家もその一員であったのだが、終戦の年かその前年あたりに、空襲を避けて、都会から村へとやってきた。そして戦争は終わったのだが、終わったからといって、元の都会へすぐ帰るわけにはいかなかった。都会で住んでいた家も、そこでの生活基盤も失っていたからである。

しかし一方、村にいても、将来への展望がある訳でもなかった。

私のいた村（鴨庄村）で数えて見ると、中学卒業の時点で全クラス五十七名のうち七名ほどが疎開者の子であった。そして、どうした訳か私のいた集落には疎開者が多く、同級生五人のうち、私を含め四人も疎開者がいた。そして何の巡り合わせか、私以外は女の子ばかりだった。

卒業近く

卒業近くの十二月、私の住んでいた集落で子供達の集会があった。正確に言えば、「天神講」という呼び名なのだが、呼び名はともかく、これは年に一度か二度開く子供達だけの集会なのである。小学生と中学生が地域の公会堂に集まり、持ち寄った米、野菜などで大鍋を使って炊き込みご飯を作る。昼食と夕食を作り、その間、皆で一緒に遊ぶのである。公会堂は畳敷き二室だけの小さなものだったが、竈や鍋、それに食器などもそろっていた。

その時の天神講も集落の子供達全員、およそ二十人

ほどが集まった。二十軒ほどの小さな集落にしては子供が多かった。下級生達が遊びに夢中になっている間に、私達中学三年生だけは公会堂の入口のあたりでおしゃべりをしていた。その時の皆の関心事は、当然ながら卒業後の進路だった。

しかし、女の子四人に囲まれての会話は、何故か私の孤軍奮闘のような状況で、弱虫の男の子が女の子達にいじめられているように見えたかも知れない。彼女達は学校では会っても素知らぬ顔なのだが、家に帰ると気楽に話しかけてくるのだった。誰かが私に、

「健ちゃんの処は何も心配がなくていいね」

と言った。確かに我が家は恵まれていたかも知れない。父が大阪の方に勤めることになって我が家の経済は安定し、私の高校進学なども家では当然のことと受け止めてくれていた。しかし、その頃、他の疎開者の家庭では子供を高校へ進学させるゆとりはなかったのである。彼女達の中で、農家の花江だけは農業高校への志望を決めていたが、他の三人はまだ先が見えない、不安定な状態だったようである。花江は背が高く、中学生ながら既に家で頼りにされるほどの働き手になって

いた。

級友の進路の噂などしている中で、芳子が突然、私に、

「偉くなったら、私を女中に雇ってよ」

などと言う。私が口ごもるのを面白がる風である。

芳子は私の隣家の長女で、もともと大人びた感じの子だったが、とくに私に対しては無遠慮なところがあつた。他の子達も調子を合わせて、

「私も、お願い」

などというのだが、夏子だけは何故か黙っていた。

夏子が村へ来たのは終戦後だったが、やはり疎開者だった。

私は彼女達の攻撃をかわすため、どこかで聞いた奨学金の話などをしたのだった。たぶん、その頃、日本育英会が高校生にも奨学金を出すという制度を始めたばかりだったのだろう。私は破れかぶれの調子で、

「英子さんは頭がいいんだから、奨学金をもらって高校へ行ったらどうだ」

などと口走ってしまった。英子は澄ました顔で、

「私なんか、どうせ入学試験で落ちるわよ」

と受け流していた。しかし、英子が成績抜群であることは皆が知っていた。事実、その後の卒業式では優等賞をもらうことになるのである。英子は五人姉妹の長女で、その故かしつかりした性格の子だった。

それまで彼女達とこんな風に話をしたことはなかったのだが、卒業が近づいて、いやでも大人の世界を垣間見る時期に差し掛かっていた、ということなのだろう。

* 英子の場合 *

年が明けて、卒業式が近づいた頃のある日、英子の母が我が家を訪ねてきたことがあった。英子の一家が大阪の方へ引っ越すことになり、その挨拶にいらっしやったのである。英子の中学卒業を待つて、いよいよ一家を挙げて都会に戻る決断をした、ということなのだろう。

その時、我が家を訪ねてきた英子の母は驚くほど長時間話しこんでいた。玄関の横の小さな部屋を締め切つてのことだったので、私が氣にするくらいであった。

そして、英子の母親が帰られた後、母が意外なことを私に言ったのだった。

「あなたは英子ちゃんに、奨学金をもらって高校へ進学したかどうか、などと言ったの？」

私はびつくりしてしまった。英子は天神講の時には、素知らぬ顔で私の言葉を聞き流したように思えたが、家に帰ってから母親にしっかりと聞いたのだった。私は何故か「しまった」と思った。子供の私が言うべきことではなかった、と感じたからである。私が曖昧に言葉を濁していると、母は続けて、

「英子ちゃんのお母さんはね、お宅の健ちゃんがやさしいことを言ってくれたと言って、ずいぶん泣いていらつしやったのよ」

と言った。私はびつくりした、と言うより衝撃を受けたと言った方が当たっていただろう。何か言い訳を考えたが、何も言葉にならず黙っていた。

言葉は必ずしも真実を語らない。英子の母が何をどう考えて、言葉を発したのかは分からない。「奨学金云々」は私の口から出まかせのような発言だったのだが、それに誘発されて、日頃の思いが爆発したのかも

知れない。勉強好きの英子の将来や、現在置かれている困難な家庭の状況への思いなどが交錯したことだろう。

卒業式の後、しばらくして英子の一家は村を去った。その後の消息は殆ど知らないが、ずっと後年の同窓会のときに誰かが、「英子は看護婦になった」と言っていた。立派な看護婦になったに違いない、と思えることが私にとつての慰めである。

* 夏子の場合 *

夏子は、しばしば学芸会でヒロインを演じた。例えば、中学二年のときの学芸会では、春の女神になって、オペラのアリア風の歌を歌ったことがある。歌の調子は突然に高音部が現れたりして、子供にとつては少し捉え難い歌だった。それはともかく、私の母は夏子に好感を持っていたらしい。私がいつか鼻歌を歌っていると、母が「それは夏子ちゃんが学芸会で歌った歌でしょう」と言ったことがある。実はそうではなかったのだが。

卒業後の夏子には大きな変化が待ち受けていた。大

阪の方へ住み込み女中（お手伝い）となつて、村を出たのだつた。たぶん、十二月の天神講の頃にはかなり話が進んでいたのだろう。夏子のところは父子家庭で、父親の再婚の話が進んでいるという噂もあった。

卒業を控えた二月になると、夏子は早々とクラスから姿を消した。行く先の家庭に事情があつて、「一日も早く来て欲しい」と催促されていたそうである。

私の母は夏子の事情についてもどこからか聞きつけていて、よく知っていた。

「夏子ちゃんの行く家庭は校長先生の家らしいよ」

と母は言つた。そして、

「教育に関心のある家庭だから、夏子ちゃんはお手伝いだけでも定時制高校へ行つても構わない、と言われているそうよ」

と言葉を継いだ。

卒業式当日、夏子は式に出席するため村へ歸つて来た。しかし父親と一緒に、式が終わると級友とろくに話もせず歸つてしまった。私は父親に付き添われて歸つて行く彼女を遠くから見送つた。残念ながら、彼女の場合についても、その後の消息を知らない。従つ

て、彼女が、定時制高校へ進学したかどうかは分からないままである。

卒業から既に何十年かが過ぎた。遠くかすんでしまった日々の中に、鮮やかに浮かびあがってくる部分がある。そして、中学卒業の日が、大きな分岐点だったことを、改めて思うのである。

（付記）文中の人名はすべて仮名です。記述した事柄も事実と異なる部分が多いことをお断りしておきます。

（昭和12年徳島市生まれ、市島町喜多出身／北海道大学
名誉教授、東京都江東区在住）



二つの久下小学校

久保良雄（山南町）

◆氷上と関東と

日本には二つの久下（くげ）小学校がある。

正確には、「少なくとも二つの……」、あるいは、「私の知る限りでは二つの……」、と言うべきかも知れない。三つ目がないとは断言できないからである。しかし、多分、第三の久下小学校はないのではないかと私は思っている。

と言うのは、「久下」というのはそう普通にある名前ではない。だから、二つ存在するということが不思議なぐらいである。しかし、これには理由があるのであって、たまたま二つあるというわけではない。

これら二つの久下小学校の、一つは氷上^{ひかみ}にあり、もう一つは関東にある。

私は氷上（旧兵庫県氷上郡、現兵庫県丹波市）の旧久下村にある久下小学校の卒業である。因みに、やは

り同校を卒業している私の父、久保文治はこの学校の校歌を作詞している。校歌が作られたのは六十年ぐらい前のことであるが、今も残っていて歌っていたいでいるそうである。

校歌は確か学校の創立八十周年を記念して作られた。ということは、学校の創立は今から百四十年ほど前の明治初年ということになる。そうなのだ。この学校は、日本に近代の学制が布かれて間もない明治七年の創立で、当時日本で一斉に設立された最初の小学校の一つである。もつとも、その時の名称は弘成舎といい、場所も現在の位置とは多少違っていた。

そして、もう一つの久下小学



丹波市立久下小学校。校門の石柱は昔のままだ。

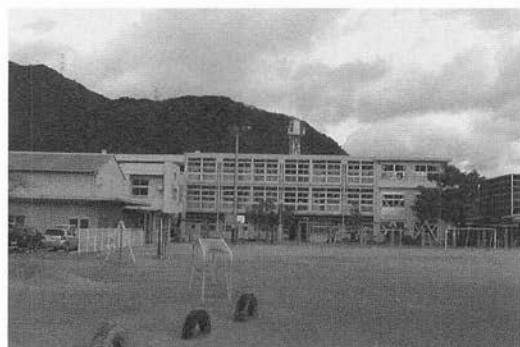


写真2 運動場から見た丹波市立久下小学校。正面の校舎の後ろに見える小高い山の上に久下氏の玉巻城があったという。

校は、関東は埼玉県熊谷市にある。こちらにも久下という地域にあるから久下小学校であるが、久下という地名について言えば、熊谷の久下の方が古い。

かつて、この土地を本貫とする久下氏という坂東武者の一族がいた。その一族が鎌倉時代の一二二一年に丹波国の栗作郷と呼ばれていた地に地頭として移り住んだ。それが氷上久下の地名の由来である。

◆久下氏のこと

この歴史上の

事実は旧氷上郡久下村においてよく知られていて、私も小学校の時に学校で教えられた。久下氏の来歴については『山南町誌』（昭和六三年）に詳しい。

久下氏に関する以下の記述は殆ど同書による。もともと、『山南町誌』の元は『久下村誌』や『氷上郡誌』だと断つてある。さらにそれは、江戸時代の『丹波誌』にも遡る。

丹波市内には『久下文書』と称される古文書が三軒の久下家（それぞれ山南町、春日町、市島町）によって保存されている。三つの古文書は細部は異なるものの大筋においてはほぼ一致していて、久下氏一族が関東に在住していたときに始まり、氷上に移り住んでからのことが詳細に記録されている。

関東在住時代の重要な逸話は、源平の戦いにおける、源頼朝の旗揚げとなった石橋山の合戦で、久下二郎重光が関東武士として一族二百五十人と共に真っ先に馳せ参じた、というものである。これが頼朝の御感を得、恩賞として“一番”という紋と、丹波栗作郷他の領地を賜ったという。しかしながら、このことは『源平盛衰記』にも『平家物語』にも、また、正史である『吾妻鏡』にも載っていない。『吾妻鏡』に久下氏の名前が出てくるのは、平家討伐の大手軍の一武将として名を連ねている（因みに義経が率いたのは搦手軍）のと、

同族である熊谷氏との所領を巡る訴訟に關しての記述である。そして、この訴訟に敗れた熊谷氏の当主直実は忿怒に堪えず、そのまま出家したという。

熊谷次郎直実と言えば『平家物語』を彩る登場人物の一人で、一ノ谷の合戦において泣く泣く平家の公達、平敦盛を討つ場面は物語の中でも有名である。このことがあつて熊谷直実は世の無常を感じ出家したと一般に伝えられているが、後の久下氏との訴訟事件が出家の直接の契機だったのだろうか。

氷上に移つてからの久下氏は氷上一帯に勢力を広げる。そして、もう一度、歴史に登場する。足利尊氏が、鎌倉幕府を倒すことになつた戦いにおいて丹波篠村（現亀岡市）に陣を構えたとき、久下弥三郎時重はこれまた二百五十騎を率い真つ先に尊氏の下に馳せ参じた。このことは『太平記』に見えていて、この場面ではかつての石橋山の戦いのこと、“一番”の紋所のこと、そしてそれを聞いた尊氏が幸先が良いと喜んだということが語られている。

さらにその後、征夷大將軍となつてからの尊氏が内部抗争に絡んで一時丹波に逃れたことがあり、そのと

き久下氏の館に暫く滞在したと久下文書は言っている。しかし『太平記』は、尊氏が丹波に逃れたことは記すものの、久下氏のもとでの滞在については述べていない。

久下氏に關しては、『熊谷市史』（昭和三八年）にもかなりの分量の記述がある。その内容はここに書いたことと概ね一致している。熊谷市にとつても久下氏は、その一族のことを抜きにして熊谷の歴史は語れないという程の存在のようである。

◆氷上久下村の現在

近年になつて氷上の旧久下村から久下の名前は失われつつある。昭和三十年に山南町ができたとき、行政区画としての久下村も上久下村もなくなった。公式の地名としての久下は消えたのである。現在、国土地理院発行の二万五千分の一地図の中に久下の名前はただ一つ、JR加古川線の久下村駅に残っているだけである。久下小学校と上久下小学校は、学校の文マークはあるが、学校の名前は載っていない。二万五千分の一地図は学校や施設の名前はなるべく載せない方針のよ

うである。民間の地図(インターネットの地図を含む)だと、久下小、上久下小、上久下公民館、久下小学校北(交差点名)、久下アフタースクール(?)が見られる。

この記事を書くに当たって、私は平成二十四年十一月二十七日に久下小学校を久しぶりに訪れた。現在は丹波市立久下小学校である。校舎を始め何もかもが私の通っていた頃とはすっかり変わってしまっているが、校門の石柱だけは元の位置に元のままで立っている。

校長の大西毅正先生にもお会いして話を聞いた。先生は久下の出身でないが、久下氏のことについてはよく勉強しておられ、詳しくご存じであった。そして、今も学校として子供たちに、久下氏にまつわる歴史は教えているということであった。

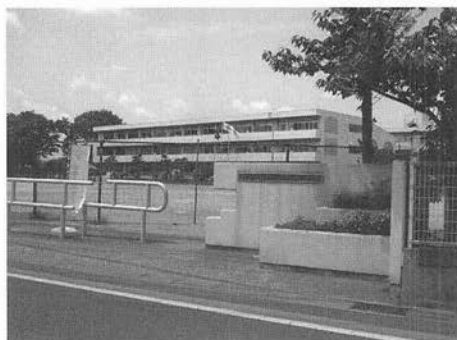
久下小学校では今、大きな声で挨拶をしようという活動に力を入れている。何でも挨拶日本一を目指しているという。なかなか意気盛んである。そういえば、町を歩いていて、久下小学校の卒業生であろう、下校途中の中学生の誰彼となくから「こんにちわ」と言う

元気な声をかけられた。今やこの町にとって全くの異邦人である私に対してそうなのであった。

そしてもう一つ、現在の氷上久下に関わる話題として触れないわけにいかないのは、平成十八年にこの地で発見された恐竜の化石のことである。厳密には発見場所は旧上久下村、上久下小学校区内だが、ここで、中生代白亜紀(今からおおよそ一億二千万年前)の大型草食恐竜の化石が見つかったのである。全長十数メートルの、丹波竜と名付けられた恐竜の一個体がそっくりそこに埋まっているらしいというのだが、そういう例は日本では他にない。今も現地の発掘は続いていて、掘り起こした地層の中から化石を取り出す作業は久下にある工房で進められている。

◆熊谷市の久下、そして久下小学校

一方の、熊谷の久下小学校はどういう学校なのだろうか。熊谷市久下にある熊谷市立久下小学校である。ここはかつては埼玉県大里郡久下村といった。昭和初期の分県地図で見ると、兵庫県氷上郡久下村とこちらの久下村はほぼ同じような扱い方になっている。



熊谷市立久下小学校。手前の道路は旧中山道。

た。ここを訪れるのは初めてではない。以前からこの久下小学校の存在は知っており、もう二十年以上前になるが一度見に行ったことがある。久下地区を歩くと、久下という文字を頻繁に見かける。

氷上の久下は地図から消えたのに対し、こちらは久下地区として存続し、二万五千分一の地図にちゃんと載っている。そのほかに地図上には、荒川に架かる久下橋の名も見える。久下小学校についてはやはり文のマークだけで名前は出ていない。民間の地図では、この他に、久下神社、熊谷消防団久下分団などというのも見られる。他にバス停として上久下や下久下もある。地図からの情報だけでなく実地にその姿を確かめようと、平成二十五年五月二十一日に私はこの地を訪ねた。



熊谷市立久下小学校ではムサシトミヨの飼育活動を行っている。そのことを示す看板。

交通安全を呼びかける久下小学校の幟をあちこちで見ると、久下連協（連絡協議会の略か）という名前での掲示が至るところにある。久下橋は長大な堂々とした橋だし、久下神社もなかなか立派な神社である。要するに、久下という名前が氷上の久下よりも住民の間に生きているという印象を受ける。

久下小学校は地区の中心部にあつて、旧中山道に面している。JR高崎線からも近く、列車からよく見える。熊谷駅で一緒になる上越・長野新幹線も当然近くを走っている。昔も今も交通の要衝の地なのだ。

折角なので学校の中に入っていくと折良く、校長の島村明義先生がおられてお話を伺うことができた。久下神社があり、久下直光、重光二代の菩提を弔う東竹院というお寺もあつて、それぞれに由緒を記す標識板も整備されている。地域の人達は自然と久下氏のことは知っていて、特に学校で教えることはしていないとのこと。この学校で特筆すべきは、生徒達

が行っているムサシトミヨという魚の飼育活動についてである。

埼玉県の県魚ともなっているこの魚は、世界でここ久下地区にだけ棲息しているという。巣を作るという珍しい習性のある魚で、冷たく澄んだ水の中にしか棲むことができない。当然のこと、絶滅危惧種である。

久下地区にはかつてこの魚を棲息させるきれいな湧き水があった。今では地下から水を汲み上げているそうだ。地区内には県のムサシトミヨ保護センターがあつて飼育しているが、久下小学校でも生徒達が飼育を行い、種を絶滅から救うために協力しているのである。

環境の良好さを示す指標でもあるこの魚の保護には地区を挙げて取り組んでいて、ムサシトミヨは、今や久下氏以上に、地域の人々の誇りであるようだった。

ところで、今回は行ってみなかったが、熊谷市久下から東に二〇キロメートルほど離れて加須市にも久下地区が存在する。この辺りまでかつて久下氏の勢力が及んでいたのだろうか。しかし、加須市には久下小学校はない。

◆久下姓について

氷上（丹波市）には久下姓が多い。この人達は概ね久下氏の子孫と見ていいだろう。丹波市の電話番号帳によると、青垣町に一人、市島町に六人、柏原町に一人、春日町に五三人、山南町に四七人、氷上町に二七人、合計一四七人を数える。このように旧久下村を含む山南町だけでなく、ほぼ丹波市全域に分布していることがわかる。

調べた電話帳は、手元にあつた一九九七～八年のもので、やや古いが問題ではないだろう。電話番号帳に載っている丹波市全体の人数は約二万人である。従つて、比率で言うと約〇・七パーセントになる。

また、通学区域が氷上とそっくり重なる柏原高校の卒業生名簿（二〇一二年発行）によれば、全体約五万人のうち久下姓は二八四人、約〇・六パーセントである。この名簿では、姓が変わった人の場合、現姓と旧姓の両方で載っているので、二人に数えた。しかし、どの姓についても同じなのだから、このことが結果に大きく影響することはないと考えられる。

日本で最も多い姓とされる佐藤姓、鈴木姓が日本人

全体に占める割合はそれぞれ、一・六パーセント及び一・四パーセント（インターネットによる情報）だそうだから、〇・六〜七パーセントという数字は非常に大きいと言わなければならない。

一方、熊谷に残った久下氏はその後どうなっただろうか。と思い、熊谷市の電話番号帳を見ると、何と久下姓は一人もいない。また、加須市にもいない。私に熊谷高校を卒業した友人がいる。念のため、その友人に同窓会名簿（二〇〇五年発行）を調べてもらったところ、やはり久下姓の人はいないという。

久下氏が丹波に移動したとき、一族全員がついて行ったとは考えにくい。現に『熊谷市史』には、室町時代までは残った久下氏が土地の地頭職などを務めていたとある。その後、いつしかその子孫は絶えたというのだろうか。いずれにせよ現状は、一族がすっかり氷上に移った形になっているのだ。

しかるに、私はたまたま個人的に、熊谷の近くに住んでいる久下姓の人を知っている。熊谷市に隣接する鴻巣市にお住まいの久下善生さんである。久下さんは関東氷上郷友会の会員である。つまり氷上の出身なの

だ。久下さんが現在地に居を定められたのは一九八八年だそう。ということは、実に七百六十七年ぶりに里帰りを果たされたことになる。

◆久下谷と久下“原”と

氷上の久下において、久下氏の居館があったのは現山南町の玉巻地区^{たまき}である。ただし、私たちは玉巻地区という言い方はせず、玉巻部落、あるいは単に玉巻と言っている。

そして、久下氏の城郭である玉巻城が玉巻の西に位置する小高い山の上にあったという。私の実家は玉巻の隣の岡本（部落）だが、この玉巻城があった山の南にある。家の裏が直ぐこの山で、山の足下と言ってもいい地点である。

子供の頃、そして故郷を離れてからの帰省の際に私はこの山に何度か登っている。家や田圃のある平地とは百メートル余りの高度差だが登り道とはなく、木の密集した急な山腹を直登することとなり結構きつい。頂上には狭いながらやや平らな面がある。子供の頃から一人で山に入って夢想するのが好きだった私

は、ここにはかつて城があったかも知れないなどと考
えては、それを少年の突拍子もない空想に過ぎないと
自分で否定したりしていた。ところが実際にここに久
下氏の城があったということを『山南町誌』で知った
ときには本当に驚いた。私がそこに城跡を想像したの
は、ひょっとして霊視だったのだろうか。

それは余談として、その山頂からは旧久下村のほぼ
全体を一望することができる。と言つても、人々の生
活している平地の部分は極めて狭い。周りはほとんど
山である。ただ、南西の方角だけは少し山が切れ、播
州方面に向かって開いている。

このように、氷上の久下村は加古川の上流である
篠山川が播磨平野に達する直ぐ手前のところで、川
に沿つてわずかに開けた土地である。その幅はせいぜ
い一キロメートル（そして長さは五キロメートル）ほ
どだ。そこは久下谷と呼ばれることもある。谷と言つ
てもいわゆる溪谷ではなく山あいの地という意味であ
る。確かにこの言い方は地形の実態をよく表している。

これに対し、熊谷の久下は関東平野の、真ん中では
ないまでもその一角にあつて、まったく広々とした土

地である。すぐ傍らを流れる荒川は、その兩岸の堤防
に挟まれた川幅だけで一キロメートル近くある。西の
方を見れば遙かに比企の丘陵地帯とその先に続く秩父
の山が望まれる。一方の東の方角にはおよそ山という
ものが見えない。

昔からずっと同じ地形だったわけではないだろう。
荒川はその名のとおり、大雨で洪水が起るとたびた
び流路を変えたことと思われる。現に、久下地区には
元荒川と称する蛇行した川筋が残っている。しかし、



久下橋より熊谷市久下方面を見る。広々とした
土地だ。

概してこの辺りが起
伏の少ない広大な土
地であり続けたこと
はほぼ間違いないだ
ろう。私には、その
ような広い草原を馬
で駆けめぐる関東
武者の姿が目につか
ぶ。そして、ここを
久下「原」と呼びた
い気がする。



熊谷市には上久下もある。「上久下」のバス停。

およそ八百年前の草原から、はるか丹波の地を目指して旅立った久下氏の一族。そのとき彼等の胸中はどんなだっただろう。都に近いところに行くという期待感も多少はあっただろうか。それにしても、長い旅路の末に栗作郷に着いたとき、彼等はどんな思いでその谷あいの風景を眺めたことだろう。

（追記） 本文を書いている途中で、文中に登場していただいた久下善生さんに見て貰っていたところ、後日、次のようなお便りを頂いた。

「連休の前半にアパート住まいをしている息子が帰ってきたので、久下姓の話をしたら、大変盛り上がりました。」

息子が言うには、高校時代、部活動の地域大会の受付の高校生が久下という苗字で、別の高校ながらも苗字で話が弾んだそうです。その人は大宮在住だったそ

うで、ほかにも久下姓の人が大宮にいるとのことでした。なので、息子は大宮の久下姓は熊谷の久下家の系統ではないか、という説を唱えました。

そうこうしているうちに、熊谷へ行ってみようということになり、久下神社へ行ってみました。久下神社は社務所もなく、日ごろは無人です。そこへ近所の人が見れ、久下家のことなら東竹院というお寺のほうが詳しい、と教えてくれました。東竹院には久下直光と重光の二人の墓があるとのことでした。

行ってみると確かにありました。住職さんは不在だったのですが、若い僧の方が丁寧に案内してくださいました。その方によると、『埼玉の久下家は一族で一斉に移住したのであって、埼玉に残ったものはいない。大宮の久下姓も兵庫の久下姓が再度拡散して関東に來た人であろう。』と、息子の説はあっさりと否定されてしまいました。」

私（久保）が思うのに、この若い僧侶が言われたこととの前半は、『熊谷市史』の記述にも反していて賛同しかねる。後半については、しかし、何とも言えない。

（昭和17年、山南町岡本生まれ／元海上保安庁水路部長）

柏高時代のこと

西 畑 健 一（春日町）

僕と丹波との縁は父にある。

僕は昭和六年に東京で生まれた。父が西陣帯地問屋の東京店に勤めていたので、日本橋で育った。昭和二十年三月十日の東京大空襲で家が焼け、明治座に避難して九死に一生の思いをし、父のふるさとの丹波氷上郡大路村下三井庄（現、春日町）に身を寄せた。当時中学二年の僕は柏原中学に編入し、昭和二十五年まで丹波で過ごした。

父は明治三十六年大路村に生まれ、次男で、小学生の頃から京都に奉公に出された。震災後の帝都復興で一新した東京が、これまでの小売り商いからデパート経営に転換して、父は京都から東京店に移り、京都生まれの母と結婚して僕が東京で生まれたのだ。母方の祖父は西陣の機屋だった。

隅田川のほとりの現在東日本橋の小さな家は、ガス、

水道、水洗トイレの二階建てで、当時としては最新の設備だったのだろう。

本家の伯父は、後に大路村の村会議員や下三井庄の照仲寺の檀家総代などを務めたし、叔父は大工の棟梁として、主に京都での仕事をしていた。一番下の叔父は篠山の鳳鳴中学に通い、大阪高等学校から東京帝国大学に進み、広島県の福山や名古屋の地方土木所長などを務めた。戦前、叔父は東京の僕の家から東大に通っていた。

僕の丹波での生活は、戦時中の昭和二十年から終戦時の柏原中学、戦後の学制改革から新制高校に変わり柏原高校第二回生として卒業するまでの五年間で、戦時中の最も甚だしい食糧難の時代だった。サツマイモの蔓からタンポポの根、ワラビや筍、田螺、蛙、メダカまで食べられるものなんでも食べた。そして終戦直後のすさまじいインフレ時代。ともかく物価は一週間といわず数日ごとに上昇した。その間、父は疎開者たちのために今でいう生活協同組合のような組織をつくり、農協から野菜を仕入れ戦災者たちに配給したり、柏原の呉服屋と契約して戦災者の古着を売って生活の

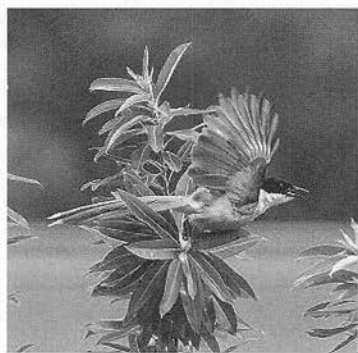
足しにした。

なにしろ戦前の二十数年、せつせと掛け続けた生命保険が満期時には二十円、タバコ一箱分にもならない。僕たちは疎開者だったから自転車を買えず（当時は米でしかそうした闇物資は買えなかった）大路から黒井まで片道二里、往復四里を歩いて通学した。黒井から柏原までは汽車通学、後に木炭バスが通学のようになり、自転車も買えるようになって自転車通学をしたのだが、これらの経験は心身の鍛錬には不可欠なものだったのだろうと思う。

柏原高校第二期生。一年上の先輩たちは終戦直後の旧制中学時代は尼崎の工場に勤労働員され、柏原にはほとんど戻ってこなかった、授業も新制高校移行の中途半端なものだった。僕たちの代になって生徒憲章や生徒手帳、校章などが決められ、クラブ活動も始まった。奇しくも旧制中学の第二期生に、総理大臣になった芦田均がおり、当時校長で同期生の植木孝之助のよしみで、総理在任中、柏原高校で講演会が行われたことがあった。ともかく旧制中学、新制高校と制度が変わり、新制高校時には旧女学校との合併もあった。僕

たちの学友には、荻野、小田、芦田、細見、由良、赤井、足立など、中世からの丹波豪族の家系を伝えるものも多く、また大阪、尼崎、神戸などで戦災を受け、転校してきた同級生もかなりいた。

昭和二十五年上京。日本橋浜町から法政大学文学部に通い、卒業。千葉県市川市に移転。現在も在住している。昭和四十六年から角川書店に勤務、退職後は年金生活である。後輩たちにこうした時代があったことを知ってもらうのも必要かと思い、綴ってみた次第である。



(撮影：岡吉明さん)

長年の思いが叶った日

森 田 栄 子（柏原町）

私には十年以上も前から故郷に帰ったら ぜひ一度行つてみたいと思つてゐる場所がありました。私の母は植木や花が大好きで、たくさん植えて楽しんでました。

母が亡くなった今でも実家に帰ると季節ごとに花や果物が迎えてくれます。

二十年代前のことですが、氷上町にある「ザ・サイプレスゴルフクラブ」というゴルフ場のオーナーがシャクナゲを分けて欲しいと言われ お分けしたそうです。

それから毎年 花が咲くと「今年も綺麗に咲きましたので見に来て下さい」と、お電話して下さいましたそうです。私も一度見て見たいなと思ひながらも花が咲くのは四月後半から五月初め頃、なかなかその時期に里帰りする機会もなく過ぎてしまいました。

そのうちオーナーも変わられたと聞きました。

四月末のある日、義父母が揃つてデイサービスに出かけ自由な時間ができました。お天気も良いし、今なら、まだ花が咲いているかも知れません。絶好のチャンスです。思い切つて出かけました。でも内心不安もありました。

母が亡くなつてからでも十五年。オーナーも変わられ、もうなくなつてゐるかも知れないと期待半分 諦め半分の気持ちでした。道路標識を頼りに細い道を進んで行くと小さな小屋のような建物が見えてきました。その前に花をつけたシャクナゲがありました。

もしかしたら、これが母のシャクナゲの花かも知れないと思ひ、わくわくしながらシャッターを切りました。

それから先へ真つ直ぐ進むと、ゴルフ場の正門の手前から丈が2m位もあるシャクナゲに先程の花よりも格段に立派な大輪の花をつけたシャクナゲが一面に咲いていました。

正門から玄関へ通じる綺麗に手入れされた広い庭に、背丈よりも高い枝にピンクや白の大きな花をつけ

たシャクナゲが一面に咲き、みごとな眺めでした。

ピンクのシャクナゲは実家の庭にあるのと同じ花。おそらくピンクの花は母のシャクナゲだろうと思い、そう思うと、とても嬉しく今も元気で立派な花をつけていることに感動しました。

花の横に立って写真を撮っていると、母と並んで撮っているような気持ちになり、二十年近い間大切にお世話して下さり、こんなに大きく立派に育てて下さったゴルフ場の方にも感謝の気持ちでいっぱいでした。

ふるさとの方々の暖かさをしみじみ感じると共に、母が育てていたシャクナゲの花がゴルフ場で咲いているのを一度見てみたいという長年の思いが叶った、とても充実した一日でした。



ハルピンの思い出

木呂子 恵美子（春日町）

七十一歳でようやく初孫を授かり、たった一人の孫娘の成長に幸せ気分を沢山もらって来た。今年は八月末で満四歳。幼稚園生になった。思えばあの大変な時代を過ごした私の年に近づいた。今は幸い平和な日々だが、世の中、だんだん騒がしくなってきた、この子の先行きが心配だ。戦争に巻き込まれぬよう祈っている。

昭和十九年四月、私は六歳で杉並区荻窪の桃井第二国民学校入学、父は軍医で出征中。東京も空襲が始まり、食糧事情もどんどん悪くなり、いつもお腹を空かして、甘い物や果物等もあり見る事ができなくなっていた。

そんなある日、思いがけなく学校の給食で甘い煮豆が一人にスプーン一杯ずつ配られた。全部で六粒位のそれを一粒大切に食べて、残りをそっと包んで、家に居る母や弟にと持ち帰った。すると二年生の姉も同じ

ことをして、二人で母を泣かせてしまった。

どんな空襲もひどくなり、その年の正月、四番目の生まれたばかりの弟を百日咳で、父の顔を見ることなく亡くしていた母はハルピンの実家（祖父は満州生活四十年、外語のロシア語科を出て十一歳の女学校出たての祖母を連れ満州に渡り、満鉄の切符切りから始まり、時には生命がけの仕事もしたと聞く。その頃はハルピンで国際運輸の社長をしていた）に疎開のような格好で、一九四四年六月、三人の小二の姉、小一の私、三歳の弟を連れて五日位かかってハルピンに辿り着いた。

下関から関釜（かんぷ）連絡船でプサンへ、そこから列車に乗り継ぎ、結構大変だった。船ではアメリカの潜水艦に追いかけられ、皆救命袋をくくりつけて甲板で海に飛び込む準備をしたり、恐い思いをしたが、ハルピンではまだ空襲もなく食べ物も豊富で、私は転校した学校も皆大陸的というか、のびのびしてロシア風の街や建物や、石だたみのキタエスカヤ、松花江（スンガリー）の川遊びや、祖父の家。私は黒いレースのような鉄堀に囲まれた、ライラックにりんご、梅等花

がいつぱいの庭、北海道の古い建物のようなレンガ造りの家、皆お気に入り、一年後に来る大変な時を知らず、束の間の平和な楽しい時を満喫していた。

一九四五年、ソ連参戦、八月十五日、日本無条件降伏。その後は、それまでの中国人の恨みやソ連軍の攻撃が一般の日本人に向けられ、あちこちの家が略奪にあたり、殺されたり、色々な噂を聞いて戦々恐々と日々を暮らしていた。

ある日、外が騒がしくなり、玄関のドアをどんどんたたいたり蹴ったりする音、そのうちに中国人の声で「オクサン開けて下さい。私が殺される」と必死の声。男の人が出たら即、殺されるだろうと、ロシア語の話せる母が思いきって出て行く。姉と私は母が心配で両側からしがみついている。ドアを開けるとお酒に酔って、真っ赤な顔をした大男がいきなり母にピストルをつきつける。私たちは声の限り泣き叫び、母にしがみつきの、その声で怯んだすきに母はピストルの銃口を向こうに向けさせる。母のロシア語の効果も有ったのか、酔いもさめ、私たちも必死でお茶やようかんなどでもてなして、明け方帰って行くまで、長い怖い夜だった。

こんな事が有り家族皆弱気になっているところ、母のハルピン小学校時代からの親友一家、お医者さんの父と母、親友と三人の娘、我が家と同じように連れ合いが出征しているので六人家族、似通った家族構成で、お互いに行ったり来たりして幸せな人達だった。一家六人は余程恐い目にあつたか服毒自殺してしまつた（後日、私より一つ下の晴美ちゃんが生き返り、知人に家に連れて来られ、一年余、一緒に暮らし、一緒に引き揚げて九州の親戚に引き取られ、その後、戦地から帰つて来た父親と一緒に住むようになったのだが）。これで母も相当がつくりきて、今までためらつていた人も集団自殺することになり、祖父母、伯父、伯母、私たち総勢十五人がお座敷に車座になつて、皆前に湯のみ茶わんに水が入っている。各々首から青酸カリ入りの袋を肌身離さず持つていた。いざ飲む時になつて祖母の薬が、どうしても見つからない。一家心中は取り止めになつた。

その後、祖父の家はロシア軍の司令部になるので、小さなアパートに引っ越し、皆生きる為に色々苦労しながら、二十一年九月の引揚げの日を迎えた。リュツ

ク一つでハルピン駅前広場に最後の引揚げ団数千人、日本人が集合している所、祖父は八路の役人が来て、名前を呼ばれ、「一寸取調べがあるそうだ。母さん（祖母）を頼む」と一言残して。

六十三歳だった。荷物を背負つたがつしりした後ろ姿を私は映画のシーンのように覚えている。帰国後三年経つて解つたことだが、祖父はこの日から二週間後の十月五日にハルピン郊外で銃殺されたそうである。「文化戦犯」という罪名で。

民間人であつた祖父。四十何年の大陸の仕事の中で、太つ腹の苦勞人と言われ、現地の人からも好かれていたと聞く。その後四十日以上の大変な引揚げ道中の後、胡蘆島（コロト）から引揚げ船に乗り博多に着いた。博多でそれまで必死で私たちを守つてくれた母が高熱を出し、姉とおろおろと看病、やっと熱が下がった。父が元気でインドネシアから京都に帰つてきていることを告げられ、「あの時、死なないで良かった」と母と喜びあつた。

（昭和13年1月18日生まれ、春日町多利出身／平成元年、主人死去、独り歴25年）

ふるさと『田路史』から

荻野 哲 男（柏原町）

世の中は殺伐とした事件が多く、せわしく時が流れていく中で、もう少しゆったりと、穏やかな気持ちで過去を振り返り過ぎてみたいなあと思っていたところ、今年四月末に、ふるさと丹波に住んでいる甥から、『田路史』が出来上がりましたので読んで下さい。ふるさとを思い出して欲しい」との添え書きと共に届きました。

私は昭和十一年に田路に生まれ、昭和二十九年までの十八年間で育ち、高校を卒業と同時に上京して来ましたので丹波を離れて五十九年になります。『山ざる』誌愛読のみなさんには、田路と言つてもどこにあるのかさっぱり解らん……という人が多いと思います。私が生まれた時は、氷上郡新井村田路と呼ばれていました。その後、柏原町に合併され、現在は丹波市柏原町田路になりました。

私が丹波を離れる昭和二十九年は、田舎にしては比較的密集した八〇戸ほどが肩をよせあう小さな集落でしたが、現在では一〇八戸で人口は四五〇人で集合住宅もあり、当時より大変開けています。おそらく大阪までのアクセスが便利になったので通勤圏になったからだと思っています。

今回の『田路史』の発行は、自治会活動の一環として歴史研究会八名で発足し、数年を掛けて出来上がったそうです。一八五ページに至る立派な郷土史です。近隣の郷土誌も参考にさせてもらい出来上がったもので、千年以上も前からの郷土の足跡を探し出し記録にまとめる事は小さな集落の事でも大変な事であったと尽力に感謝です。

『田路史』の事を全部書くことは出来ませんが、「水」と「火」のことで過去困った事を披露してみたいと思います。村の田んぼを一キロ程歩くと柏原川が流れています。昔は水も清く初夏にはホタルが飛び交う幅二〇メートルほどの川で、普段は川底に水量も少なくさらさらと流れる小川と言つても良い程の川ですが、雨期になり大雨が降ると牙をむき、水が溢れ堤防の

決壊を過去に何回も起こしたおそろしい川に急変するのです。明治からでも明治十八年、明治二十二年、大正十年、昭和三年、昭和十三年、昭和二十二年、昭和三十四年、平成十六年と、大きな決壊だけでも八回を数える困った川です。水が溢れて困るくせに水不足の時は田より溝の方が低い地型のため水車で田んぼに水を入れる水車踏みを良く手伝った覚えがあります。大変重労働で真夏の仕事なので、現在ならば「熱中症」間違いなし、というところだと思います。



牛による農耕



水田に水車で水を入れる
水替え元踏み

何故こんなに川の決壊があるのか私なりに考えたところ、柏原川は柏原の奥深い山から一挙に雨を集めて柏原川に流れるのですが、川幅が狭い上に柏原町沖田までは比較的ゆるやかな曲がりなのですが、田路では竹安川と合流し水かさが増えるのに、急に北向きを変え稲継村を経て佐治川に合流するのです。佐治川が氾濫すると、柏原川は支流なのでさばき切れずに決壊するのです。田路にとって柏原川は困ったものです。先人達は水で苦労した事が良く解ります。

昭和七年に田路は大火事を起こした歴史があります。四月九日、この日は天気も良く、今日で言えば異常乾燥注意報が出る程空気が乾燥していたそうです。火災が出たのは午後三時ごろ子供火遊びから、村のほぼ中央付近の藁小屋から発生、当時は藁屋根の家屋がほとんどであり、折からの烈風にあおられ、次か

ら次へと燃え移り、あつと言う間に二四棟が全焼してしまいました。公民館も神社も飛び火して全焼したために、被災者は親戚や知人宅に避難したそうです。勿論、私の家も全焼し、両親は苦勞したようです。

氷上郡からは、五千八百二十七円五十八銭という、今で言う義捐金を頂いた記録が残っているそうです。他に米を十七石八斗二升三合と衣類一二〇点あまりの援助を受けたそうです。その後は農協から五〇〇〇円の借金をして家を再築したと言ひ継がれています。それ以後、子供会が中心で「火の用心」を夕方に村人に告げて回ることが今でも続いているそうです。幸いな事に死者は一人も出なかつた事は不幸中の幸いです。

ふるさとを離れて六〇年近くになり過去を振り返つて懐かしく『田路史』に目を通してゐる今日この頃です。(昭和11年3月2日、柏原町田路生まれ/18歳から50歳までアパレル会社(株)ニュースター)に勤務、退職後はコンビニ(ファミリーマート)を経営し、65歳で辞める。現在はサンデーマイニチの日々)

ふるさととは遠くにありて

池上 忠志(氷上町)



私のふるさとは氷上郡生郷村です。生郷は石生村と本郷村が合併してできたそうですが、最近の市町村の再編で生郷は消滅しました。ふるさとを喪失した

寂寥感があり残念です。

生郷は山が多く大声で叫ぶと“山びこ”が返つてきたり、濃霧で視界が遮断される日もあり、緑が豊かな寒村でしたが、鉄道が開通して石生駅ができた時には遠方から態々歩いて見物に来る人がいる程の変貌だったようです。

石生駅の近辺には商店も人の気配もあり、中心部の道路は全て完全なアスファルトの舗装道路でした。沿道には建築物が軒を連ね、多少は繁華な雰囲気もありましたが、生郷の一部分に過ぎず、農業が主流の退屈

な村落でした。

自転車さえ贅沢品で、所有している人は少なく、重量のある木材は荷車に載せ、馬に牽引させて運搬する原始的な方法が多用されていましたが、今は馬の姿は全くクルマが多く、山にトンネルを掘って新道を開設したり、高速道路までできて道路が錯綜して丹波の様相は一変したそうです。

私の生前からの丹波の道は、殆んどが土をむき出しにしたままの道路が多く、この舗装道路は際立つた特色の一つかと思えます。走路は農地が多く、建築物の少ない田圃の中を堂々とした幅の広い舗装道路が直線で貫通している様子は壮観でもあり、不均衡を絵に描いたような奇景でもありました。

私の生家の近くに高谷川という小川があります。川底が付近の農地より高い珍しい川の所為か天井川てんじやうがわと呼んでおります。川底の勾配が急で豪雨で増水すると急流になるスピードが速く、大量の水が溢れて流域の家屋が浸水で泥沼になり、回復にも時間がかかり惨状は過酷でしたが、今は堤防が強化され、溢水の危険は皆無になったそうです。

高谷川の水源は近くの山地です。ここには永祿年間に建立された古い氏神があり、近くに天然記念物のツガの大木がある黄檗宗の寺もあり梟ふくろうも棲んでいます。水源は湧水が豊富で澄み切った水流があり、岩で出来た滝もあります。甲虫や鍬形などの昆虫も捕れ、夏には度々往来しました。少し下流には随所に水溜りがあり、メダカやイモリがいました。メダカは今は絶滅危惧種になっているそうですが、少年時の回想が根強く、信じるのが困難です。

高谷川を下流に向って右側一帯が分水嶺になっています。平地の分水嶺です。平地の分水嶺は日本でも珍しいそうで、この高谷川を横切る国道の橋を「水分橋みづわけはし」と言いますが、分水嶺の意味を込めた見事な命名であると感じています。

私は昭和十六年四月、生郷国民学校に入学しました。小学校が国民学校に改称された年です。子供のころですら特に異変は感じませんでした。戦争が原因だったようです。

入学間もない昭和十六年十二月、日本は戦争を始めました。太平洋戦争です。国内では「大東亜戦争」と

名づけ、校内にも「鬼畜米英」と描いたポスターが目立つ所に貼り出され、大いに戦意を高揚されましたが、国力の差はあまりにも大きく、日本は大敗しました。

校庭は芋畑になり、毎日「あかい野」というグライダーの練習場の松林まで「のこぎり」を持って歩きました。燃料用の松を伐採するのが仕事でした。

昼食は味噌汁一杯で空腹に耐えた苦痛が、今も強烈な感慨となつて残つております。

「あかい野」は、今はゴルフ場になっているそうですが、将に今昔の感があります。

中学は無試験で、新制の柏原高等学校に進学しました。六十年以上も昔のことですから、授業や先生方のお名前も忘れましたが、何故か一年の国語だけは記憶が鮮明です。

国語は甲乙の二科目あり、甲の担当は小西先生で実に博学多才な先生でした。

「焼けにけりされども花は散り済まし」という俳句を長時間熱弁をふるつて説明されたことがあります。が、不勉強で未だに意味が理解できません。

国語乙は足立主先生。^{あるじ}万葉集に造詣が深く、古今

集などとの相違点を講義されていたお姿が目には浮かんできます。

この国語の教科書に有名な詩が載っていました。

「ふるさとは遠きにありて想うもの

そして悲しくうたうもの

よしや、うらぶれて異土の乞丐^{かたい}となるとも

帰るところにあるまじや……」

今は広く人口に膾炙されている室生犀星の詩ですが、その流行の大本^{おもと}はこの教科書です。

私も今年七十九歳。人生の大半は終わりました。八十歳でエベレストの登頂に成功された頑健な方もおられるようですが、私はむしろ病弱で、通院が多い今日この頃です。

(昭和9年7月30日、旧生郷村石生新町生まれ／第一生命保険株式会社に就職、60歳で定年退職)

藤原岩市を知っていますか

徳田 八郎衛（柏原町）

一、はじめに

二〇〇四年に日印安全保障協力の可能性を探る会議で印度を訪れた際、日本大使館の高岡正人一等書記官（現駐イラク大使）に「私の母校も柏原高校です」と告げられて目が飛び出るほどに驚いたが、もっと驚いたのは、会議出席の印度軍退役将官たちが「メイジャー・フジワラは今も印度で有名です。印度独立の恩人です。オー、貴殿は彼のハイスクールの後輩ですか」と語ってくれた時である。ところが



晩年の藤原岩市氏

今の柏原高校では生徒のみならず教職員でも藤原岩市（一九〇八—一九八六）を知る人は少ない。母校の偉大なる先輩について、限られた紙数であるが書き残しておきたい。

二、兵庫県から二人だけ陸士に合格

大正一三年に加古川線が谷川で福知山線と結ばれ、それまでは寄宿して社や小野の中学で学んでいた播州多可郡の生徒たちが丹波の柏原中学へ通学できるようになった。黒田庄町育ちの藤原岩市もその一人である。

昭和二年に柏中（二六回生）から陸軍士官学校へ進み（四三期）、昭和六年七月に卒業して秋に歩兵少尉に任官する。当時は大正一四年に始まった宇垣軍縮（四個師団の廃止により航空、機甲を充実させて陸軍の近代化を図るもの）の真最中であり、入学者も大正初期の七四〇名が三〇%ほどに抑制されて二四三名。中学からの合格者は僅か九〇名程度（他に六校から三校に縮小された幼年学校より各々五〇名強が入学）という厳しいものであった。

尚武の地、九州男児の受験が多いから兵庫県からの

合格者は柏原中と神戸中の二人だけである。これでは減らしすぎだということになり、昭和九年入学の五〇期生は五一三名に増え、幼年学校が一枚のみに減らされていたため中学校からの合格者は四六〇名程度に回復する。さらに日華事変以降は入学者数も水膨れして二〇〇〇名を超えるが、軍の中堅となる少・中佐の不足を補う術はなく、物量の日米格差に加えて日本を悩ます難問になる。

中学での愛称は「ガンイチ」、やがて「ガンジー」になる。鼻は大きく眼も大きくて奥眼で、背は六尺で頭髪は縮れるというアリアン民族の如き風貌であったから無理も無い。戦後に戦犯容疑の藤原を取り調べる英軍将校も例外なく「お前は純粹の日本人か」と質したという。三年生になると剣道部の選手となり学年末には初段となった。学力も優秀で同期八〇名の中で二番か三番。五年間を通して首席だった生徒も国語と歴史では試験前に藤原に教えを乞うようになる。その藤原にも陸士は難関であり、弟たちは毎晩蠟燭を持って土蔵の二階へ勉強に上っていく兄の姿を覚えている。電気が来たといっても、まだ農村では茶の間に5燭光

の電燈が一つだけ灯っている時代であった。その刻苦勉強は任官後も続けられ、四年後には陸軍大学校へ一発で合格する(五〇期)。四一名の同期には陸士三七期、三八期という先輩もいた。当時は「五浪」までが受験を許されたが、やがて「三浪」までと厳しくなる。

三年間学んだ陸大を昭和一三年に卒業するや再び満州で中隊長として勤務し、さらに天津で戦車の運用や整備に当たった後、昭和一四年八月には情報や謀略を担当する参謀本部第2部第8課で、それまで誰も携わったことのない新分野、現代風に記せば心理戦、広報戦の担当を命じられる。自国民に団結を求めるだけでなく、敵性国の国民にも自国の立場や理念を説き相手政府に訴えてもらう、あるいは離反させるという対外広報は欧米では最高のエリートを投入し常態化していたが、日本にはなかった。

それを戦い方だけを教えられてきた三〇過ぎの陸軍大尉に企画させるのだから酷である。北向きだった陸軍が急遽南進を迫られる一六年九月、少佐に昇進したばかりの藤原は、バンコクへ赴き対マレー工作を実施せよとの命を受ける。工作経験もなく語学通でもない

のに……陸士での最初の二年間は予科であり、旧制高校に負けないほどの教養科目を学ぶ。語学もその一つであり、時間数では四分の一を占めていた。英独仏露華のどれかを選ぶが、独仏露は幼年学校出身者がすでに学んでいるから優先的に選抜され、中学出身者は英語に殺到するが素養試験に落ちると華語へ回される。もちろん華語の重要性を認識し第一希望とする者もあるが、藤原は「英語が駄目で華語受講」だったと近親に述懐している。その藤原に与えられたのは中野学校長の「大東亜共栄圏の建設という見地から将来の日印関係を考慮に入れて作業せよ」という漠然とした訓示だけであつた。

三、F機関動き出す

泣き言は言つておれない。偽名でタイへ入国した藤原は果敢にF機関を設立する。フリーダム、フレンドシップ、そして藤原のF。最初に協力を約したのは秘密結社「印度独立連盟」書記長のプリタム・シンである。香港の監獄から脱獄した彼の同志を保護した縁で親し

くなり、その活動資金の負担、印度独立義勇軍の編成、印度人を敵性人とししない等を確認して協力を得た。マレーを守る英印軍といつても大半は印度人將兵である。マレー進攻とともにF機関も南下するが、工作は成功し続々と印度兵が投降する。現地風習尊重、捕虜への暴力厳禁、アジア解放の同志として対等の親交という方針はマレー人の好感も得て、世界の軍事専門家が驚く速さで日本軍は南下を続けることができた。

その活動は戦後に藤原が上梓した「F機関」が詳細に描いているが、圧巻はシンガポール陥落の後、五万五千人の印度人投降兵がファラ・パーク競馬場で歓呼する中での歴史に残る演説である。日印両国民が対等の立場で協力しアジア解放を図ろう、印度国民軍を結成しようと呼びかけたが、その約束を果すには頭の固い日本政府や軍首脳との折衝に寝食を忘れ不眠不休の努力が必要であつた。

戦後いち早く藤原の業績を評価したのは日本浪漫派を代表する文芸評論家、保田與重郎であるが、自己宣伝も誇張もない「F機関」は史家から高く評価され、良き翻訳者（明石陽至南山大学教授）を得て五八年に

「F・K I K A N」が香港で出版されるや世界のアジア研究者に必読の書となった。

だが幾ら実績はあつても少佐の階級では陸軍省や大東亜省との折衝は難しい。また印度国民軍編成で投降大尉が将官に昇任すると「釣り合い」も重要になり、藤原は情報畑の大先輩、岩畔豪雄大佐を長とする岩畔機関に任務を譲り南方総軍参謀として高い立場から工作を支援する。彼が後々まで誇ったのは、東京からの印度向け放送より南方からの放送の方が充実し、視聴者の評判も良かったことだ。

筆者の叔父、NHK技師の横尾直行（山南町小新屋出身）は、英国が破壊して撤退したビルマの放送局の再建と運営の命を受け、陸軍軍属となつて一八年三月、手塩にかけて準備した放送設備と共に宇品を出港する。軍の通信隊が破壊された放送機を修理して小出力の放送を開始したのに続き一七年秋季からNHKの要員が本格的な放送を開始し、さらに設備も新調したのである。正に広報戦だ。関係者の合言葉は「一〇KW放送機は一個師団の戦力に相当する」であつた。横尾の残した手記「恋飯（レンバン）島からの便り」には

印度向け謀略機関に立ち寄る場面もあるが、ビルマ向け一〇KW中波、日本人向け五〇〇W中波、印度向け一〇KW短波の三種の放送が開始され、印度向け放送にはチャンドラ・ボース率いる自由印度仮政府の人員も参加していたことが記されている。

F機関を引き継いだ岩畔は通信傍受などの科学的な情報活動を推進し、中野学校を設立し、昭和一六年の日米交渉では武官補佐官として渡米して野村大使やハル國務長官と和平の道を探り、帰国するや陸海軍省、宮内庁、さらには東條首相にまで和平を説いて回る異色の人物である。国内外に広い人脈を持つ適材であつたが、藤原ほどには印度人の心服を得られなかつた。なお機密費の支出は通常経費以上に透明であるべきだとする藤原は、機密費残額七万五千円を参謀本部に返却し、さらに有名になる。印度独立運動の指導者チャンドラ・ボースが亡命先のドイツからUボートと日本潜水艦のリレーによつて来日し印度国民軍司令官となる一八年、藤原はビルマの15軍情報参謀となり、志願した印度国民軍六〇〇〇名と共にインパールへ向かう。

四、法廷で同志を守る

悲惨な結果に終わったインパール包囲戦から藤原たちは幽鬼のような姿でビルマへ撤退する。だが英軍の追撃は迫り、生き残った15軍将兵も多くがビルマ防衛戦で命を落とす。タイまで撤退できたのはごく一部であった。部下の撤退を見るまで後退しないチャンドラ・ボースを守ってF機関や岩畔機関で活躍した将校の多くが戦死している。だが運命の転属命令が藤原を救う。

一九年一二月、後退の中で中佐に昇進していた藤原は陸大教官として東京へ呼び戻されたのだ。神の御手により、と見る人もあろうが決め手は人事である。彼の素質を見抜いて工作機関長としたのも、彼の得難い体験を後輩に伝えさせたのも人事であった。数少ない内地転属者の殆どが将校行李に砂糖等の貴重品を満載して帰国する中、藤原は私物さえ捨て15軍司令部勤務者の家族への手紙を詰め込んだ。

焼け野原の東京から甲府へ疎開していた陸大で教壇に立つ藤原は、この非常事態においても続けられている旧態依然の戦史教育を厳しく批判した。貴重な人材であった藤原は二〇年四月、鈴鹿山脈以西の本土防衛

に編成された第二総軍参謀として、さらに57軍高級参謀として西へ向かうが、終戦時にはマラリアが再発して病床にあった。それも癒えぬ秋、藤原は請われて印度のオールドデリーへ飛んだ。印度国民軍将兵二万人が反逆罪で裁かれる法廷に弁護側証人として立つためである。戦時中、三千人の邦人が収容された古城レツドフォート（別名プラナキラ）に五ヶ月収容されながら同志の弁護に務めた。英軍は見せしめに是非有罪としたい。だがネルー率いる国民会議は、議会でも法廷でも街頭でも「全ての隷属国は闘う権利がある」、「彼らは日本の傀儡ではない。逆に利用したのだ」と主張した。英軍の指示する日本降伏戦勝記念行事にも印度人は参加せず、逆に敗れた日本を悼んで喪章を付けた。民衆の要求は、被告たちの無罪釈放だけでなく印度独立要求となりデモ・スト・暴動となって全国に広がり、海軍艦艇でも反乱が起る。ついに英国は裁判放棄のみならず印度独立承認にまで追い込まれた。

次は藤原自身への戦犯容疑取り調べである。英軍情報部にとって藤原は不倶戴天の敵だ。シンガポールのチャンギー監獄へ移送され、華僑虐殺の罪を着せられ

て連夜のように別れを告げる戦友の声と絞首台の響きを聞きながら百回に及ぶ過酷な尋問を受けたが、捕虜に暴行も強制も行っていない藤原や他のF機関関係者は有罪にならなかった。でつち上げと復讐の戦犯裁判という点では英軍も変りはないのに何故藤原を有罪にできなかったのか。それは最後に尋問した大佐が、ど素人の藤原が、どんなテクニクである成果を挙げたのかをつぶさに語らせ、「民族や敵味方の相違を超えた人間愛と誠意しかなかった」と聞いて「我々の植民地管理では考えられない。グローリアスサクセスだ」と称賛したのが全てを物語っている。英軍はF機関に兜を脱いだのである。

敵からの賛辞は最高の勲章だ。一般にはM I 6の名で知られる英国のS I S（秘密情報部）は戦時中の記録を公開し、その評価を戦史の権威キース・ジェフリー教授に委託したが、「欧州戦域ではエニグマ暗号の解読も敵占領地での工作も目覚ましく今大戦勝因の一つとなったが、アジア戦域では冴えない結果に終わっている。敵上陸地点の予測は外れた。敵占領地の住民は欧州のように協力しないし、民族や人種の壁を乗り越越

えた工作員と住民との一体化もなかった。残留謀者も活動できなかった」と厳しい判定を受けている。

五、藤原と丹波

陸大学生となった藤原は、柏原で手広く新聞販売業を営み第一〇代町長でもあった藤井節太郎の次女美穂（柏原高女三〇回生）と結婚した。長女脩子と次女美由紀が誕生するが、藤原は南方勤務の間、家族を柏原町屋敷の藤井家に託した。一九年に崇広幼稚園へ入園した脩子は、横町から大手通りまで出てきて見送ってくれる母や東奥から流れてくる川で洗濯する母の姿を今も覚えている。F機関に協力したマレー在住のハリマオこと谷豊青年の行動は「マライの虎」として映画化されたが、F機関や藤原の活動はマレー進攻作戦終了後も伏せられたままである。しかし柏原では藤原の活躍が囁かれ、「藤原大佐」と呼ばれていた。

家族を大切にする藤原は、ビルマから帰国して大雪の黒田庄と柏原を訪れた後、住宅・食糧事情が悪いのを承知で甲府へ家族を帯同した。脩子は甲府で国民学校へ入学するが、父の相次ぐ転属により二年生では沼

貫村（氷上町）辺田から沼貫第二小学校へ通い、三年生では黒田庄小学校へ通っている。胸を病んだ母の入院・転院によるものだが父は戦犯容疑で囚われの身であり、幼い姉妹には「おしん」に劣らぬ苦勞であったと思われる。

二二年六月、チャンギーから無事に釈放された二〇〇名を引率して藤原は二度目の帰国を果たすが、それを待つかのように美穂は帰らぬ人となる。だが歴史の証人である藤原を国は未だ放さない。復員局戦史編纂室での勤務を要請された藤原は病弱だった美由紀を辺田に嫁いでいた妹に託し、脩子一人を連れて上京する。未だ焼け跡の残る東京であったが、女学校で教鞭を執る青柳吉美と結ばれて再婚。三女逸子が誕生するが、二五年後に夫となるのは奇しくも柏原高校出身の頼澤豊であった。

陸士や陸大の旧友よりも遅れて陸上自衛隊に入隊した藤原は、調査学校長、第一二師団長、第一師団長等の要職を歴任するが、昔の同志が印度、パキスタン、インドネシアの大臣や国会議員として次々と表敬に来るから部下は大変だったに違いない。没後に編纂され

た追悼文集に、すべての元部下が「他の人と違う雰囲気、忘れられない人物」と記したが、藤原の選挙戦対応も他の人と違うものだった。

戦時中から「アジアの中の日本」を強く意識していた藤原は、印度、ビルマの遺骨収集に追われながらも四六年の参院選に出馬する。選挙準備中に作成したポスターには、印度の人々と握手する藤原の姿に「藤原機関」と大書してあった。後に陸上幕僚長を務める脩子の夫、富澤暉は「私なら藤原機関などと書かないで上段に大きくF機関と書き、中段に『君はF機関を知っているか』と書き、下段に『それはFREEDOMのF、FRIENDSHIPのF、そしてFIWARAのFのことだ』と書きます。本も売れるし名も売れる。日本人は横文字が好きですよ」と直言した。黙したままの舅に富澤は、「五〇万票とるのはイリリジョンの世界での闘いです。錯覚を起こさせるPR技術が必要です。私は現役だからお手伝いできませんが、友人に広報コンサルタントがいるから紹介します」と続けるが、「そんな錯覚に乗って当選したくない。まだ時間はある。全国を隈なく回り、多くの人と直接接触し

て本当に共感してくれる人に投票してもらおうのだ」という答えが強い口調で返ってきた。すでに「他の人とは相当違う」と思っていた富澤は、これが藤原なのだと再認識したという。富澤の予測通り作戦は失敗した。

小平の調査学校に藤原が「智魂技」と記して建立した石碑は、情報畑に進む学生を今も見守っている。誠だけを武器として懸命に尽くしたが智恵と技術には大きく欠け、米国に引き離されたことへの教訓である。しかし智恵と技術だけに依存した、魂のない情報収集や分析への警告も含まれている。丹波が育てた稀有な情報将校の遺言といえよう。藤原の没後、国内外から多くの原稿を集め『藤原岩市追憶』を編集したのは美由紀の夫、関哲夫曰大教授であつた。

六、エピソード

一六年九月、三菱商事シンガポール支店長の徳田富二（柏原中学九回生、筆者の父）は、重荷を降ろしてホッとしていた。社員の家族は春に帰国させた。徳田が次期外交関係委員長に推挙されていたロータリークラブでの「国際紛争の調停に乗り出そう」という無邪

気な一会員の提案も良識ある会員への根回しで採決させなかった。最も懸案だった「臨時社員」も無事に脱出した。これについて「私も国に奉職する身です」と大見え切つて訊ねた際は、「軍の人間を預かつていた。柏中の同級生大西瀧治郎が、雇員にしてくれと制服姿で頼みに来た時と同じだよ」と真摯に答えてくれたが、開戦後、英官憲に拘束されマレー、ビルマ、印度の在留邦人三〇〇名と共に印度のレッドフォートに抑留された際の記録『プラナキラの月』には「マレー事情に精通し特別班の仕事に当つていた社員に危険が迫つたが無事に列車に乗せてタイへ脱出させるのに成功した」と簡単に記すのみで、文字では残さなかったのだ。英側の通信検閲や尾行に根を上げていた徳田であるが、スマトラの椰子園管理に訪れた際もオランダ官憲の執拗な尾行を受けたことを記している。ところが同じ時期に参謀本部から藤原が偽名でスマトラ・ジャワへ出向いているのだ。これが偶然なのか二人が会う予定だったのかは判らないままである。

（昭和13年生まれ、柏原町母坪出身／現在は岡平和・安全保障研究所客員研究員／浦安市在住）

知っていましたか？ 丹波の東京直通バス

篠山と東京を結ぶ高速バスがある。篠山口駅から神戸を経由し、高速を利用して東京に。ツアリーの運営はアミイファクト株式会社。運行は船井郡京丹波町の有限会社山一サービスだ。料金は4千円ほど。こんなバスがあるとは多くの人がまだ知らない。もっと知ってもらって毎日の運行になってほしいものだ。

丹波の高校も海外に 修学旅行の時代

柏原高校と氷上西高校の2年生が海外に修学旅行を実施した。柏原高校は3泊4日で台湾に、氷上西高校は4泊5日でマレーシアを訪れた。

両校とも海外への修学旅行は初のこと。台湾では地元の

高校と料理やスポーツを一緒に楽しみ、「千と千尋の神隠し」のモデルになった九份観光などを楽しんだ。都会の高校が修学旅行で海外に行くのは珍しくないが、あの丹波から海外旅行に行く時代になったと聞くと隔世の感がある。

全国の女子野球の聖地 になるか？丹波「スポーツピアいちじま」

かつて日本には女子だけのプロ野球チームがあった。昭和25年頃のこと。『大阪ダイヤモンド』『スターズ』や『大阪日シスターズ』などの女子プロ野球チームが4チーム。名古屋にも『レインボー』など。しかし2年ほどで消滅。高校に初めて女子硬式野球チームができたのは1995年のこと。しかし、まだ日中親善試合のためにソフトボー

ル部の選手を臨時で硬式野球同好会に仕立てた一時しのぎの急造チームだった。その後、全国に女子硬式野球部が誕生。女子でも普通に硬式野球を楽しむ時代になったのだ。

全国高等学校女子硬式野球連盟は丹波市市島町上竹田に事務所を置く。だから丹波は高校女子硬式野球の中心地。全国大会が開催される『スポーツピアいちじま』はその拠点。今年も春に全国から集まり熱戦が繰り広げられた。全国規模の大会が丹波で開催されるなんて何だか嬉しい。

やっぱ強いぞ、氷上 高校女子バレーボール部

氷上高校の女子バレーボール部が全国レベルにあるのは承知の事実。全国大会への出場は33年連続出場で、日本記録を更新中。井上香織選手な

どのオリンピック選手も排出している。兵庫県では敵なし。今年2月の新人でも3連覇。通算27回目の優勝とダントツに強い。今年の春高では初戦敗退に終わったが、その1か月後の新人戦で優勝だから、今年のインターハイも期待できそうだ。

丹波PRアドバイザー の村上さん、ガンバる

丹波市の魅力を発信するPRアドバイザーに元NHKアナウンサーの村上信夫さんが就任し、今年で2年目。これまでグッチ裕三さんや小山明子さんを丹波に招いてトークショーを開催してきた。丹波の魅力を知ってもらうこのような取り組みが、いつか大きな成果をあげる日を期待したい。全国区なるか、丹波！

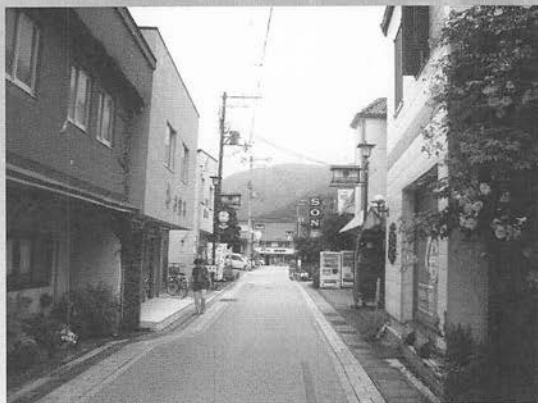
(井徳正吾)

丹波を撮る

写真と文：徳田八郎衛

柏原町石田通

石田通は様変わりしましたが、いつも客の自転車が店頭にある谷書店、SONYの看板を掲げた丹波ラヂオ、突き当たりの「わかさや」は健在である。



谷書店では、貴重なスペースを割いて、「やまざる」と会員制研究誌「丹波史」の紹介・販売が行われている。有難うございます。

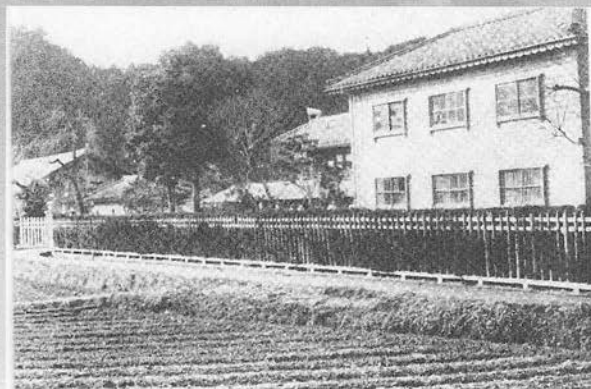
安藤広太郎先生の胸像も、生家跡の斜め向かいの空き地に建てられました。



丹波を撮る

昭和初期の柏原

(文：徳田八郎衛・写真：藤原家提供)



「藤原岩市を知っていますか (P43)」参照

藤原が学んだ県立柏原中学校前景（昭和2年頃）。明治30年竣工の初代校舎を伝える貴重な写真である（昭和6～7年に建て替え）。1回生が植えたクスノキは今の姿に近い大樹に育っている。



剣道部員として活躍した藤原（前列右）。3年生で正選手を務めた（大正13年）。



柏原町屋敷の藤井家を訪れた藤原夫妻。左から長女脩子を抱く藤原と美穂、続いて美穂の姉、清美と夫の森下邦太。右端2人の氏名や藤原夫妻との関係は不明（昭和14年頃）。敬称略。

丹波を撮る

大型商業施設の丹波戦国時代



平成8年、生協コープこうべを中核とする商業施設「コモレ」が柏原町母坪に、同10年、イズミとコーナンを中核とする「夢タウン」が氷上町本郷に開店すると両施設内や両者を結ぶ1kmの道路沿いに青山商事、ユニクロ、薦屋、Joshin、マクドナルド、ガスト、業務スーパー等の著名な店が湿田を埋め立てて続々登場した。さらに平成24年、ジュンテンドー、イオン、K'sデンキも参戦し、大型商業施設の丹波戦国時代が始まった。平成25年元旦9時の店頭風景を御覧下さい。



イオンは元旦でも8時に開店し、先住商業施設に挑戦した。

柏原町下町のサトウは店名を改め、朝8時から夜12時までの営業で応戦する。



丹波を撮る



9時開店の業務スーパーではまだ客はまばら。平日なら10時開店のコモレは、元旦は11時開店というので客は皆無かと思ったら、テナントの電器店が先着順に配る景品を貰おうという人たちで既に行列が…全員が在住外国人の皆さんです。「シントーではないけど私たちも明治神宮や八坂神社のような場所があれば皆さんと一緒に行きたいですよ。ソウソウ、

TDL もいいね。どれも丹波には無くて残念です」とホンネで語ってくれました。



田舎体験施設「かじかの郷」

萩野 祐一

(丹波新聞社社長)



丹波市の北端西部に位置し、紅葉の名所として知られる名刹「高源寺」がある地域、青垣町神楽に昨年12月、築120年の古民家を活用した田舎体験施設「かじかの郷」がオープンした。田舎への移住を考えている都市部住民らが1カ月単位で借り、地域住民との交流も楽しみながら田舎暮らしを楽しむ施設だ。オープン以来、利用者が絶

築120年の古民家を活用した田舎体験施設「かじかの郷」

えることはなく、上々の滑り出しを見せている。そんな「かじかの郷」を紹介する。

丹波市内の各地方では過疎化などで人口減少が進んでいる。神楽も例外ではない。1996年、神楽の人口は1800人。それが今年3月末には、1381人。残念ながら着実に人口は減っており、青垣町では、町内にある4小学校の統合に向けて協議が進んでいる状況だ。

いかに人口増を図るかは喫緊の課題であり、その一つの方法として移住の促進がある。「かじかの郷」はそのための施設でもある。兵庫県の「田舎暮らし推進モデル事業」として整備された。丹波地方では、「かじかの郷」以外に篠山市福住にも同様の施設が整備され、今年3月にオープンした。

「かじかの郷」があるのは、神楽の中の稲土という集落で、さらに細かく言えば、菅原という地区にある。神楽の中でも古民家が比較的多く残っている地区で、ホテルの名所でもある。田舎のイメージそのままの所と言える。

県や丹波市の補助を受け、空き家になっていた古

丹波通信



古民家が比較的多く残っている菅原地区

民家を整備し、備品を整えた。木造平屋建ての茅葺きアルミ屋根で、床面積は約120坪。間取りは、和室（8畳3部屋）、囲炉裏の間（8畳）、土間（21畳）、キッチン、浴室などだ。テレビ、冷蔵庫、寝具はもとより、掃除機、アイロン、鍋、お箸、お皿など、生活に必要なものはすべて整っている。利用者の中には、「家財道具を車いすばいに積んで持ってきたのに、使わずに済んだ。至れり尽くせりの設備に驚いた」という感想を寄せた人もいた。利用料金は1カ月3万5000円（光熱水費別）。

「かじかの郷」を運営しているのは、神楽自治振興会から委託を受けた「古民家活用の会」。地元菅原地区の住民で組織している会だ。『かじかの郷』の草刈りや草引き、布団シーツの洗濯なども

会員たちが受け持ち、利用者から川遊びや農作業体験などの希望が寄せられれば、会員たちが対応にあたる。この組織以外に、青垣町にイターンした人らでつくる組織もある。イターナーの視点から『かじかの郷』の運営に提案をしたり、都市部に住む友人・知人らに『かじかの郷』をPRする役割を担っている。

昨年12月のオープン時に見学会を開催。田舎暮らしに関係する団体などにPRした効果もあってか、約50人が見学会にやって来た。古民家活用の会の足立徳行さんは、「寒い冬の時期にどれほど来てくれるか気をもみました。が、取り越し苦労でした」と振り返る。オープン以来、宝塚市や豊中市、堺市など、子どもがいる比較的若い



『かじかの郷』内の和室

夫婦の家族の週末利用が多く、利用が途切れたことはない。足立さんは「買い物をするにも不便な所なのに。田舎暮らしに対する関心の高さを再認識しました」と話す。

7月の1カ月間、夫や高校生の息子とともに「かじかの郷」を週末利用した堺市の犬丸登史香さんは、フリーアナウンサーで、仕事のひとつとして丹波市の葬儀会館で司会進行の仕事を受けている。「亡くなられた方はどんな人だったのか、式の前にご遺族から聞き取りをするのですが、昔の生活につい

ての話が少なくありません。桑の木を植えていたとか、牛を飼っていたとか。そんな話を聞いているうちに、実際に田舎の暮らしを体験したくなって」と話す。

朝7時ごろ、近所のおばあさんが「え



地域住民のイベントにも使用する土間



囲炉裏の間から台所をのぞく

んどうご飯を炊いたから」と訪ねてきたことがあった。マンション暮らしの堺市では、「あり得ないこと」で、ありがたく思ったという。近所の人達の出入りは少なくなく、「堺市は人口が多いけれど、顔見知りの人はどれほどいるか。こちらは、人は少ないけれど、顔見知りは堺市より多いかも」とほほえんだ。

高校生の息子は「かじかの郷」で特別に何かをするわけではないが、まんざらでもない様子だったという。「水がおいしく、風を感じることもできる地域」と言い、「やがては夫婦で丹波市に移り住むことを考えています」と話した。冬の丹波も体験したいと、「かじかの郷」の再利用を申し込んだ。犬丸さんのような丹波ファンが一人でも多く生まれるよう、「かじかの郷」が人気施設となることを祈りたい。

会 計 報 告 書

(平成 24 年 7 月 1 日～平成 25 年 6 月 30 日)

関東氷上郷友会
会計理事・谷口 浩章
原谷 洋美

(単位：円)

収 入 の 部			支 出 の 部		
科 目	金 額	摘 要	科 目	金 額	摘 要
繰 越 金	2,269,315	郵便貯金 1,469,315	出 版 費	990,246	『山ざる』43号
		定額貯金 800,000	通信・印刷費	140,433	総会・役員会案内等
		振替貯金 0	総 会 費	652,137	総会関係支払
年会費収入	400,000	延191名	会 議 費	180,477	役員会等
総会費収入	411,000	61名	支 払 手 数 料	19,790	振替手数料
役員会費収入	188,000	47名	消耗・備品費	73,840	事務品・広告費・慶弔費
寄 付 金	280,500	延 68名	繰 越 金	2,071,547	郵便貯金 1,271,547
広告料収入	540,000	延 48名			定額貯金 800,000
冊子代収入	37,780				
そ の 他	1,875	利子			振替貯金 0
合 計	4,128,470		合 計	4,128,470	

以上

監査の結果、上記のとおり相違ありません。

平成25年 8 月 3 日

会計監査

中居 薫 子 (中居)
谷 敬 三 (谷)



近況・エッセイ

人間万事塞翁が馬

山下 文 隆（氷上町）

昨年六月に四十八年間勤めた会社（大日本塗料㈱）を卒業し、相談役に就いた。ちょうどその頃、同窓会からセミナーの依頼があり、“日本を塗った男”という演題で話して欲しいとのことであった。やみくもに走ってきた四十八年を振り返る良い機会だと思い、受けることにした。

大学も会社も自分の思いと違ったが、幸い丹波人の性格なのか、後ろを向かず出た目に向かって忠実に走った。振り返ってみると、いろいろ大変なこともあったが、その時は苦しかった高校時代の陸上競技の練習や楠木の横で聞いた一五〇〇名（当時）の応援歌を思い出し、ひたすら前を向いて走った。気がついたとき社長になっていたと、早く言えばこんなことだろうと思う。

丹波を出てから五十二年、丹波にいたのが十八年といえいいのか、丹波の生活は高校までで長くはない

が、私の人生の原点である。自分を育ててくれた山々、そして両親をはじめとする人々、辛い時はいつも原点に戻った。“私には故郷がある。辛かったら帰る場所があるんだ”と思い、いろいろな坂道を乗り越えた。思い出を振り返ってみることにする。

私は会社の本流である構造物用塗料の担当が長かったので、たくさん物件を手掛けた。一つ一つに思い出があるが、長年続いた石油備蓄タンクは北海道から沖縄まで民間を含めて二七か所あり、都合で輸入が途絶えても一七七日分の石油が備蓄してある。クレーム



東京スカイツリーをバックに筆者

を含めて思い出に残る仕事だった。また本州四国連絡橋も三ルートあり、全部で一四の橋が架かっているが、三分の一は我が社の塗料が塗られている。

東京近郊ではレインボーブリッジや横浜ベイブリッジにも我が社の塗料が採用されているが、直近では“恐竜橋”とも呼ばれている特異な格好をした東京ゲートブリッジも我が社の塗料である。と書くと、物件の獲得がいとも簡単に見えるが、どの物件も企画・設計から完成するまで長いものでは十年以上かかっている。

私の会社最後の仕事となった東京スカイツリーに話を移すが、企画は十年以上前からあったが、東武鉄道(株)が新タワー事業に取り組むと発表をしたのは二〇〇五年であった。翌年に場所が正式決定し、一四三〇億という大型物件であった。

設計を日建設計が担当し、各社塗料の争奪戦が始まった。最初は設計の段階だから入札に必要な塗料の種類、塗回数などが決められた。塗替えが難しいので一〇〇年間の耐久性を見込める塗料ということで、フッ素樹脂塗料採用となった。我が社はこの塗料については旭硝子(株)と共同研究し、一日の長があった。

設計段階ではアドヴァンテージを取り、入札が行われ、(株)大林組が落札した。決定権は(株)大林組となり、塗料各社はあの手この手の売り込みを開始した。あるメーカーは本社跡地の再開発をエサに営業を攻めてきた。普通の物件ならここで決まりだが、何しろ日本注目の物件ゆえ簡単に決める訳にはいかず、技術研究所の意見を聞いてきた。これが我々に幸いした。我が社は落札前から技術研究所と接触し、当時は我々の会社だけが実績を持っていた厚膜のフッ素樹脂塗料を薦めていた。

当時四く五回塗が普通であったフッ素樹脂塗料を厚膜で三回塗とした。塗回数を少なくして規定の厚膜を確保出来る我が社の工法は、工期短縮にも結びつき鉄工メーカー各社が飛び付き、技術研究所の力強い推薦もあり、我が社に決定した。私が社長の時だった。いろいろと困難もあったが最後の勝者となり、その夜の酒の味は格別であった。

その後、下請の各鉄工メーカーの工場で塗装され、部材が持ち込まれるのだが、現場でのジョイント部の塗装だけでも常時五〇名の塗装工が入り、高くなつて

行く度にクレームのないことを祈った。二〇一一年の震災の時は肝を冷やしたが、塗装工によると、上では五メートル程左右に揺れたと話していた。

この震災を経て二〇一二年五月二十二日開業し、この原稿を書いている時には開業一周年が過ぎ、昨日「東京ソラマチ」を含む入場者数は当初の予想を六割上廻る五、〇八〇万人を超えたとのことであった。

私の会社人生も、最後の作品である東京スカイツリーの開業に送られて六月に会長を退任した。『人間万事塞翁が馬』という諺があるが、会社人生を含めて自分の思わぬ方向に動くことが多かったが、丹波人の大らかな性格が幸いしたのか、終わってみれば楽しくて幸せな会社生活だった。

先日、柏原高校の同窓会の総会に出席する為、久方ぶりに故郷に帰ったが、その車中より見た山々の新緑とそれにアクセントを付ける様に咲いている藤の花の美しさに、今更ながら素晴らしい故郷に生まれたことを誇りに思う今日この頃である。

(昭和16年、氷上町石生領町出身／現在、大日本塗料(株)相談役)

丹波人の氣質

柿原 康一郎（柏原町）



生まれ育った丹波の地から上京したのが一八歳、昭和四五年春でした。その後、大学を卒業し、某都市銀行（今も、メガバンクの一つです）に入行しま

した。金融マンとして、夢と誇りを持って入社したものの、10年目位からは、企業の銀行離れ加速、プラザ合意後の急激な円高による国内産業衰退、バブル経済とその破綻、多額の不良債権の発生とその処理、各金融機関の生き残りをかけた統合と再編等々、当時二二歳の若者には予測もつかない展開となつてしまいました。

たまたま、企業調査部門の畑を歩んでいたこともあり、昭和六〇年代以降は、不調をかこっている大企業の新編や整理を手掛ける仕事に配置されました。斜陽

産業型、構造不況業種型、バブル崩壊型など様々なタイプがあり、また一世を風靡した往年の名門会社もありました。金融機関や株主などの外部支援を得て、何とか、生き延びたい企業の経営者や従業員の方々と対峙せねばならず、またそれと同時に、金融機関としては常に支援の合理性を確保しなければならず、さらに、企業の背後にある地元経済や雇用への影響も考慮せねばならず、それらの狭間で随分苦労させられました。いわば、負の遺産の処理を合理的かつ最善・最適・最速に遂行し、採算・成長分野に集中・特化して、企業に再生を果たしてもらうのが、私に与えられたミッションです。

詳しく語ることはできませんが、経営者、従業員、株主、取引先、金融機関、地元自治体など利害が違ふ当事者たちと、ハードネゴを繰り返す日々で、朝早くから、深夜に及ぶことも度々でした。もう、勤めを辞めて楽になりたいと思ったことも正直、あります。「迅速、丁寧、徹底、毅然」といった姿勢を崩すことなく、遮二無二に取り組みました。

さらに、一〇年前からは、苦境が続く「ある上場会

社」の役員として、銀行から派遣され、直接、再生の指揮をとることとなりました。リスクが高く、骨の折れる仕事でした。工場や子会社の立て直しにも奔走、三〇〇回位地方出張もしました。昨年、その再生が完了し、その後も業績安定が見届けられたため、本年六月、無事、退任となりました。ミッシェンはすべて完了です。

今、往時を振り返ってみますと、「それにしてもよくもここまで乗り切ってこられたな」とつくづく思います。「もう一度」と頼まれても、もう心身ともに耐えられないと思いますし、後輩たちが再び、そのような時代を味わうことの無いよう、取り組んできたつもりです。

その一方で、家庭や家族のことは、ほとんど顧みることもせず、一心不乱に打ち込んできたことも確かです。今の流儀にはとてもあわないと思います。毎年、幼い子供たちを柏原に連れて帰るのも、何度も病に倒れた今は亡き母の看病も、また、残された父の定期的なケアも、すべて妻に任せきりでした。その結果、香

川県出身の妻のほうが、丹波の事情には詳しくなってしまういました。

この四十年の仕事ぶり。自分は子どものころ、そんなに、粘り強く、こつこつと、いろんな工夫をするタイプの人間ではなかったのに……。青垣町の広い祖父母の家で、いとこたちと、リヤカーを引きまわして遊びまわっていた少年。すつきりした気持ちで遊びたいために、家に訪ねてきた友人を待たせたまま、宿題をやっていたちよつと変わった中学生。前夜の寝不足がたたって、九州への修学旅行のバスの中でダウンしてしまったドジな高校生。とても、今の姿を想像できません。

いつこんなハードなことをこなせる人間になったのか。それは、おそらく、自分では気づかなかつた丹波人の氣質が、自分にも与えられていたからではないか。それが、こういう修羅場で、予期せぬ形で、発揮されたのではと……。

鬱蒼とした森林、朝霧に包まれた学び舎、地味で垢抜けしない土地柄。そんな郷里を出て、東京で活躍したいと願いながら、実はその氣質に助けられて、企業

人として全うできた。まことに不思議な縁を感じずにはおれません。

〈追記〉本年五月に柏高22回卒業生還暦の集い（会場・

氷上町ホップアップホール）があり、そこで、たまたま、井徳正吾君に再会し、その際に、本誌への寄稿を勧められました。あまり、乗り気ではなかったのですが、とにかく、書いてみることにしました。仕事人間ですから、面白いものは書けません。出来上がった原稿を彼に見せたら、「ちよつと硬いな、君らしいけど。もつと、肩の力をぬいて、ありのままをさらけ出せばいいんだよ。ここは、（ふるさととその仲間に向かつて）心からの叫びをあげるところだから……」とアドバイスをしてくれました。それに応えた原稿という自信はありません。しかしながら、六〇歳を過ぎて、偉ぶることも、変に遠慮することもなく、ごく自然に接してくれる暖かい旧友がいることに、気づかされました。そんな故郷に、もう一度、乾杯！

（昭和26年、柏原町出身／元銀行勤務、元上場会社役員）

小野田寛郎元陸軍少尉

前 田 武 彦（春日町）

先ごろ、ある雑誌で、小野田寛郎氏のエッセイが掲載されているのを読んだ。あの、ルバング島に、軍規に従い三十年の長きに亘って残地諜報を行い、劇的に帰国し、そしてブラジルに移住した元陸軍少尉小野田寛郎氏のことである。

私は数十年前も前に、仕事上小野田元陸軍少尉殿のブラジル移住に一寸関わったことがあり、その時の様子を思い出したのである。

当時ブラジルへ農業移住するには、日伯間の協定で二年以上の農業経験が必要とされていた。が、その経験がない者に対しては、群馬県は上州宮城村、赤城山の中腹にJICA（国際協力事業団）が設置する海外移住研修所で、六か月の座学や実技などの講習が行なわれ、その受講者に農業経験の資格が付与されていた。

昭和四十七年頃であつたろうか、この研修所では、

県道から研修所に至る道路のアスファルト舗装工事と大型の貯水タンク工事が実施されていて、土木技術者であった私は、この研修所への配属となり、工事に従事していた。

施設は、赤城山の中腹の高いところにあつたので、冬は滅法寒かつたが、夏の気温は下界のむつとする暑さに比べてこの上なく冷涼で快適であつた。困つたのは、雷雲に囲まれた時で、電気は切れ、すぐそばで耳を劈く轟音の雷鳴が轟き、生きた心地がしなかつた。

職員宿舎は、下界の大胡町にあつて、近くには大前田英五郎の墓があつた。持つていけると賭けごとや勝負ごとにご利益があるとか、その石塔の縁が削り取られていた。

翌年、昭和四十八年、フィリピンのルバング島で三十年間に亘り遊撃指揮と残置諜者の任にあたつていた小野田寛郎元少尉が帰国し、このニュースは、日本国内はもとより全世界に配信され、地球上の多くの人々の関心を集めたのであつた。

作戦任務解除命令を受けるまで、かたくなに任務を守つた兵としての姿勢と強靱な精神力に多くの人達が

感動した。

ルバング島のジャングルに身を潜める彼を帰国させるために、日本から幾度も派遣された救出調査団はビラやスピーカーで投降を呼びかけたが、これに応じようとはしなかつた。

ジャングルで、小野田元少尉との接触到成功したある青年が「小野田元少尉が投降に応じない理由は軍の命令が無いから」ということを聞き出した。関係者は色めき立ち、元上官がルバング島の奥深いジャングルに派遣され、終戦後三十年にして、上官から残地諜報活動の任務を解き帰国の命令が、直立不動で拝命する彼に伝達されたのであつた。

テレビで放映された、劇的な投降と直後、マルコス大統領に敗軍の兵として軍刀を捧げる彼の形相は、眼光鋭く、私はその形相に鬼気迫るものを感じた。

その小野田元少尉が、ブラジルへ農業移住することになり、その渡航資格を取得するため、突然、海外移住研修所に一日入所することとなつたのである。

ブラジルの大統領や多くの国々の首脳から、小野田元少尉に対し、土地の提供と招へいの申し出が示され

た。特に、三十年間軍命を守り続けた彼に対し、諸国の軍関係者からは絶賛の賛辞が寄せられていた。が、日本国は、彼をJICAの直営入植地である、ブラジル、マツトグロッソ州のバルゼア・アレグレ移住地に入植するよう手配した。

研修所はてんやわんやの大忙しとなった。その日、小野田元少尉は、JR高崎駅に到着し、研修所からは異例の送迎の車を出し、その運転手には若かった私が仰せつかった。研修所に到着すると、県、市町村の関係者、マスコミや近隣の人達でごった返していた。講習は、マスコミ関係者に囲まれながら、一時間ほど職員の手ほどきでトラクターに試乗し、それで終わった。講習が終わると、研修所の応接室で所長から研修了証書が授与された。

その後は、彼に対するマスコミの取材とうず高く積み上げられた色紙の署名であった。私も職員の余得で二枚の色紙を頂戴した。一枚にはきちつとした字で「誠」、もう一枚には「愛」と書いてあった。字はまさに鞘を払った白刃を思わせるような筆跡であった。

そして、小野田元少尉は通常半年の期間を要する講

習を半日で終え、研修所を去っていった。

昭和四十年、小野田元少尉はブラジルへ移住した。ブラジルでは特別待遇であり、JICAバルゼア・アレグレ事業所でも、日本で政、官、民の大勢の特別の支持者がある小野田元少尉からは、通常の面積よりも広い土地の分譲と多額の融資の申し込みがあり、JICAの現地事務所は苦慮している様子であった。

その後、彼が小野田自然塾を開き、その活躍ぶりがテレビで放映されていたが、その表情は普通の穏やかな笑顔であった。

(昭和15年12月、春日町生まれ)



TPPをどう考えるか

八 木 信 行（氷上町）

最近TPP（環太平洋パートナーシップ協定）について、連日のように報道がされています。しかし、TPPを議論する前に、貿易に係る国際ルールでGATTやらWTOやらEPAやら色々あって、意味が分からんという人も多いのではありませんか？

GATT（ガット）とは、正式名称を「貿易及び関税に関する一般協定」といい、1948年に発足した条約です。第二次世界大戦前に欧米諸国などが閉鎖的なブロック経済を作り外部との貿易を制限し、そして戦争に至ったことへの反省もあって設立されました。ガットでは、何年かに一度、多角的貿易交渉（今というラウンド交渉）を行って、各国とも一斉に少しずつ関税を下げていきました。ケネディ・ラウンド（一九六四～六七年）、東京・ラウンド（一九七三～

七九年）、ウルグアイ・ラウンド（一九八六～九五年）などの名前を覚えている人は多いかもしれません。

そのGATTを拡充する形で一九九五年に設立されたのが、WTO（世界貿易機関）です。ガット時代よりも裁判などの手続きを明確化するなどの改良が加わりましたが、ガットとWTOは、概ね同じものです。WTOの最初のラウンド交渉は、二〇〇一年から始まったドーハ・ラウンドです。

ラウンド交渉終結に必要なになった年数は、ガット時代から徐々に延びています。ウルグアイ・ラウンドは一〇年かかりましたし、ドーハ・ラウンドに至っては十二年交渉しても終わらない（むしろ合意がほとんど無理と見られている）状況です。この理由は交渉に参加する国が多くなったためです。ケネディ・ラウンド時代、ガットの加盟国は六二か国でした。それが現在のWTOでは一五九か国に増えています。昔はイギリスやアメリカが決めた方針で交渉がまとまっていたものが、今はインドやブラジル、中国などが反対を唱えると交渉がまとまらない事態になっているのです。

そこで、早く交渉がまとまるということで、最近世



ジュネーブにおける WTO 交渉の様子 (撮影・筆者)

界中で盛んになっているのが、二国間またはそれに近い少数の国で貿易自由化を更に図る FTA (自由貿易協定) や EPA (経済連携協定) と呼ばれる枠組みです。TPP も、その流れの一つです。

ただし FTA (EPA や TPP を含む) を合意した際は、加盟国はその内容を WTO に通報する必要があります。WTO の条約には、FTA を「実質上のすべ

ての貿易について」関税などの障壁が廃止されているものをさす、と書いてあります。関税引き下げの対象外になる「聖域」が作れないかもしれないと議論されているのは、この条文が存在しているた

めなのです。

それでは、日本が過去に締結した EPA では、農産物は関税撤廃の対象外とされてきたのでしょうか？

日本は、二〇〇二年以降、シンガポールを皮切りに、メキシコ、チリ、インド、スイス、ASEAN 諸国などと EPA を結んでいます。

今までは、いろいろな条件と引き換えに、日本のコメなど、一部の農産物は関税撤廃を免れてきました。しかし、今回の TPP では、アメリカやオーストラリア、ニュージーランドがそのような例外を許すのか予断を許さないということで、日本国内で大きな議論になっているのです。

仮に日本が TPP に参加し、「聖域」なき関税撤廃が決まってしまうと、丹波のような中山間地はどのような影響を受けるのでしょうか？ コメの値段が下がり、まず地域経済に影響が出ます。離農者する農家は増加し、空き家が増加するなど社会的影響も出ます。耕作放棄地が出て、あぜ道やミゾを管理する人もいなくなると、環境や景観についても影響が出ます。農地の売買を自由化すれば、大規模な農家が出現して国際

競争力が高まる、などという説もありますが、それは間違いでしょう。農地を自由化しても、農家は自分が既に所有している農地の隣しか買いません。飛び地の農地を多く持っても効率は上がらないためです。従って農地の売買もそれほど盛んにはならないでしょう。

では、どうすれば良いのでしょうか？ 自由貿易を導入すれば、同じ国の中でも敗者と勝者がきれいに分かれる構造になります。輸入国での勝者は輸出産業で、一方の敗者は輸入品と競合する製品を作る産業部門です。消費者の中でも勝者と敗者があり、勝者は輸入で安くなった品を消費する層で、一方の敗者は、輸出品となったために値段が上がった産品を消費する層です。利益を得る層から、被害を受ける層に向けて、利益の配分を行うことは社会の公平性や平等性の観点から重要といえます。経済面だけを判断基準にすれば、環境や社会面で歪みが生じる可能性がある点を国民に十分伝えた上で、国内的な議論を行い、加入するかどうかを決めなければなりません。

並行して日本政府は、食品の衛生基準を高めて、そ

れに合致しない輸入品は輸入できないようなルール作りを急ぐ必要があります。例えば、関税は安いが衛生基準が高いので日本からEUに輸出できない、という農産・畜産・水産物が多くあります。これを見習うのです。アメリカにも、検疫に関連した農産物や畜産物の持ち込み規制がありますから、ここは日本だけが孤立するところではないでしょう。

(昭和37年、氷上町香良出身／現職・東京大学准教授)



(撮影：岡吉明さん)

ある老人の独り言

近 藤 仁 司（氷上町）

退職してからはや八年にもなります。会社のこと
は考えないように、と心掛けているのですが、何し
ろ一六歳から七〇歳までずっと終身雇用ですからね、
逃れようもない私の居場所でした。「随縁クラブ」と
いうOB会を立ち上げた、ということもありますけ
ど、ゴルフや小旅行で集まる円満退職者連中の話題は、
やっぱり現役時代の思い出話ばかりですよ。

ただ、この業界にも時代の流れを痛感しますね。

かつては、サラリーマン金融（サラ金）からお金を
借りているということが会社にはわかれ、人事評価に
響くという時代もありました。会社の上司や偉い人が
窓口へ「うちの社員に金を貸さないでくれ」と怒鳴り
込んでくることもありましたよ。今はそんなことはな
いようですが……。プライバシーが守られるというか、
個人の生活に会社が立ち入らない、という時代になっ

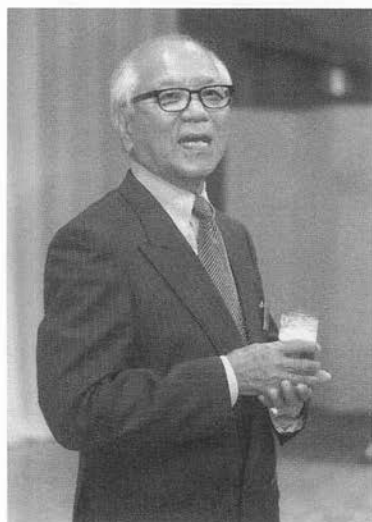
たのでしょね。

私は、この「消費者金融」の業界を引っ張ってきた、
という自負があります。もとは、質屋だったんですよ。
「ちよつと生活に用立てるお金を貸して」という、か
つては、まあ内緒話のようなものが世間的にオープン
になつて、誰もが堂々とお金を借りる、大衆化とい
うか、そういう時代の流れですね。

質屋のころは、質屋営業法というもので、盗品だと
疑わしい品物の質入れがあつたときは警察へ通報する
という義務はありましたが、金利は法律で定められて
なかつたんです。「サラ金」と呼ばれた無担保で融資
する街の金融はね、いつとき悪徳商法の見本みたいに
世間でたたかれた時代があり、辛い思いをしましたよ。
三〇年前に「貸金業規制法」が成立し、金利が公定
になつてから、ようやく業界が正常化してきました。
でも本当は、監督官庁にもつと厳しい資格要件を付け
てほしかつたんです。たとえば、資本金とか設備とか
ね。金利の上限を引き下げることで、抜本的な
改革にはなりません。業界の品位をもつと高く
するというのが私の願いは満たされなくて、今でも後悔が

あります。

その後、業界再編成で、銀行が個人金融の領域に入ってきました。銀行からは、個人金融のノウハウを教えなくて、とよく頼まれましたね。不動産担保を取るわけではないので、必要なノウハウはその人柄を見分ける「人を見る目、眼力」に尽きますよ。その「人を見る目を養う」ということが私の生涯かけての修行でした。何しろ、中学校卒業してすぐに社会へ出た田舎者ですから、コンプレックスの塊でした。でも「同級生が大学を卒業するころには、きっといっぱしの地位に居てやる」という決意を固くして、簿記の学校、食事



マナーの研修、物品を見分ける鑑定眼など、少ない給金を工面して、あらゆる修行を積みました。

今でも忘れない思い出があります。二二歳で大阪支店長になったとき、東京へ研修に来ました。相場概念をはみ出る、というある有名な質屋がありましてね。そのカウンター業務は、「質草」つまり担保の品ですが、その価格評価だけでなく、お金を借りに来た人、「質置主」というのですが、その人柄を見て、両方を合せて「質値」という貸し出しの金額を決める、というものです。私もそのカウンターへかなり高価な腕時計を差し出し、業界相場の二割高くらいの額をお願いしましたが、ダメでした。関西弁の若者が分不相応の高級時計の質入れは不自然であるし、質流れとなる可能性が高いと見たのでしょうか。質草だけで判断しない、というよい例ですね。

その後、クレジットカードが当たり前になって、消費者金融が大衆化しました。家や車を買うのに、ローンは当たり前という時代です。だれでも簡単に「ちよつと貸して」と借りることができるようになって、借りましたから「すまない」という気持もないし、昔のような

後ろめたい感じはなくなりました。次第に対物信用から対人信用の時代へと変化していくのです。

それで、どういう人を信用できるか、ですが、私は、誠実で謙虚な人柄、つまり嘘を言わない、威張らない人が第一番だと思いますよ。いばり肩はり、背伸びタイプは如何でしょうか。人は誰も間違いを起こすものですから、社員教育の場では、消しゴムの立場からと題して、「消しゴムの言葉」を述べてまいりました。

「あなたは私（消しゴム）を使って、間違ったことを正しい文字・言葉にします。使ってもらえて私は幸せです。何度お使いになっても結構です。そのあなたから、会社の社是『信頼の輪』が広がるのです」と。

どんなに時が移り、世の中が変わっても、信用できるのは「誠実で謙虚な人柄」、とうことは、いつまでも変わらないものと思いますよ。

会社の上司の紹介で知り合った家内とは、お互い干渉しない、やれることは自分で、ということとで晩年を過ごしています。台所にも入りますよ。私の方がおいしいものを外で食べてきたんですから、味付けは上手かもしれないでしょう。

つまらない話をお聞かせしました。でも振り返って自分の人生はまずまずだったと思います。丹波を離れたときの、十六歳の決意と夢は果たせました。

（1935年（昭和10年）春日町生まれ／大路中卒業後、アコム（株）前身の丸糸商店入社。1991年アコム副社長、1999年同副会長就任。2005年同副会長を退任。現在に至る。）

（聞き書き・構成＝上 高子）



油絵と合唱でシニアライフ

谷 敬 三（柏原町）

1、ラグビーに全力を傾けた頃



六〇歳を少し過ぎた今日この頃になると、合唱と油絵に関心があり、子供の頃あれだけ苦手としていた音楽や絵画を友としてようとしている、不思議なシニアを発見するのである。

一八歳で柏原を離れ、仙台で学生生活を送るようになった。低学年の頃はサイクリングに熱中し、クラブの仲間との東北地方の輪行や仙台から柏原に自転車で帰省するなど、日本中を走り回っていた。乗りまくっていたと言っべきかもしれない。

しかしながら、八〇キロをはるかに超える大きな体に乗せるには軽量のサイクリング車はかわいそうで、高学年になるといつの間にかラグビーに転向してい

た。ラグビーでは大柄でがっちりした体格が求められたので、適性は合っていた。選んだポジションは「フロントロー」と呼ぶスクラムの最前列。背骨を軋ませながらチームを支えることを役割とし、試合中にボールを持って走ることとはほとんどなかった。

就職した神戸製鋼でもラグビーを続け、選手として三年間プレーをした。関西リーグでは下位のクラスで、このチームが十数年後に日本一を勝ち取るまでに成長するなど考えもしなかった。四年目の東京転勤を機に神戸での選手生活を辞め、その後は横浜のクラブチームで四九歳までプレーを続けた。



神鋼横浜グラウンドでの
OB戦（1998年）

2、五〇歳を境に絵画に興味を移す

週末は試合と練習を繰り返していたので、家族はラグビーウイダーの生活に甘んじていたが、五〇歳を目前に突然終止符を打つこととなった。三〇年以上もスクラムの重みを支えてきた腰が悲鳴を上げ、脊椎板ヘルニアの手術を受けることとなったからである。平成一二年（二〇〇〇年）十一月のことである。

手術を含め二〇日間の入院中は、腰の痛みのない社会生活への復帰だけを考えていたので、ラグビーが出来なくなることへの未練はなかった。ラグビーに代え、これからの人生を付き合ってくれるものに関心が移り、選択肢の一つに絵を描くことを思い浮かべていた。なぜシニアライフに絵画制作を考えたのか上手く気持ちを整理できないが、家族に迷惑をかけてきたこれまでの人生を修復し、再トライしたいとの気持ちがあつたようである。

目標が見えてくるとチャンスはいくらでも見つかるものである。住まい（東京・豊島区）の区報で、油絵の月例練習会が近所の集会所で行われていることを知り、早速の門を叩いた。講師は二科会の選考委員をな

さつていた橋本琢磨先生（故人）であつた。油絵を描いたことなどなかったので、橋本先生には描き方の初歩から教わつた。形に捉われずタッチを利かし子供が描くような絵を描けば良い、と仰る指導は初心者には心地良かった。何せ形を気にする必要がないのである。練習仲間とのグループ展や展覧会に出展することで、自分を発表することへの楽しみが拡がつていった。油絵を始めた二年後の平成一五年には合唱も始めることとなる。

3、二つの合唱団に入団し演奏会へも参加

叔父が俳人で（丸山哲郎、故人、宝塚）難解な言葉を数多く知っていたことへの畏敬からか、ぼんやりと学芸から逃避し、芸術系への興味が深まっていたようである。歌うことにも関心が芽生えた頃、新聞の案内欄で東京高齢協合唱団（現東京フロイデ合唱団）の紹介を見かけた。入団の条件は「やる気だけ」。今回も分かり易かつた。

合唱団には二〇〇名を超す女声と男声が在籍し、毎年一二月に池袋芸術劇場で「第九」の演奏会を続けて



東京フロイデ演奏会（平成 19 年）

いた。高齢協という名前の通り団員の平均年齢は七〇歳に近いと思われるが、五二歳で入団したので平均年齢を下げています。週に一度の富沢裕先生の歌唱指導に

は笑いが途絶えることがなく、大柄な身体を揺らしながら、ハーモニーの質を上げることが目標に稽古が行われる。



豊島区民オペラ「君と見る夢」（平成 25 年 3 月）

指揮者が外山雄三先生から小松長生先生に変わったが、日本フィルのオーケストラとソリストの皆さんとの「第九」合唱への挑戦は続く。

東京フロイデに入団した翌年に、豊島区合唱団にも入団することにした。地元という理由で選んだ合唱団は、東京フロイデ合唱団よりも団員の平均年齢は若く、東京音楽大学講師の坂本和彦先生に合唱指導と演奏会の指揮の両方をお世話になっていた。東京音楽大学も豊島区にある。

毎年の演奏会では、クラ

シツクの合唱曲、ミサ曲、オペラ、ミュージカル曲から日本の民謡や唱歌まで、坂本先生が幅広く選曲されるので挑戦を楽しみとしている。今年（平成二五年）の三月には、新作の区民オペラ「君と見る夢」にも参加する機会があり、踊りながら歌うことの愉快さと難しさを体験することも出来た。

4、本格的なシニア期を迎えて

さて、いよいよシニア期に差し掛かってしまったが、これからも油絵と二つの合唱を楽しみたいと考えている。

油絵は、「丹波の山芋」と「恋は赤いバラ」の連作を軸に精進するつもりでいる。晩秋になると丹波から同級の水野正嗣君（氷上町市辺、元柏原高校教諭）が自作の山芋を送ってくれるが、このモチーフも七枚を数えるまでになった。また、数年前から家内の誕生日に贈り始めた「恋は赤いバラ」シリーズは、昨年の東京都展に一〇〇号の大判を発表する機会を得た。幸せを感じている。

合唱については、「第九」のみを極めようとしてい

る東京フロイデと、選曲が毎年拡がっていく豊島区合唱団の違ったタイプに参加することにより、高音のテノールを歌い続けるつもりでいる。（平成25年8月）
（昭和26年3月、柏原町石田生まれ／現職・一般社団法人日本伸銅協会勤務）

同級会を励みに

木 辻 照 男（市島町）



昭和三十九年に高校を卒業し、アパレル業界の婦人服メーカーに就職して三十年、私はその大半を、商品企画、物作りの仕事にたずさわって来た。春夏秋冬、各シーズンに先がけて展示会を開き、得意先より注文を受けて、生産販売をする。一つ終われば又次へと、追われる日々で、ふるさとでの同級会の案内をいただいても「都合がつかず欠席いたします」の返信を出す

のが、いつものパターンであったが、会社勤めをやめ、自営業を営むようになって、ある日のこと、小学校の同級会の案内状が届いた。私達が、卒業の年に、当時では、とても「モダンな」白亜の鉄筋コンクリートの校舎が出来て、第一号の卒業生となった。その校舎が老朽化し、建て替えになるので、その前にみんなで見てくださいと言う。

長年忘れていた、ふるさとでの同級会に初めて出席した。そこには、五十の半ばを過ぎ、年は重ねて来たが、それぞれにあの頃の面影が残っており、なつかしく語り、うまい酒を飲んだものである。

次に還暦の祝いを兼ねた中学校の同級会を、あの鬼伝説の大江山で一泊で催すとの案内を受け、ここにも初参加をした。丹波弁に戻り、夜のふけるのも忘れ、大いに語り、大いに飲んだ。同級生と飲み交わす酒は、又格別である。

柏陵同窓会東京支部の総会が毎年行われているが、未だかつて出席したことがなかった。平成二十一年に、突然に来年は昭和三十九年卒業の十六回生が当番です、との通知が来た。同級生の関東在住者が三十八名

とのこと、幹事さんより電話があり、同級会を兼ねた打合せをすることとなった。十八名余りが集まり初顔合せの同級会をした。以後、毎月一回の打合せを重ね、本番を、未経験者の集まりながら、大盛会に終えることができ、改めて十六回生の絆が出来たように思った。

それ以後、総会に出席するようになり、旧交を温めている次第である。来年は、高校卒業五十周年の同級会が計画されており、その次の年は中学で古稀を祝う月の流れは早いもので、もうこんなに年を重ねたのかとも感じつつ、元氣に出席できるよう、体力作りに励みたいと思っている今日この頃であります。

目標一日一万歩。もっかのところ五千歩。あの頃に戻れるところ同級会

(昭和20年、市島町矢代生まれ／自営業・コンビニエンスストア)

鶏卵を立てる

青 木 保 夫（市島町）

筑波大学の一クラス分の新入生を対象として、教員が自由に時間を使用できるコマが通年で用意され、ある年に僕がその任に当たった。これはその最初の授業の
中身に関する話題です。

授業の最初に学生に生卵を一つずつ配布し、「この卵を机の上に立てなさい」と言った。約半数の学生は「そんな事は出来るわけがない」と言つてしらけていたが、残りの半数程度は挑戦を開始した。約一〇分程度放置していたのだが、「立つた！」という大きな声が教室に起こった。多くの学生が発声した学生の机を囲み、卵が水平な机の上に立つことを確認し、自分でも出来るに違いないと思い、熱心に挑戦を開始した。更に暫く放置しておく、半数以上の学生の机の上に卵が立てられた。

立春には卵が立つという言い伝えがあり、その原因

は寒さで卵が凍るからであるという説が過去に提案されたという話をし、この説明が本当ならば卵を茹でれば固まるからいつでも立つはずであると言ひ、全員に用意したゆで卵を配布した。今度はゆで卵を机に立てなさいというわけである。生卵は立つという事を実感した学生達は、今度はしらけた態度をとることもなく、真剣に挑戦を開始した。この場合も、多くの学生が卵を立てる事に成功した。

ここで、ある学生から「尖った方を下にしても立つだろうか？ やつてみよう！」という声が起こった。結果は尖端を下にしても、技術的な難しさはあるが、実現可能であるというものであった。

この後で、学生に「原理的に不可能だと証明されていないならば、ハナから挑戦をあきらめないで」という意味のお説教をしたことは、教員として当然のなりゆきでしょう。

ここまでお読みになった方は、是非卵を立てる事に挑戦して戴きたい。高校生時代の僕は、鏡を机の上に置き、この鏡の上でも簡単に卵を立てる事が出来ました。この時のやり方は、先ず両腕を机のうえに置き動

きにくくします。次に両手の親指と人差し（又は中指）の指先で卵の上端部分を軽く支えて立てます。その後、非常にゆっくりと指先をたまたまから離していきます。卵が倒れかけたら、支える指位置を少し調節して卵を立て直し、もう一度ゆっくり離します。この操作を何度か繰り返すと、卵を倒れなくする指の位置が定まります。卵も机も、完全に平滑ではありませんので、右に倒れるか左に倒れるかの境目付近では立つことがあっても不思議ではないでしょう。

さてその後、僕は学生達の目の前で、ゆで卵を机の上に置き、これを指でひねって出来るだけ早く廻して見せました。卵は暫く回転しながら机の上を動き回った後、立ち上がりました。そうです。充分早く回転させると、ゆで卵は自分の力で立ち上がるのです。最初にこれを見せたのは、僕の子供達が未だ幼稚園児の頃でした。

子供たちは「立った、立った」と喜んでくれました。

では、卵を回転すると何故立つの？ という疑問が

生じます。類似の現象としては、倒立コマというおもちゃを思い出される方もおられるでしょうが、どのようにして説明をするの？ となると……。

このような場合、二つの説明方法を思いつきます。一つは「卵でもコマでもたつのだから、対象の細部に依存しない一般的な説明法があるだろう」という立場です。この立場では、エネルギーの等分配則という熱力学の指導原理を持ち出します。回転運動の運動エネルギーの一部が、何らかの原因により、重心の位置エネルギーに移行する。即ち、卵の重心の位置を持ち上げます。もう一つの立場は、このエネルギー移行の原因を考えるものです。机と卵の微小な突起が回転中に衝突すると、卵の突起は上に突き上げられます。この衝突が多数回起これば、これらの力の和として重心が持ち上げられます。机を水や粘性の低い油で濡らして机と卵の間の摩擦を減らしておくと、突起同士の衝突のショックを和らげる事ができますから、卵を回転させてもなかなか立ちません。

回転運動の運動エネルギーの一部を位置エネルギーに変換出来るならば、どんな機構でも立ち上げる事が

出来ますし、変換効率を調節すれば早く立ち上げたり遅く立ち上げる事も可能でしょう。非常に早く変換すると、卵が飛び上がるという話題は、何年か前に新聞でご存知の方もおられるでしょう。

本誌「山ざる」40号（平成21年11月）への投稿で日本版 *exploratorium* を示唆したが、この卵を立てる話は *exploratorium* での展示の一つとして、ロボットにやらせれば面白いと思います。

エンジンヨイクラブの活動

谷川 隆 治（氷上町）

町田に移り住んで四十年になります。当時若かった街も高齢化が進み、老人社会になりつつありますが、非常に活気あふれる街です。それが老人クラブ「成瀬台エンジンヨイクラブ」の活動です。

発足十年目を迎える会員数は二八二名の大所帯となり、町田市最大の老人クラブです。定年前八年間の大

阪での勤務を終え、町田に帰った私は、近所に親しい知人もあまり無く老後どのように過ごすかと、不安だったのですが、妻が入会してくれていたエンジンヨイクラブで活動することが出来、今考えると本当によかったと妻に感謝しています。

このクラブは、社会貢献をするともに相互の親睦を図りつつ、健康で明るい生活を送ることを目的に誕生し、社会奉仕や健康増進活動を中心に、現在十七のサークルがあり、役員、世話人の方々の努力もあって、皆、生き生きと活動しています。

中には、一人で多くのサークルに入り、毎日、活動を楽しんでいる人もいます。私は現在、ウォーキング、山歩き、ゴルフ同好会に入会し、月に一度の開催日を楽しみに参加しています。知り合いも出来、楽しい日々を送っています。山歩きとゴルフ同好会は、毎回バスをチャーターし、送迎付きの豪華な会で本当に楽しい一日となります。

山歩きの帰りには、途中、必ず温泉で一日の疲れを流し、バスの中では、その日の反省会等、賑やかに終わりを告げます。七月には、木曽駒ヶ岳千畳敷、鉢伏

山等、一泊二日の予定が組まれています。又、ゴルフの帰りもバスの中がパーティ会場となり、成績発表、次回の計画等、アツという間に帰宅します。

又、エンジョイクラブでは年二回のバスハイクが予定され、今年五月には善光寺参りが実施され、多数参加で賑わいました。十一月には、毎年そば打ち大会を開催しています。有志でのお爺さんのおしゃべり会も楽しみで、週一回、近くの喫茶店で約二時間、妻達もビツクリ男同士、「何をしゃべっているの」と、あきれているようです。が、とにかく楽しく生き甲斐のひとつです。これも、皆、エンジョイクラブが有ったからこそ、と設立いただいた方々に感謝しています。

今後、健康に注意し、一日一日を大切に生きていきたいと思っています。「近くの友達」それこそ、今の私にとっての宝物、大切に大切にしていきたいと思っています。

(昭和13年3月13日、氷上町下新庄生まれ)



(撮影：岡吉明さん)

歌集『凌霄花』

井出恭子（市島町）

○散り散りてなお散り残る凌霄花に母逝きし日の雨降り止まず

夏がきて

凌霄の花が咲きはじめると

母は必ず言っていた。

「お父ちゃんがね

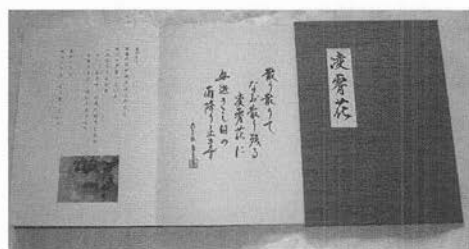
おい、あき子、お前の好きな

花が

今年もまた 咲いとるでよ」

夏がくると

母はいつも そう言っていた



第一章 2007年8月まで 父亡き後 7年間一人

暮らし

○父逝きてはや七年経つふるさとにひとり住みいる母を訪う

○母老いてひとり暮らせる故郷の行きも帰りも霧の深さを

○米寿まで生きたいと言いつ父は亡く母はひとりとなりて迎える

○残されし母との時間かぞえる丹波の里の霧の深さを

○冬枯れの山のたたずまい変わらぬを小さくなりたる母と語らう

○生きて居るただそれだけで意義ありと思える母の暮らし守りたし

○数かずの病いとたたかい父は逝きその分までも母は生き居り

○電話にて母の声聞き体調をおしはかる朝夕故郷は遠く

○紫陽花にシルクの雨のきらめける今日も願うは母の無事なり

○風が泣き雨音強さ増す夜は母ひとり住む故郷思う

○夫より子より孫よりわれにとり最優先は老いたる母なり

第二章 2007年9月 丹波に 母との暮らし

○夫ひとり残したるまま故郷の母との暮らしは選
びぬ

○十代に出でたる故郷に半世紀ぶり母と暮らさんと戻
り来たり

○亡き父の寂しげに立つ夢ばかり見ると母いう老いの
色濃く

○金木屋ほのかに香りて在りし日の父の背中になつか
しき部屋

○亡き父の使いし毛布捨てないでと母は毎晩くるまり
眠る

○数えきれぬひとりの夜を過ごしたる母の孤独を今思
い知る

○年毎に老いゆく母の細き身をわれに重ねて淋しく見
やる

○笑うことも会話もときれ終日を赤子のごとく眠りた

る母

○真夜中に足音しのばせ静かなる母の寝息を確かめ眠
る

第三章 2008年元旦 初夏まで

○笑顔失せ老いの色濃き母とふたり迎えし元旦穏やか
に過ぐ

○音もなく降り積もりたる初雪を母に見せんと窓開け
放つ

○躁とうつ繰り返し眠る母の老い見つむるわれは戸惑
うばかり

○うとうとと終日母はまどろみて何夢見るやかすかに
微笑む

○食細き母の残飯待ちわぶる小鳥さえずる朝の庭かな
桃の蕾ややにふくらむ気配あり母の気力も回復なる
や

○寝たきりの母は曾孫と初対面無邪気な声に顔のほこ
ろぶ

○病み伏せる窓より初夏の風受けて目覚めし母は深呼吸
吸をす

○新緑の息吹きとともに快復の兆せし母の生命力は

○快復のかすかな兆し沐浴の母の背中に戻れる肉付き

第四章 2008年夏～秋

○冬眠より目覚めたる母が輝きの戻れる目にておしゃ

べり続く

○きゆるきゆると蛙鳴く夜は眠れずに夫や子想い祈り

おりたり

○家族より離れて母と暮らす道選びしわれは引き返せ

ざる

○またひとり縁ある人の訃報届き山里の夕べ寂しさ来

たる

○コスモスの季節再び巡りきて母との暮らし穏やかに

過ぐ

○父逝きて八年目の秋巡り来る金木犀の香りを連れて

○生き居れば卒寿迎うるはずなると父の誕生日を母は

数うる

○霧深き里の晩秋ゆるやかに今日一日の晴れの予感が

○戻りたる水ぬるむ日のありがたさ母の動きも穏やか

なりて

第五章 2009年 元旦～春・初夏まで

○友の家は帰省の客で賑わえどわれには淋しき三が日

かな

○寂しさも侘びしさにも慣れ穏やかに母と迎うる新し

き年

○穏やかなまどろみの中老い母は何夢みるや微笑み浮

かぶる

○若き日の父の姿を夢見しと目覚めたる母頬輝けり

○体調に不安覚ゆる朝あれど母には見せず笑顔で向か

う

○ひさびさのドライブ兼ねて病院へむかう母の目活気

戻りて

○介護度は進むことなく母の眼は活力増して初夏を迎

える

第六章 2009年6月 入院 手術 集中治療室に

2009年6月29日永眠

○麻酔より覚醒遅き母の目に手術に耐えたる涙の跡が

○よく語りよく笑いたるその夜に母は自ら点滴抜きた

り

○父逝きて十年目の月選びとり母はひっそり旅立ち給う

○微笑みを浮かべし母のなきがらと促されいて対面せしに

○好みたる凌霄花に見送られ母を乗せたる霊柩車発つ

最終章

○この夏を待たずに逝きし母の服順に洗いてまた仕舞いたり

○弟より贈られし赤きカーネーション母亡き後も庭に咲きおり

○突然に逝きたる母の温もりの残れる部屋に座りていたり

○母偲び今だ住みいる故郷に季節巡りてコスモスの咲く

○何ひとつ変わらぬ景色も色褪する母の居らざる故郷なれば

○おはようと秋立つ窓を開け放てば遺影の母は微笑み
ており

○父も逝き母も逝きたりこの秋の金木犀の香り淋しき
○霜降りてあるじなき部屋森閑と母の温もり日々薄れ
ゆく

○独り居の寂しさ耐えし八年の母の思いをかみしめて
おり

○母の遺影の静かな微笑み淋しげに未だ引きあげぬわ
れを見つむる

○携帯に残されし亡き母の声再生ボタン押す勇気なく

○母逝きてわが人生に残されたる時をはかりて戸惑う
ばかり

○母在りて歌詠みしゆえ辿りゆく道の行方は覚つかな
かり

○霧の朝母の愛でいし凌霄に今際の思いを問うてみた
し



折々の記(10)

井 本 義 一 (柏原町)

○勤務人生を歩んだわたしには、同期入社者同窓会(毎年春秋2回開催)は極めて楽しい。早いもので本誌拙文の連載も16年の35号から10年経過。第1回はたしかこの同窓会の、出欠ハガキの回答からわたしの近況、心境などの回答記録をそのまま列記して幕を開けた。4年前の12年2月からこの同窓会事務局を担当して12年経過。ここで主催者サイドに立って、最近2時点の開催通知(出席呼びかけ文)を掲げて、人生時熟のときとしたい。

23年10月例会。「……なでしこの快挙、酷暑下の甲子園清風の時を経て、本日、5年間に6人目、1年ごとの回転ドア政権と椰楡される総理候補に、民主党代表野田氏を選出。スピードも求められる3・11で加速した内憂外患満載の大国難時、脱、親小沢を超えて、また与野党をまとめて、「安全原子力村」に象徴され

る歴史に残る政官財癒着の大失政の改革最後のチャンスとするか。叶わぬ夢かもしれないが、ここで竜馬十隆盛型実行に期待したいもの。われわれの税金で先生方に高歳費(費用を含め約1億円)を、これ以上政治力の停滞劣化で無駄払いをしたくない。月例会。出席下さい。……」(8月29日出状文より)

24年3月例会。「…23・8・18日朝日川柳「セシウムは怖いで終わる立ち話」——(締め言葉)。24・2・6日付天声人語より「……放射能はしつこい。……原発事故は生活の場を奪い、汚染は深山深海に及ぶ。人類のはるか前から、この列島の沖で種をつないできた魚介類にも、とんだ災難だ。福島発の電気を無邪気に使ってきた当方、海の仲間にも謝らねばならない。食べ物ではなく、生きものとしての魚たちに。」加えて人口減少高齢化加速社会、残念輸入立国に転向、税収激減下にあつて、経済力浮揚見込みは? 年金を始め社会保障政策等我が国の行方は? 月例会です。出席下さい。……」(2月6日出状文より)

7人の仲間相い寄り杯を傾けながら大いに嘆き、ガス抜きには格好の場だ。テーマによりモヤモヤで終わ

ることも。いつも思うのは、過現未にわたり真実を知りたいことだ。4月高校の同窓会へ回答ハガキ出状の今日。

(24・2・14日)

○鶴川平和台自治会に昨年8月「平和台新聞わ・わ・わ」発行―年6回偶数月の第三土曜日発行―されて本日2月18日で4号になる。編集責任者のTさんがボラティアの仲間であることと、わたしの提示テーマからして今年の初回号しかないと考えて、初めて投稿(以下)した。因みに登録所帯数626。「和」、「輪」、「話題のわ」で「笑おう!」を目指しているわが町である。「随想―年賀状のこと」「この違和・閉塞・不安感はどこから。それは取り返しのかめ人災ミスⅡ原発と、格差社会助長政策を推進してきた政権を選んで来た負い目からでしょうか? 現政権にも幻滅中。」これは下手な自筆年賀状添え書きの第3項です。わたしは現役時代からずっと定型印刷箇所他に、添え書きスペースと表書きは必ず手書きを実行してきました。千年に一度という大災害のあった昨年は、込み上げる思いを書き切れず(上記を、No.Ⅱ内省情報発信分)として、同じ人に2枚を出状した30枚を含めて187枚を出し

た。

鶴田浩二の歌台詞に「古い奴だと思いでしょが……」があるが、わたしは携帯とメール万能時代の今こそ、狭い交際範囲内での毎年のスタートに、いろいろな絆の巻き返しである年賀状の中身と、形式の変遷に刮目している。これをきっかけに50円、80円で文通の輪が広がることが楽しいのだ。が、淋しく、物足りなく感じるのは、受け取り賀状の裏表すべてパソコン印字のみの定型文だ。手間が省けたのだから、近況や心境など一行でも自筆の添え書きをと望みたいが、人との繋がりが薄くなり、無挨拶(挨拶は温かく心を開く窓だとわたしは確信している)を深める世上では、これが普通のことなのであろうか。

限られた紙面なので、締めくくりに朝日川柳23年1月6日以降このテーマ関連の川柳を掲載してご賢察に供したい。「元氣かと問うた返事は一年後」「出したのに来ない賀状に腹を立て」「年賀状だけの付き合い五十年」「筆上手いえ指上手の賀詞届く」掲出順に小野良一、天根始、本間紀男、飯島史朗の各氏。

(24・1・9日記、即日送稿済)

○「継続は力なり」―平成8年・本誌27号拙文・実践ヘルシー朝食について―の結語で終えた一日食品30品目（健康目標のキーワード）の食事励行も、勤務リタイア後7・5年加齢に加えて、運動量の減少と肥満に要注意につき品目数も減ってきた。以下、食材質を変えた朝食について飲食順に認めたい。

毎朝（4時半前後―早朝ウオークは左足をこれ以上痛めては困るので2月より休止中）食事前に天然水と豆乳（カリフォルニアレーズン2〜30粒を食しながら）を各1杯。ミニパンの中に梅肉をはさんで食べる。バナナ1本のあとは生食パン1枚の全面にバターに変えて、バターナイフで食用味噌を薄く塗り伸ばす。その上に板チーズ1枚を置き、しばって食塩を飛ばした薄切りの昆布と人参と赤唐辛子や、柚子を混ぜた白菜の漬物をはさんで（真ん中で半分に折って）食している。あれだけ食べていた米食は、昼食時軽く一飯のみで、夜は米もパンも食えなくなった。あと熱いコンソメスープの中に生生姜（親指大）をすり込んで、そのなかにせんべい1〜2枚を適宜割ったのを食しながら飲んでいる。

食後仕上げの飲み物は、純玄米黒酢大さじ2杯に野菜ジュース（小さじ1杯混入）を飲み、牛乳1杯でヘルシー朝食を終える。あと1時間以上かけて新聞読みで下腹に圧迫をかけ続けて、読了後トイレへ。この朝食の狙いは食後の快便の一語につきる。いろいろな耳目より得た情報を実践し積み上げてきたものだ。

今日、小沢一郎氏に無罪判決。（24・4・26日）

○幼いころから厄神さんの日が近くなるとか、特別な日が来ると嬉しくて気持ちが浮つく癖が直らない。連休初日の28日、孫達が来るので掃除機かけと並行して、布団干しをベランダ、押し入れの上段へと腰を動かして、虎の尾を踏んでしまった。曲がっている腰骨を伸ばしたのだ。加えて痛めている左足をかばうために、右足に負担をかけて階段の上り下りをしたため、30日孫達の来る日に頸椎症と腰部脊髄狭窄症も原因したのか、右足首からした足の甲全体が腫れて、痺れ痛みが出て歩けなくなった。結局右足首をくじいた。捻挫だ。2日受診。

主治医の指導で10日から自宅周辺からリハビリウオーク開始。再発防止に杖人生が始まった。医師から

は転倒要注意を。歩行時「丁寧に、静かに、ゆっくり」の言葉（ラジオ深夜便入選文より）を思い出して呪文のように唱えることにした。これは他の所作時のみならず思考時にも活用することに。間違はなく歩かなければ歩けない足になる年齢だ。痺れ痛みに慣れるようにしたい。薬は痛みとしびれを和らげる2種類を。火曜日と日曜日を除く毎日7時20分ごろ出発、12日からリュック（3キロ）を背負って駅まで30分の歩行日常活動に戻した。

前に作家の曾野綾子氏が「老いの才覚」のなかで随所に痛くつらい思いを認めておられたが、今回で骨身にしてみてもそれを体験した。80歳台を前に杖を頼りに歩き生かされていることに感謝しつつ、新しく課せられた自分の世界に挑戦するしかない。またこれを機会にこれから与えられた時間は判らないが、前途はつらく苦しい痛みに孤独に（痛みは本人にしか判らないのだ）耐えてゆかねばならない。なるべく周りに負担をかけないように。これからが人生の正念場本当の人生だ。スイッチの入れ直し、たがの締め直しとしたい。

今日、雅と粹の東京スカイツリー開業日。

（24・5・22日）
○昨29日、俳人の黒田杏子氏が「明日への言葉」（ラジオ深夜便）で、「転ばぬ先の杖」「杖を突くようになってやさしさ」を再認識したとの話をされていた。全く同感で、わたしも杖つき人生スタートで、新しく見えてきたことを記したい。

駅への歩行時、曲がっている腰から、どうしても視点が3〜4メートル先の道路上に。健常時気付かなかった道路路上を移動中の蟻や名も知らぬ虫や毛虫、みみず、蝶（道路白線上）など小動物に結構出会うのだ。踏みつぶさないように杖を使って足を進めている。前を時には上を向いて歩いていた頃には、平気で踏みつけて歩いていたことだろう。己が杖つきなる社会的弱者の立場になって、弱いものたちの生きざまを尊重したい気持ち。やさしさを実感している。

多摩丘陵を登り下りする道路はかつての乱開発で、曲がっているだけではなく路面上が左右に傾いており、アスファルトがつぎはぎの上、平坦でないので痛めているふくらはぎに痛くつらいのだ。いまさら道路行政に怒りに向けてもどうしようもないことだが、現

役の健常時に走るように、飛ぶように歩行していた頃には考えもしなかった体験だ。

「自立」も（老いの才覚）で曾野綾子氏の提言の一つだが、それは老体にもつらく厳しい老いの坂を迎えたわたしには、この言葉は忍耐と攻めの気持ちと継続力の裏返しだと思う。ついで同氏は「○○をしてくれない」なる他力願望の「ぐれない族」がいかに多いかを指摘されているが、改めて自戒し続けたい。

転倒リスクも想定内に。間違はなく手首、肩などの骨折につながるので、日々刻々緊張感をもって継続歩行をしている。

（24・6・30日）

○勤め人感覚つまり「休まず！」を通してコナミスポーツセンター通いこの10月で15年。現在日曜と火曜（クラブのメンテナンス休日）を除く週5日、帰省など自己都合の休み、怪我、捻挫などの場合の休みのほかは、入院等のいわゆる内臓関係疾患での休みは1日もない。支えられてありがたいこと。クラブ通いは皆勤で我流の健康生活目標のコア（中核）手段だ。

どうしても家の家事都合などで休み、明けて出ると仲間からの声がかまびすしい。「何の病気だったの？」

連休休み明けなどは「死んだのでは？」とエスカレーターしてくる。「わたしにも生活がある」などしつこい詮索好きの面々には軽くないなしているが、考えてみればクラブ通いの仲間から80歳台前のわたしも目標視されているのだ。というのはわたしも87歳の方をはじめ、同年輩以上の人達を健康到達想定目標にしているのだ。「休んでなるものか」と週5日の午前中、知らず知らずに競い合い、励まし合っている良い刺激環境のなかで過ごしているのだ。下着類を入れるロッカー番号も「79」と15年間変えていない。

昔の床屋談義ならぬサウナ室談義で、わたしより若い仲間へ話しているのは、このクラブ通いは、自己健康管理を前提とした、言葉は激しいがサヴァイバル・ゲームに参加していることを自覚すること。次に器具を使つての運動や、入浴をすることも大切なことだが、朝から（わたしの場合7時20分自宅出発）9時開館、11時30分クラブを出るまでの連日繰り返す動きⅡプロセスこそ貴重と考えている。5月、足の捻挫をしてから2階から4階の浴室へ7段ずつ左へ右へ（4回）上手すりを必ず持つよう実行中。自分のみならずぐ

上を登る他人の、突然の転落時を想定対処している。

大阪桐蔭春夏連覇の今日。(24・8・23日)

○本誌41号(22年11月)で、ますますグローバル(地球規模)化する外来語の自習を採り上げたが、最近PAで始まる①パラダイム(社会の規範や価値観が劇的に変容すること)と、②パラドックス(逆説。一見真理に反するようでいて、かえって真理を表す説。例えば「負けるが勝ち」口「急がれば回れ」など)について、わたしの偏見で現在の激しく急変し、カオス(混沌)を深める内外社会の現状認識とそれにかかわる雑感を認めたい。

パラダイムについては、その重要度から、3・11後安全神話原子力村の崩壊による原子力発電政策だ。未だフクシマの水素爆発後の収束処理は今なお進行中であること、除染処理、使用済廃棄燃料処理など、遠く果てしなく不安な将来(風評被害や被曝差別と海陸食産物の安全問題など)を展望するとき、およそ安全とは正反対の事象下であり、まさにパラダイム・チェンジ中だ。改善に現常識を思い切って打ち破ったパラダイムを実現して欲しい。格安と言われたコストが、限

りなく大きい負の対価払い(納入税金を充当)をさせられる厳しい現実と、孫世代までかわる重い課題に暗澹たる気持ちで一杯だ。

あえてもう一つ最大のパラダイムは電話機の世界。有線電話から携帯、スマホ、インターネット・ワールドへの大変遷はどうだ。古いわたしはついていけない。インターネットからパソコンに侵入(ウィルス)して遠隔操作で、無関係な他人名での爆破予告(サイバー犯罪の実行)にいたっては、驚異的な科学技術の進歩に、社会規範が後追いをしている最たる事例だ。底なしの怖さを感じる世の中になった。あの黒と赤のずしりと重かった有線電話器の昔を懐かしく思うのはわたしだけだろうか。

パラドックスは、個人も国家も我欲の追及に忙しく、一方格差社会の拡大と、敗者が浮かばれない閉塞感と不満感が充満している世上で、必要な考え方だと思う。が反面、万事スピードが求められ余裕のないこの世の中で、上掲のイ、口は通用しているのであるうか?敗者復活至難はイに通用せず、口は足腰の痛くない元気な高齢者が混雑道路を迂回する場合のみに通用か。

戦後復興から高度成長期の全国民が目標に邁進した、
絆深く希望が持てた良き時代ならいざ知らず、今は死
語になりつつあるのではないかと心配だ。また現在、
学校教育面でどういった実例を掲げているのであろう
か？ 興味のあるところだ。

何故かやりきれなく重苦しさ連続の今日、パット明
るく大きなパラダイムにつながる山中伸弥教授ノーベ
ル医学・生理学受賞喜びの日。（24・10・8日）

○先月16日を3年3カ月前の政権交代からを振り返っ
て、何故かわたしは石川達三氏作品「風にそよぐ葦」
を思い出した。投票率史上最悪といわれた白けた選挙
のわりには、結果は正に極端だった。

「今年こそ！ 今年は！」を3回も繰り返してきて
4年目、これからも続けられる12年交代選挙の詳細な
分析、検証結果は専門家に任せて、アガサ・クリステ
イー風に「灰色の小さい脳」のわたしの拙い考えにつ
いて恥を恐れずに認めたい。笑われようとも今後の日
本の将来行動のスタート年の年頭に、どうしても書い
ておきたい。

冒頭の「葦」がそよぐのは風によるが、国民大衆に

吹いていた「何とかしてくれ」風と、永田町を中心
とする政界に吹いていた「何とかするよ」風が合致し
たのだ。期限に迫られ、時間に追われての輸出不振と
火の車の国家財政、震災復興、原発・エネルギー問題、
社会保障と消費増税を含む税の一体改革と、外圧高ま
る外交問題に加えて、これだけ若者社会に漂う閉塞感、
不安感、諦感が高まってくると風が合わさったのは必
然だ。

もうここまでくれば、大きくなくてもいい、どんな
風にも打たれ強い、国内外にしっかり根を張り、若芽
（子孫世代）を芽吹かせる葦（日本国）を目指して欲
しい。

目先駆け引き政局の明け暮れはもうゴメンだ。与党
2党で上述の難問題を解決できるのであるか？ 優
先順位（プライオリティー）の選択も大切だ。それ
になによりも強力な実行力も必要だ。多くの有識者の
見識に従い「どんな組み合わせにせよ適材を集結した
オール・ジャパン体制で臨まないと」に同感だ。庭に
鳥がくれた万両の赤実美し送稿日（25・1・4日）

（昭和9年、柏原町生まれ／前・金融機関他勤務）

但馬・和田山の竹田城跡を訪ねて

山 本 喜 則 (市島町)

天空の城とか東洋のマチュピチュといわれて近年、人気の出てきた城跡を是非とも一度訪問したいと思っていたところ、二月下旬に福知山で古稀記念の小学校の同窓会があり、その翌日に思い切って訪ねた。

JR播但線、竹田駅の西方、古城山(標高三五四m)の山頂部が竹田城で虎臥城(とらふすじょう)とも呼ばれる。天守閣等はないが、全国屈指の山城遺構で、規模は南北約四〇〇m、東西約一〇〇mである。



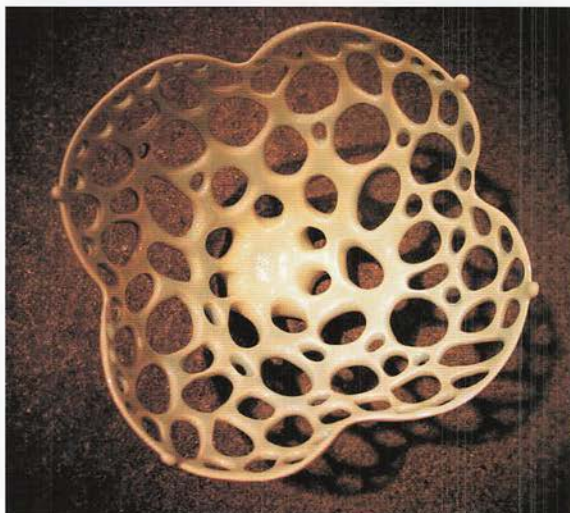
当初は朝霧に包まれた景観を期待していたが、当日は予想外の雪模様で、麓の山城の郷(資料館、レストラン、特産品販売所等がある)の駐車場から頂上まで三〇分弱の歩きだった。降り続く雪の中、足元を気にしながらも、人けのない城跡の散策は貴重な体験だった……。

My Gallery

由良 利枝子さん（氷上町出身）



ギャラリー玄海（新宿）で個展など、作品を発表されています。



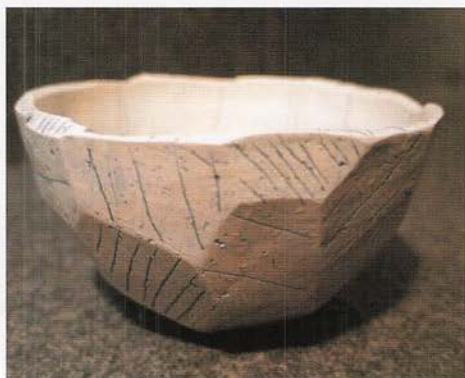
左の作品は、『水の化石』と題した作品です。

水しぶき・雨だれ・泡や波のおもしろさを作品にしたいなという思いは10年以上前から暖めていました。

磁器が混ざった粘土を使用することで繊細な表現も可能になり、5年ほど前から発表できるようになりました。

最近の水のイメージから離れ花や葉・種をモチーフに作ることもあります。

由良 利枝子



世にひっそりと、しかし凛として生きる愛しい苔や、野に咲く可憐な花々をこよなく慈しむ由良さんの作品は、それらを最高に輝かせ、私たちの目をも輝かせます。

（撮影・紹介 藤原 ひさ子）

My Gallery

谷 敬三さん（柏原町出身）

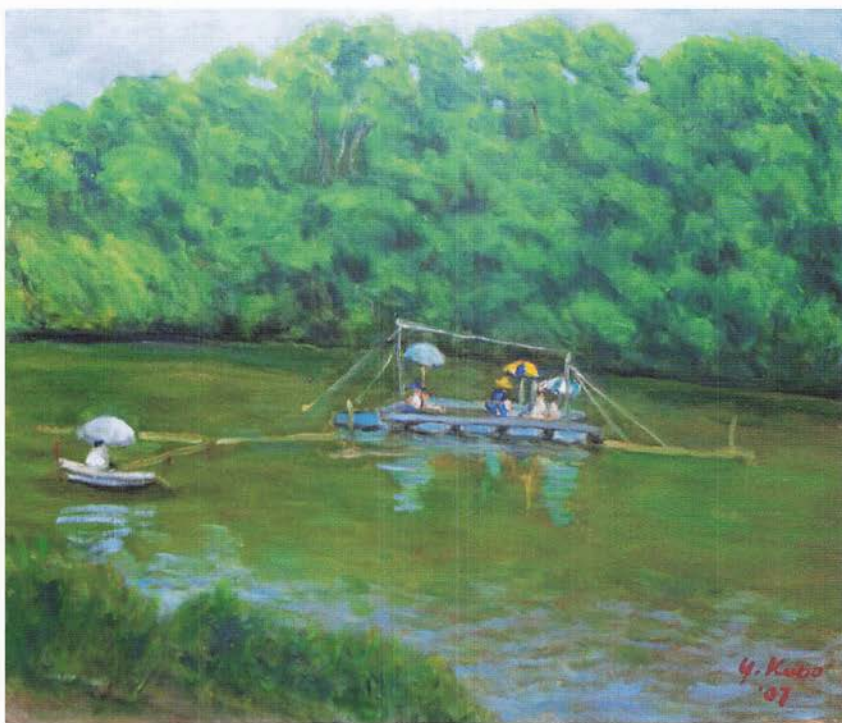


谷さんは、学生時代からラグビー一筋だったのがヘルニアを患ったのを機に、49歳から一念発起して絵画や合唱に傾倒。

この絵は、昨年の都美術展に出品された100号の大作「恋は紅いばら」です。奥様の誕生日を意識して描かれたとか。圧倒的な迫力と奥様への愛情があふれていて思わずシャッターを切りました。（紹介・岡吉明）

My Gallery

久保 良雄さん（山南町出身）



古利根・油彩 F 10号



みかんの花・油彩 F 15号



霞ヶ浦梅雨入り・油彩 F 8号

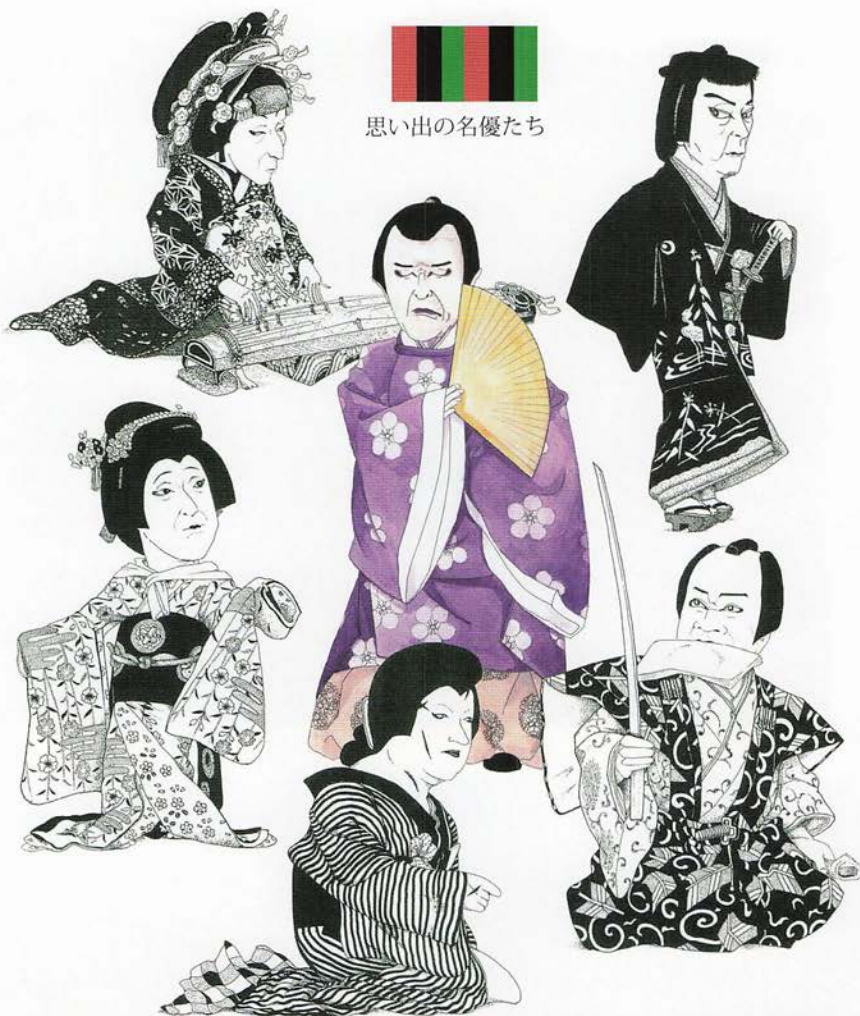
久保さんが油絵を始められたのは、職場内で行われていたクラブ活動として、とのことですが、全員OBとなった現在も当時のメンバーが集まって描き続けておられるそうです。年に一回はグループ展もやっておられます。現在の活動はもっぱら野外での写生だそうで、写生ではその場の空気を描くことを心掛けておられるとか。（紹介・岡 吉明）

My Gallery

上田 道代さん（氷上町出身）



思い出の名優たち



「思い出の名優たち」は知人の本の挿絵として描かれたものですが都合で出版されず、日の目を見なかったもの、下のは昔の仲間たちの顔だそうです。

似顔絵のコツは、描く人の短所を長所に、描く人に愛情を持つ、女性は2割方美しくだそうです。（紹介・岡 吉明）

俳壇・・・・・・・・・・・・・・・・

左に熱海湾、初島。右は箱根へ続く山。ペランダに出ると下方に熱海梅園が見下ろせるこの住まいに主人を見送って後に越し来て三年目になりました。NHK俳句友の会は続けております。

久呉 道子（柏原町）

くらがりを越えて大和へ芹の水

薫風のひかりを流す最上川

新緑や戸隠奥の杉霽

虎が雨晴れて端正富士の嶺

（NHKコンクール作品）

表札は夫のままなり盆の月

薄氷の縁より解けて揺れぬたり

湯の街の川添ひを往く秋日傘

六月の風美しき藍の店

※

いつしか八十路を歩みはじめている。今は丹波に知己もなく故郷はますます遙か。望郷は忘郷と

なつて久しい。

今は「富士山少年俳句大会」を主催し、会長を務めている。応募句数約一万。今年第六回目を迎えている。

懷郷五句

金子 徹（青垣町）

春灯をグラスに注ぐノスタルジー

父を恋う遠い記憶に蟹がいる

よれよれの神と行き交う里神楽

追伸につくつくぼうし鳴いてます

長らえば昔は近し里桜

※

四季を詠む

藤原 保（山南町）

寄つて来い 二人で遊ば 庭雀

初夏の 踊り子青葉 きらめけり

彼岸には 昂を歌え 永遠の友

蝉絶えて つんと澄ませし 秋の雲

腰痛も 生きてこそあれ 爛の酒

※

豪雨・川の氾濫・竜巻・雷の報、かたや渇水・雨乞。あらためて自然への畏敬と感謝の念深いこの頃です。

自然の営み恵み、働く人に感謝しながら三度の食事をいただいております。農産物・海産物に掌をあわせませす。太平洋戦争時非常時を思い出し、さらに「米粒や愛し」日記代わりのように俳句を書きとめています。自然と人間の美しさを求めています。

小松 京華（市島町）

報徳の星や出でし丹波葛野村
睡蓮に成りて暮らすや老婦人
短夜やレンジャーズスペインブラジルや
丹波春日春日局生まれけり
河童忌や豪雨雨乞い誰の技

※

介護ボランティアは今年で十年目。そろそろ私が介護対象者の年齢になって来ました。もう少し現状維持にとめます。 坂上 勝朗（氷上町）
猫とふたり蟬湧き出る時を待つ

襲ひ来る蚊の根性をせめて欲し
絋着て祖母に従う寺詣で

闇深し蛙の声明天震ふ

旧盆の送り火幽けく燃え尽きぬ

※

大岡山は風が……と思つたらいきなりの豪雨と激しい雷。全部電源を切つて、暑い、暗い中、所在なく窓外の稲妻を眺めていました。

上田 道代（氷上町）

天地縦横雷の 光と音に雨も加わり

夕立の風情は遠し今日の豪雨

春雷のかすかに聞こえ本閉じる

雲のかたち樹氷にも似て旅気分

五月雨夢のあとさきとらえかね

半月も雲がさえぎる熱帯夜

早起きの雀ゴーヤの花芯喰い

野路菊揺れ 孤独深し 母近く朝の

※

町の高齢大学で頑張っております。丹波の事胸に焼付いて離れません。 島津 和子（山南町）

幾世代墓を守りし百日紅

明け方や夏掛さぐる両の足

糸通す針の穴にも日脚伸ぶ

いさかいし地団駄踏みて仰ぐ月

雲海やマチュピチュ山の上に立つ

※

リタイヤ二年目。再任用で不登校の子を持つ親の教育相談を、教育センターで行っています。晴れた日に見える富士の姿を励みに勤務しています。先日は四〇年前、新任の時の教え子と会食し楽しい時が持てました。趣味の自転車では、霞ヶ浦サイクリング大会で一週九〇kmを四時間台で走りました。

足立 和信（青垣町）

灯籠にかくれクルスや葛の花

涼しさや蹠を合はせ嬰眠る

宿坊の手斧の梁の淑気かな

最澄の山にきてをり初御空

筆匠の筆毛選りをり青簾

四句まで『角川俳句大歳時記』に収録

詩座……………

林望著『臨終力』を読んで 上 高子（氷上町）

数年前、『老人力』という本が流行ったことがある。今日、『臨終力』という本を読んだ。

マスメディアでは「終活」とか、「エンディングノート」とか言葉が頻出する。

昔から「死」は誰にも一〇〇パーセント訪れていたのだから

今更、と言えなくもないが、こんな言葉が言いはやされるのは

老人が多くなつたからだ。

六〇歳以上の人口が約三〇パーセントで、世界一という日本。

当然関心は高く、ビジネスになるのだろう。

早くから備え、迎える終末期と、

そんなことを考えないまま突如死を迎えるのと、

どう違う？

自分だけのことを考えれば、死後どうなろうと知ったことか、とも言える。

しかし、後に残される人たちの困惑を考えれば、はやくから断捨離し、減畜し、遺言を書いておくのが親切なんだろう。

それに、死んだ後も評判を落としたりたくない、という気持もある。

なんだ、それは。

死後の世界を信じていなくても？

現生に残される人たちへ迷惑をかけたくない、悪く思われたくない、と気にするのはどうして？

きつと、それこそ「愛」なんだろうね。

自分が生きた証し。

愛し、愛されたことの記憶。

少なくとも現生の家族や友人に記憶に留めてほしいのだろう。

時間ができたら、終活を始めてみようか。



歌壇……………

十三年間一人暮らしをしました柏原から長男、三女の住む春日部に引き上げて来て半年が過ぎました。ようやく生活のリズムが整って来ました。まだまだがんばらなくてはと思っています。

足立 美都子（柏原町）

挨拶もせずに立ちたる丹波路の誰彼の顔目に焼
きつきており

子等のため夕食作る楽しみが生き甲斐となる
八十にして

里の家に残せし花の数々を思い出しつつ園芸店
巡る

思い出の花ひとつずつ買い求め心の隙間うずめ
てゆけり

朝の薬飲み忘れしを夜気づく、ひと日の過ぎる
速さ身に沁む

※

昨年は私が、今年は妻が共に病院のお世話にな

り、健康であることの幸せをつくづく感じた年であつた。

荻野 哲男（柏原町）

手術待つわれに付きそう妻の顔作り笑いがぎこち
無く見え

カーテンをせわしく閉めて看護師は主治医に
そつと耳打ちをする

「はつきりとガンと言われてしまったよ」今は
亡き友顔浮かびたり

聴診器かけては居るが診察はパソコンをうち五
分で終る

いつの日か登って見たいと思いつつ世界の富士
見ゆ病室の窓

病室の窓を開ければ壮大な鰯雲見て秋の日終る

※

介護ボランティアの徒然に。

坂上 勝朗（氷上町）

久々に詣でし目黒不動尊今日はやさしき眼差し
に逢ふ

豆ご飯豆の多少を争ひし弟妹共に老ひを迎ふる

明日も来てあさつてもまたその次も介護ボラは
かくて十年

※

何とか元気にやっています。四人いた子供も三人まで結婚し、夫婦と無愛想な息子と猫二匹の生活になりました。そんな中でも楽しいこともそれなりにあります。

福田 治子（青垣町）

老いたるも男も女も幼きもマスクをつける季節
となりぬ

たたみたる洗濯物より立ち去りし猫のぬくもり
残れるタオル

限りある命を賭けて悔いなきものわれ見つけた
り二十四にじゅうしの時

※

ご当地スーパ―が流行っているらしい。都心には山形や宮崎やと県名を冠した物産館がある。丹波に帰省した折、東京へのお土産にしたいと思うものは、焼鯖や鱈焼きや、三角形のお揚げさんである。

原谷 洋美（山南町）

丹後より浜焼鯖が竹ぐしを刺して泳げるやうに
届きぬ

焼鯖と落と山椒の混ぜご飯供へてけふは母の命
日

嬉しさうになんで知つとんなあんのと母は言い
つつ夢を出入りす

孝子さんの玄米買ひぬ卓上の精米器より丹波が
零る

まだ温くすこし湿りし米糠は漬物桶にたんば宿
さむ

ほめくねえ母は汗ふき言つてゐた夕立の来る前
に必づ

冬至まで貰ひしかぼちやを置いておこシンクの
下に黄の花咲かせ

畦道に摘みしどくだみ束にして校門くぐれり杳
き記憶に

厚地木綿のゲートル二本竹竿に揺れてゐし日の
父は笑顔で

イノベーション・ジャーナリズムを根付かせたい

—世のため人のために念頭の記者魂—

朝日新聞編集委員

安井孝之さん

●インタビュアー

岡田昌子
上 高子



《プロフィール》 1957年水上町生まれ。柏原高校、早稲田大学理工学部を経て東工大大学院修了。日経ビジネス記者を経て、1988年朝日新聞社入社。東京経済部や大阪経済部で経済記者を経て、2003年に東京経済部次長。2005年から編集委員。著書に『これからの優良企業』、『日米同盟経済』（共著）など

——築地市場にある朝日新聞社を訪ね用意していた
だいた会議室にてお話を伺いました。

◆クロカン少年から彷徨の思春期へ

——日曜日の「波間風間」では顔写真付き、土曜日の「逆説進化論」ではお名前付きで、大きなコラムを持つておられ活躍中です。顔写真や名前付き記事は新聞社の偉い方が受け持たれるのでしょうか？（笑い）
安井 そんなことないですよ！（笑い）最近の朝日新聞紙上ではコラムや「記者有論」といった記事には顔写真が出ています。効果があるかどうか分かりませんが、顔の見える記事をといたことらしいです。その多くは報道局の編集委員が書いています。



——編集委員

とは相当な力量
がおありになる
証拠だと思うの
ですが、幼少時
から優秀で新聞
記者を夢見る少
年でしたか？

安井 あまり

考えたことはな

かったです。小さい頃はいつも走っていました。氷上町立東小学校の裏山に城山がありました。そのアップダウンのある山を冬には全員で毎朝走っていました。大体1位か2位。氷上中では陸上部で長距離を走りました。郡大会では2000メートルや3000メートルで優勝しました。走ってばかりでした。でも、丹有大会で篠山の生徒に負けて、練習も実はつらかったの
で、陸上は高校で止めました。カメラ班に入り奈良の
仏像や産業廃棄物置場の車のスクラップを写したりし
ていました。

——その頃に環境問題への視点などが芽生えたので
しょうか？

安井 いや、あったかもしれないけれど当時では普
通の少年だったと思います。高校のころに書いていた
日記を改めて読み、確認したのですが、夏目漱石や太
宰治といった多くの若者が読んだ小説はまあ普通に読
んでいました。なぜかカフカの「変身」が面白かった、
と書いていましたから、脈絡のない雑読です。三木清
の「人生論ノート」なども読んだりで、思索の上では
青春していましたね。

——初恋などもあったりして？（笑い）

安井 そう、初恋は幼稚園の時、それから次から次
へと、高校もプラトニックでしたが、好きな人はいま
した（大笑い）。進学は医学部と決めていました。「雪
雪時代」で癌研究が盛んな大学があるのを知り、不治
の病といわれた癌を治療したいと強く思ったのです。
だけど、結局は医学部入学に見合うだけの勉強はでき
ませんでした。高卒後は宅浪したり、京都に下宿して
予備校へ行ったりしている内に二浪してしまいました。
三浪はしたくなかったので、二浪目に受かった早

大の理工学部に入りました。当時は生物化学の勃興期で、化学ならひよっとしたら医学の周辺の仕事ができるのではないかと考えて化学科で学びました。

——記者の道とは離れていくようなプロセスですが、大学院では地球化学を研究されたとか。

安井 大学3年か4年の時に、専門雑誌で読んだ論文のなかで「社会地球化学」という研究分野があることを知りました。地球上の化学物質が土壌、水、大気などの中をどのように移動するのかを調べるのが地球化学です。そこに人間が活動している社会の変化が、どのように関わっているのか調べるのが「社会地球化学」。面白いなあ、と思いました。それで大学院に進みました。

——難しそうですね？

安井 困ったのが就職です。同級生とは4年遅れていました。そろそろ働かなくてはというわけです。だけど84年頃は地球化学を勉強したといっても、その関係の仕事はあまりありませんでした。一途に一つの事をやり遂げるタイプではないので学者の道は自信がない。かといって化学会社に入って、新しい物質をつく

るというのも、地球化学で勉強したことが活かせないなあ、と感じていました。そんな折、日経マグローヒル社（現日経BP社）が技術系の記者を採用していると友達が教えてくれて、面白いかも知れないと入社試験を受けたら、運よく入れてくれました。環境関係の雑誌の仕事だと思っていたのに経済誌に配属され、全く未知の分野での初仕事となりました。

◆情報社会の先端を走る新聞社で考えること

——医者志望から地球化学の研究を経て経済誌の記者というのは紆余曲折ですね（笑い）

安井 そうですね。でも理科系の研究と記者の仕事は共通点があるんですよ。研究は仮説を立てて実験し、結果からまた仮説を修正するという作業を繰り返します。記事を書く際も、仮説を立てながら多くの人の話を聞いたり、現地を見たりして、またそこから仮説を見直します。一定の結論にたどり着いたら記者は記事を書きますが、研究者は論文を書く。対象は異なりますが、日々の作業は同じような作業だと思います。論文も記事も面白く、分かりやすく書かないとだれも読

んでくれないし、興味も持ってくれない。今振り返ると、大学や大学院で学んだことが、今の仕事にも役立っているとは思いますが。

——なるほど！ でも、文を書いて不特定多数の人に理解してもらうのは難しいことですね？

安井 そうです。分かるように書かないと見向きもされない。いつもこれは何なんだとまず考えるようにしています。その中の普遍的なもの、本質的なものを理解し、分かりやすい言葉に置き換えるように努めます。

——朝日新聞社への転職の切っ掛けは？

安井 1988年にアエラが出版された際の中途採用で入社しました。4年ほど雑誌記者をして、もともと日々のニュースを追う新聞で仕事をしたいと思ったからです。それ以降、経済畑25年です。

——丹波人としての意気込みはどのようなものでしたか？

安井 風呂はマキ、小学生のころまでは信号無しで、ダイヤル電話もありませんでした。どんな田舎やと思われていましたが、そんな田舎話を売りにしてしま

たね。

——さすが、遅いんですね！

安井 私は変わり身が早かったと思います。だけどこの齢になつて初志貫徹しなかった歯痒さ、自分はこれでいいのだろうかという思いが常に心の片隅にあります。人が喜んでくれる、社会が良くなる記事を書いているのかと常に考えています。天皇陛下のバイパス手術を執刀された神の手と言われる天野篤教授を取材した際に、天野さんが3年浪人して医者になられたことを知りました。あの時に頑張れなかった自分を思い出しました。ですからもうこれからは、あまり長くはありませんが（笑い）、しっかりと働きたいと思っています。

——記事の影響力は大きいと思いますが、常に自分の記事の貢献度をお考えになつていて、大切なお気持ちを聞かせていただきました。厳しいお仕事と思いますが今後の抱負を！

安井 連載記事やコラム「波聞風聞」でも書いているのですが、新しい会社を興そうとする人達を紹介し、本人に励みにしてもらい、読者もそこから刺激を受け

るような記事にしたい。これからの世の中は大企業だけが引つ張っていくのではなく、小さな企業や地方の企業が世の中を変えていくと思います。よりよいもの、新しいものに変えようと挑んでいる人たちの知恵や努力を共有することで、よりよい方向に社会は変わってゆくと思います。そんなニュースを伝えて社会変革の一助になるという「イノベーション・ジャーナリズム」を根付かせたいと考えています。

——お忙しそうですがお休みは取れますか？ お暇な時のご趣味は？

安井 休みは取れますよ。フルマラソンを走ったりもしましたが、最近は膝が痛くなり、走れていません。でもウォーキングでぶらぶらとやっています。

——丹波の若者や後輩たちにお言葉を！

安井 私もそうでしたが、これ一筋と思い込むことはない。挫折しても諦めないことです。歩くのを止め立ち止まってしまうとその先は見えません。もう少し歩けば風景は変わってきます。新しいものが見えて来ても変わるかも知れない。世の中を変えようとしている人たちに会おうと感ずることですが、信じるものや

パッションでまず動き始めることが大切だと思います。親、兄弟ともこちらで生活しているので丹波に帰る機会はめつたりなくなりしましたが、自然があり、人の良さがある丹波はすばらしいと思います。

——今日はありがとうございました。ますますのご活躍をお祈りしています。

インタビューと言

岡田昌子（臨床心理士・人間関係士）

日本をリードする優秀な記者が揃うブランド新聞社でのご活躍とあらばさぞかし、と少々緊張しましたが、気さくで謙虚で気遣いのある真面目なお人柄に感動。日本を良くしたい熱い思いをしっかりと伝えたいと思いました。

上 高子（認定NPO法人アジアの新しい風事務局長）
イノベーション・ジャーナリズムという言葉にすっかり魅せられて、インタビュウの日以来、知人にメールで振れ回っています。世の中を変えるのは、大企業ではなく、小さいけれども志をもった個人や小グループ、というところ、私たちがやっぱり丹波出身ですねえ。

私の職場

郵便局の株式上場を目指して

日本郵政株式会社の経営企画部門で

谷 垣 邦 夫（柏原町）



本誌の「私の職場」欄に寄稿せよとお話をいただいたときは、実は、少し戸惑いがありました。私はいま、日本郵政株式会社という会社の経営企画部門を担当しておりますが、当グループはここ15年の間に、政権の方針で形態を何

度も変更しており、「職場」と言っても簡単にご紹介するのは中々に難しいなあと思つたからです。しかしながら、せつかくの機会であり、郵便局という国民の皆様に関しまれていられる存在が、今、こういう節目を迎えているかを知つていただければと思います。拙文を寄稿させていただきます。

日本郵政は、私が就職したときは、郵政省というお役所でした。平成15年4月に日本郵政公社となり、更に、平成19年10月に民営化され、株式会社になっております。また、同時に会社の分割も行われ、

持株会社である日本郵政株式会社の下に、郵便事業と郵便局を運営する日本郵便株式会社、郵便貯金を扱う株式会社ゆうちょ銀行、簡易保険を扱う株式会社かんぽ生命保険という3つの主要子会社を有する4社体制となっております。

それぞれの会社は、子会社といつても規模が大変大きく、日本郵便株式会社は、正規従業員約20万人、24年度の取扱郵便物数223億通、全国の郵便局数約24,000局、所有不動産簿価も全国有数の規模となっております。

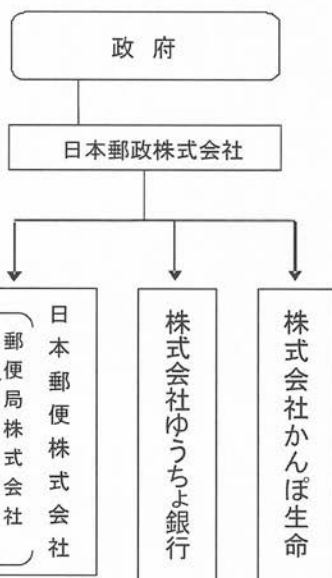
昨年5月、JR東京駅前の旧東京中央郵便局跡地に、高層ビルJP（ジャパン・ポスト）タワーが竣工しましたが、このビル内の商業施設「KITE（キッテ）」が、新装成った東京駅とともに話題を呼んでいます。総来館者数は、3

月21日のオープンから約5か月で
大台を超え、一千万人を突破しま
した。

また、ゆうちょ銀行の貯金残高
177兆円、かんぽ生命の保有契
約数3680万件となっており、
持株会社も合わせたグループ全体
(25年3月期連結決算)では、純
利益5627億円を上げているグ
ループです。これも、明治4年の
郵便事業創業以来、150年近く
にわたって国民からご愛顧をいた
だいてきた成果のたまものでしょ
う。



JR東京駅前「JPタワー」



そしてこの15年間に、郵政事業
は大きな変転を経てきました。戦
後発足した郵政省は、橋本総理
(当時)の行政改革会議の議論を
経て平成13(2001)年に郵政
事業庁となり、2年後の平成15
(2003)年に日本郵政公社と
なりました。国営ではありませんが、
それまでの官庁会計から、企業会
計原則に変更され、企業としての

しました。この民営化法案は参議院
で一度否決されて、小泉総理が衆
議院を解散し総選挙を行った8月
8日の「郵政解散」の後に可決成
立しました。ご記憶の方も多いで
しょう。

しかしながら、その民営化体
制も、平成21(2009)年の民
主党への「政権交代」により、株
式売却凍結法が成立し、平成24

経営原理が導入さ
れました。休む間
もなく、小泉総理
(当時)の民営化方
針を受け、平成17
(2005)年に郵
政民営化関連法が
成立し、2年後の
平成19(2007)
年から、日本郵政
公社は5分割され
て民間企業となり

(2012)年の改正民営化法の成立まで動きを止めることになりました。

そして、昨年12月16日の総選挙で自民党政権に戻り、わが日本郵政グループも、6月20日に株主総会を終え、新しい経営体制で再び株式上場に向けて歩みだしました。



日本郵政株式会社本社ビル

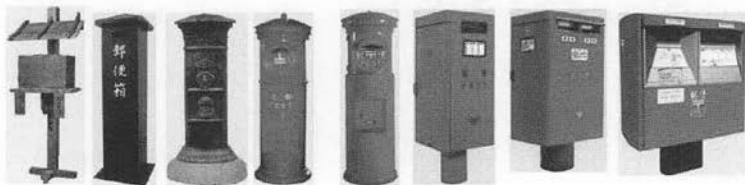
私は、この間、ほぼ一貫して企画担当として法律改正と組織改革を担当してきましたが、民営化した以上は、経営陣の強固なガバナンスのもとに安定した経営を行う必要性を痛感しているところです。

言うまでもなく、民営化になって、グループの方針や従業員の意識は大きく変わりました。昨年10月には、創業150周年に向けて「郵政グループビジョン2021」を公表し、サービスの改革、マネジメントの改革、社風の改革という3つの方針を打ち出しました。もともと郵政事業は、お祝いレタックス、定額貯金や学資保険など、お客様の一生のサイクルに沿って、それをサポートするサービスを行ってきましたが、今後はサービスの改革を進め、それを徹底して、もっとお役に立つ

総合生活支援企業」となることを目指しています。マネジメント改革では、企業

的人事・経営管理を徹底し、社風改革では、国営時代の縦割りのな発想を廃し、自ら仕事に向き合い価値を生み出すことを目指しています。

しかし、この巨大グループを上場にふさわしい会社にするにはなかなか大変事です。しっかりした、ガバナンス体制を



郵便ポストの変遷

構築し、成長戦略が描けなくてはなりません。課題は山積みです。新しい業務開始について、昨年9月に、住宅ローンの販売、学資保険の改定などを認可申請しましたが、いまだに当局から認可をいただけておりません。競争条件が対等でないということです、もはや競争上の優位性はなく、国営当時の規制のみが残っています。

ところで、国営企業の民営化、株式上場は、わが国でも多くの先行事例があります。中でも最大規模は、日本電信電話公社が民営化されたNTTです。1987年から2000年まで6回にわたり株式の売却を行い、政府の持株比率は3分の1までに減少しましたが、2回目の売却（1987年）時の売却総額は、4兆9千億円を超え、という規模になりました。

NTT上場のときは、いわゆるバブル景気の最中であり、大きな市場吸収力がありました。今はご承知のように好景気ではありません。

世界の動向はどうでしょうか。世界の郵政事業体で株式を上場している国は、ドイツポスト、シंगाポールポスト、オランダ（ポストNL）、オーストリアポスト、ベルギー（bpost）の5か国です。また、イギリス（ロイヤルメール）とポルトガル（CTT）の2か国が上場に向けて準備をしているところです。この夏、実は、英国とベルギーに行つて上場の戦略について、英国政府やロイヤルメール、ベルギーポストの経営陣からお話を伺ってきました。関係者からは、株式上場という大変困難なミッションに向けての緊張感

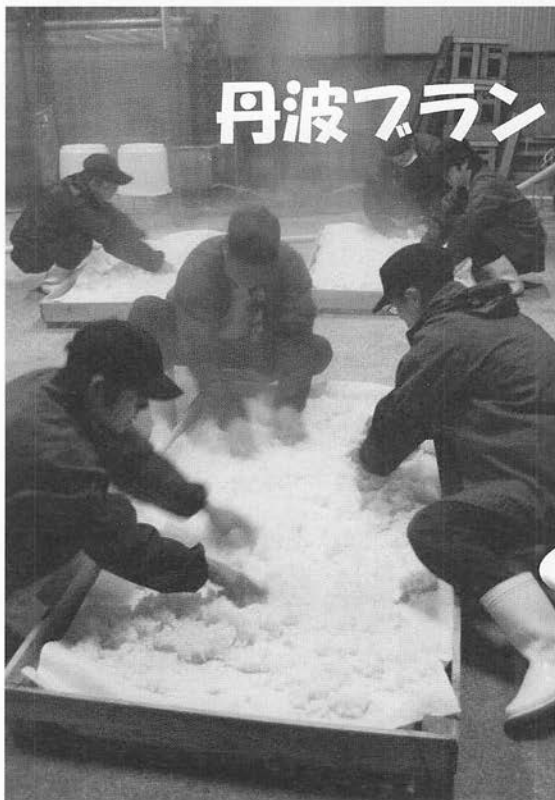
がひしひしと伝わってきました。

こうした、国内の民営化企業や海外の郵政事業体に続いて、「郵便局の株式上場」に向けて、3つの改革をやり遂げ、将来への成長戦略を描いていきたいと考えています。

私としては、重責に身の引き締まる思いです。国民の皆様に親しまれた郵便局がわが国においてもっともつと役に立つ存在となるよう、微力を尽くしていきたいと思えます。

（昭和34年8月、柏原町大新屋生まれ／昭和59年、東京大学教養学部を卒業して郵政省に入省。兵庫県豊岡郵便局長、近畿郵政局人事部長等を経て、平成18年、日本郵政株式会社部長、執行役を歴任し、平成25年1月より同社専務執行役に就任／趣味は山歩き、ベンチプレス（17年前に世田谷大会で銅メダル）。）

蒸しあがった酒米を極寒の早朝に自然冷却する放冷作業（山名酒造提供）



水の良さで4社集中

小田 晋作

(丹波新聞社会長)



丹波市市島町には清酒の製造会社が4社ある。柏原税務署管内（丹波市・篠山市）のメーカーで作る丹波・篠山酒造組合加入9社（本社6、他は工場）のうち、丹波市内のすべてが同町に集中。かつては10社ほどあったと言われ、町内の水の良さを物語っている。4社とも江戸時代ないし明治の初めから続く老舗で、全国に名前を浸透させている所も。昔から地域の経済や文化の中核的な役割を果たし、次代への戦略を練る各社を紹介する。

◆奥丹波（山名酒造） 創業300年、量より味で勝負

4社のうち最も古いのは山名酒造（市島町上田）。享保元年（1716年）の創業とい



山名純吾社長＝江戸時代に建った山名家母屋の前で

うから、間もなく300年を迎える。江戸期は「千歳」、明治以降「万歳」の銘柄で製造してきたが、11代目の山名純吾氏（53）が社長に就任した平成になって「奥丹波」と改めた。

それまで灘の大手メーカーへの桶売り（原酒の供給）のウエートがかなり高かったが、酒造場の将来を考えると独自色を強めることが重要になる。近年、田舎のイメージアップに伴って「丹波」のブランド力が高まっていることに目をつけ、この銘柄に一本化した。

「量より品質、味で勝負したい」との思いから、20年前から桶売りを廃止。このため、年間8000～10000石製造していたのが、現在は400石。

売り上げも最盛期の6割に落ちたが、買いたたかれていた桶売りから、純米酒や吟醸酒の附加值の高い製品にシフトし

たことから利益率は上がり、知名度の向上と共に売り上げもここ10年間、数パーセントずつ伸びている。

「態勢を切り替えてから生産量のガタ落ちで蔵まのびし、これからどうなるやろと、4、5年間は本当に苦しかった。今は灘のメーカーが製造がだぶついて逆に桶売りに回るようになっていいる。あの時、しんどい目をしていてよかったと思える」と山名社長。

主だった製品としては、純米吟醸の「山田錦」、戦後姿を消し県の試験地で生き延びていた「野条穂」の復刻酒（純米吟醸）のほか純米酒、本醸造酒の4点が定番商品。また年末に5000本（1・8リットル）限定で発売する、丹波産の山田錦を使った搾りたての純米吟醸「木札」は、「奥丹波」の中でも一番人気の商品。今年からは丹波市内の五百万石の有機米などを使用し、江戸期の禅僧、仙崖の書をアレンジしたラベルを付けた自然酒イメージのシリーズ「陽酒」、「雨酒」、「土酒」を発売、注目を集めている。

販路は自然食品系の流通業者を通じたカタログ販売、インターネット及びDM（ダイレクトメール）が各30パーセント。残りは地元卸・小売り、料飲店な

6代目社長に就任。テレビ会社の営業マンとして酒とは縁の少なかった同氏だが、心臓部の蔵を初め事務から販売まですべての部門に身を投じて仕事することによって、業界の外からの眼で問題点を洗い出し、改革に乗り出した。

「まずは人の問題。大勢でやっている割には活気がなく、規律が緩んでいるように思えた。流通では消費者目線で見るのでなく問屋任せになり、資金回収でも杜撰なところが見受けられた」。これらの点を社員と話し合って一つ一つ解決することにし、リストラを進めた結果、1997年に10億円近く(生産量3500石)だった売り上げは06年に4億6000万円に減った。「帳簿上は減収でも、利益の出る引き締まった体質」(周三社長)になると共に、現在は5億6000万円(生産高2000石)まで回復している。

製品は本醸造、純米酒などの普通酒のほか、大吟醸・純米大吟醸の「路上有花」、「天楽」、「風楽」、「酒仙」など、著名デザイナー、綿貫宏介氏による独特のデザインを施した容器入りの酒が彩りを添える。

同社もインターネット、DMによる通信販売に力を

入れ、計26パーセントを占めるが、もう一つの柱として6年前から手がけているのが中国、韓国、アメリカ、シンガポールなどへの輸出。和食店や寿司バーの普及と共に増えており、13パーセントのウェイトになった。中間マージンを減らすため、日本の商社への委託をせず現地の卸と直接取引する。当初は決済面など不慣れなことも多かったが、社長自ら相手国を飛び回って得意先を開拓。また前金支払いを原則にして、リスクを避けるようにした。

特に輸出面で同社製品の強みとなったのが、容器やパッケージのあらゆるところで採用した綿貫デザイン



高浜虚子筆の「ここに美酒あり 名づけて小鼓といふ」の碑(西山家玄関先で)

を卒業して2年間、西宮の酒造会社で修業した後、1963年に実家に帰って父の後を継ぎ、77歳の現在まで50年間、この道一筋で来た。

「営業があまり得意でないので、桶売りに頼ることが多かったが、コスト的にも厳しいので、独自製品を少しでも増やしていきたい」と、10年前から手がけているのが「百人一酒」。地元の農家を作る飯米のコシヒカリを使って仕込む純米生酒だ。玄米600キログラムから1000リットルを製造。うち6割は会員が引き取り、残りは市販する。

玄米を供出する会員向けは1・8リットル3本セットで4800円。一般用は同6150円。毎年、正月に向けて年末に出荷するが、会員たちが共同作業でレッテル張りをし、村の年中行事に。農業の業界紙に紹介されたことなどから、全国の消費者から注文が来るようになった。

◆玉つるぎ（中大槻酒造場） 昔からのファン根強く 中大槻酒造場（市島町中竹田）は明治5年（1872年）に現在地に移転して製造開始。大槻昭社長は4代



「玉つるぎ」の銘柄を守る大槻昭社長＝中大槻酒造場で

昔からのファンも根強い。

こつこつと仕込む酒で、丹波市や福知山市内の店に卸しているが、現在の生産量は年10石。ピークだった昭和40年代の100分の1に減った。若い頃は繊維商社に勤めていた大槻社長は現在86歳。後継者は決まっていないが、「阪神間や京都方面から買いに来て下さる人もあり、製造を止めることは出来ない。たとえ小規模でも、仕事の面白さは十分感じており、身体が元気な限り続ける」と話している。

目。以前は「竹の露」の銘柄だったが、軍隊演習の時、大槻家に泊まった将校の勧めで、三種の神器にちなんで「玉つるぎ」に改名した。磐座（いわくら）山の伏流水を汲み上げた地下水は他社の杜氏からも「当地で一番良質では」と羨まれるほど。芳醇でまろやかな味は、

「平成三陸大津波」からの 復興を目指して

野村 節三 (山南町)

大再開通した「三陸鉄道南リアス線」の車両（大船渡市三陸町三陸駅、H25.7.2）



周知のように、一昨年三月十一日午後、突如発生した大地震「東北地方太平洋沖地震」によって起きた未曾有の「東日本大震災」から早くも二年四ヶ月（七月）が過ぎようとしています。あの時襲来した巨大津波「平成三陸大津波」による当地方の惨状とその一年四ヶ月後の状況を本誌（第42、43号）に寄稿しましたところ、多くの会員読者に関心を寄せて頂いて大きな反響を呼んだことに心から感謝しますと共に、編集部のお勧めで、大津波遭難者への鎮魂と被災地の復興を祈念して二編の現地報告にまとめられたことは誠に幸いと思っております。こうした中、今回、編集部からさらにその後の状況についての寄稿依頼を受けましたので、わが国史上稀な大津波後の記録として残しておくことも必要と考え、あえて第三報を寄稿する次第です。

あの大津波の爪痕は今でも当地の海岸、街跡、漁港などに残り、見る人々に当時の生々しい惨状を呼び起こしています。また、あの日あの時、多くの尊い命が

失われましたが、現在確定している大津波の死者数（括弧内は一昨年六月）は大船渡市で三四〇人（三二二人）、行方不明者数は八〇人（一四〇人）、合計四二〇人、陸前高田市では死者数は一、五五六人（一、五〇八人）、行方不明者数は二一七人（六三二人）、合計一、七七三人に上っています。つまり、一昨年から現在までに行方不明者が遺体で発見されて、確定死者数が当初より増加しましたが、現在の行方不明者は遺族によつて既に死亡したものと諦められた人が殆どです。当地では現在も警察による行方不明者の懸命な搜索が続けられています。その発見は相当な困難が予想されています。

これに関連して、北里大学海洋生命科学部三年生の女子学生・瀬尾佳苗さん（東京都出身、21）が三陸公民館前で津波に流されましたが（本誌第43号）、未だに行方不明で大津波二周年に当たる今年の三月十一日に御両親が慰霊のため三陸町越喜来へ再訪されました。その瀬尾佳苗さんはあの日、津波に遭つてとつさに車から出た時、近くへ車椅子のまま流されて来た一人の女性高齢者を見付けて助けたのですが、その直後

に転倒して、そのまま大波に吞まれて行方不明になったと聴きました。

あの日と同じ寒風に小雪が散らつく追悼の夜でした。その御両親は辺りが真つ暗な荒涼とした小学校（今年五月解体）跡地で地元やボランティアたちが板切れを集めて燃やした追悼の焚き火にあたりながら、「三陸が大好きで水族館の学芸員を目指していた娘は、この大津波で人を助け、その代わりに自分は犠牲になったことに悔いはない」と、語られたことに胸を打たれました。

また、宮城県南三陸町ではあの日、女子職員・遠藤未希さん（24）が防災無線で住民に最後まで避難を呼び続けて大津波に流され、翌月に近くの海で遺体が発見されたことも悲痛な出来事でした。

さて、本題である大津波その後の当地での復旧・復興状況について述べることにします。

災害復興にはソフト面として、被災地住民の意思と希望である「心の復興」が先決です。その現われが当地に古くから伝わる郷土芸能イベントの開催です。鎮魂と復興を祈願して、勇壮な念仏剣舞や鎧剣舞、鹿踊



三陸港まつり：力強い浦浜念仏剣舞
 (『おおふなと昔がたり』第19号：H23.8.)

りや虎舞、七福神舞、全国太鼓フェスティバル、盆踊りなどが賑やかに繰り広げられました。

一方、復興事業の前の後片付けもまだ続いています。岩手県内では大震災で生じた「瓦礫と流出土砂」の総量は五百二十五万tとされ、本年三月までにその処理が三九%終わったのですが、県は九月までに「瓦礫」の七八%を処理する目標を立てました。当地では残っていた「越喜来小学校」と養護施設「さんりくの園」も解体され、その「瓦礫」も片付けられて広い更地は一面雑草に覆われ、NPO手作りの牧草地には羊が放

牧され、大津波に耐えた一本のポプラ（本誌第43号）が復興の様子を見守るように立っています。

本来の復興というハード面では交通網の再開が最も急がれる事業ですが、当地での復興の第一号は昨年から工事が始まり、今年四月初旬に再開した「三陸鉄道南リアス線」です。区間は盛さかから吉浜よしはままでで全線の約半分ですが、住民にとっては待望の鉄道再開でした。

因みに、今NHKテレビ、朝の連続ドラマで放映されている「あまちゃん」は早くに再開された三



大津波の猛威に耐えた「一本ポプラ」
 (大船渡市三陸町越喜来：H25.7.2.)

陸鉄道北リアス線（久慈―宮古）沿線での北限の海女^{あま}の物語です。その他、JR東日本の旧・大船渡線（盛―気仙沼間）のレールを撤去した線路を舗装してBRT（バス高速輸送システム）と呼ばれるバス路線になって運行が始まり、新幹線・一ノ関までの交通が便利になりました。

また、三陸縦貫自動車道の越喜来―吉浜間と陸前高田市内の延長路線の建設工事も急ピッチで進行中です。一方、当地での大きな復旧・復興事業としては、やはり、壊滅した大船渡港埠頭（一万ト級船舶用）の防潮堤の着工（岩手県）と釜石湾口防波堤の着工（国交省）です。釜石湾口では防波堤の本体になるコンクリート製の巨大な「ケーソン」（重さ・七千六百ト）をタグボートで現場まで曳き、それに海水を注入して海底に沈めて設置されました。大船渡湾口防波堤については、課題（本誌第43号）もあり、いまだ着工の目途がついていないのが現状です。しかし、各地区では海岸防潮堤の県レベルの詳細な建設計画が市民に示されました。

このように、復旧・復興計画は国、県、自治体の総

力を挙げて一部でようやく始まったばかりですが、沿岸南部住民の復興についての意識調査（東海新報）によれば、その六五％が「復興の遅れ」を実感し、復興の進捗が最も遅いのは「新たな住宅地の供給」となっています。

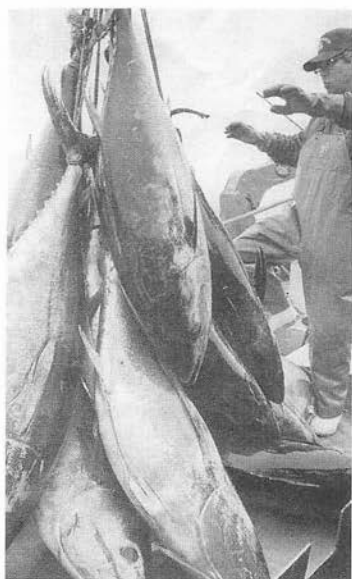
ところで、この住宅地の建設ですが、当三陸町では高台で予め建設予定地となっていた数カ所が県埋蔵文化財センターによる調査で「縄文遺跡」であることが判り、現在、ボランティアによる発掘が行われている最中です。当地にいた縄文人が津波を避けて高台に居住していた事実は沿岸住民にとって教訓の一つですが、その遺跡発掘が住宅建設の遅れにもなっているのです。もっとも、遺跡発掘が終了すれば当局が推進している「防災集団移転促進事業」（防集）の支援を基に住宅地の整備が進むと聞いていますが、その時まで多くの被災者は不自由な仮設住宅生活を余儀なくされます。

一方、当地方の最も重要な第一次産業として漁業・水産業がありますが、壊滅的な被害を受けたこの分野の再興が懸念されていました。

ところが、今年になって、当地の増・養殖漁業で最も重要なワカメが順調に生育してかなりの収穫があったことは幸いでした。また、今夏は天然ウニ漁も以前のような状態に戻りつつあるようです。

ただ、五月中旬に三陸海域で採れたホタテガイに規制値の二倍の貝毒が検出され、出荷自主規制がなされましたが、最近はその心配もなくなり、海の環境悪化も一時的だったようです。

こうした中で、五月下旬に三陸沿岸海域で大・中形のクロマグロが定置網で大量に漁獲され、大船渡魚市場に約二百三十本が水揚げされました。この他、サク



三陸沿岸の定置網に入った大型クロマグロの水揚げ（大船渡魚市場：東海新報：H25.6.21）

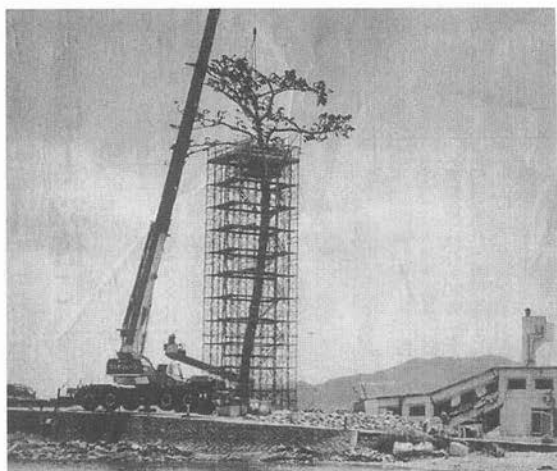
ラマス（ヤマメの降海型）、サケ（オオメマス）、サワラ、タラなども水揚げされ、久しぶりの大漁に漁船や魚市場に活気が戻ってきました。ある漁師は「量的に幸先よく最高のスタート」といい、魚市場のある役員によると「この時期にこのように豊漁になるのは珍しく夏のサバ漁や秋サケ漁にも続けば」と期待しています。

続いて六月には巻き網船が大船渡港に入港し、イワシ七十五tが水揚げされ、月末には昨年より一ヶ月早い初ガツオ五十四tやワラサ（ブリとハマチの間）百tが水揚げされるなど、漁獲量の増加に益々期待が高まってきました。さすが世界三大漁場を誇る三陸です。当地方の漁業者は今回の大被害と人手不足にも屈せず、再興に向けて頑張っています。

一方、今回の「平成三陸大津波」の惨状を後世に伝えるためのモニメントとして、今は全国的に知られるようになった元・名勝高田松原の「奇跡の一本松」（本誌第42、43号・樹齢は百七十三年と判明）は塩害で枯死しましたが、その復元を目的に昨年十一月に一旦伐採して、愛知県弥富市の製材所で幹の中心をくり貫き、京都市内で防腐処理のあと、枝葉部分は強化プ

ラストティック製のレプリカに作り替えられ、本年三月に元の高田松原跡に設置されました。ところが、枝葉の角度が本来の角度と違っていたため、再工事がなされ、六月末に九ヶ月ぶりに完全な元の姿になって立ちました。

この復元工事は約一億五千万円が見込まれたのですが、国内外から寄せられた募金が六月末にはその見



復元工事中の高田松原「奇跡の一本松」
(陸前高田市高田町、東海新報：H25.6.4.)

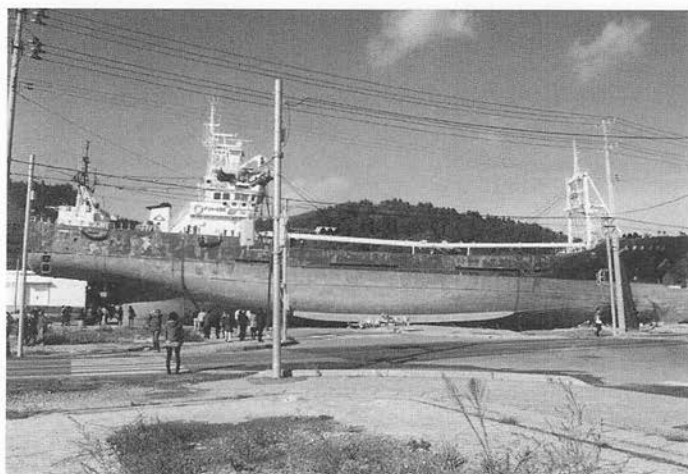
込額を上回ったということです。その後もこの一本松を一度は見えておきたいと大勢の見物人が現地を訪れ、地元ではその対応に追われています。

最近、ライトアップ装置も取り付けられ、あの大津波の猛威に耐えたこの「奇跡の一本松」は被災地の惨状を後世に伝えると共に「復興への希望」としてそこを訪れる人々の心に深く刻まれることでしょう。

また、この松の接木つぎぎによる後継樹「四兄弟」が岩手県の森林総合研究所で順調に生育し、一本松保存活動にも尽力している「やなせたかしさん」(本誌第43号)がノビル、タエル、イノチ、ツナグと命名しました。また、この一本松の松ぼっくりの種子で生育した実生苗もあり、将来の高田松原の再生に遺伝資源として保存・活用されることになっています。

その他、大津波の猛威を示す遺構としては、宮城県気仙沼市鹿折地区しおへ大津波で打ち上げられた大形巻き網漁船「第十八共徳丸」(全長六〇m、三三〇t)があります。周辺の街並みは壊滅して更地になり、この漁船だけが取り残されて多くの見物人が訪れています。一時は大津波の記念物にする市側案も出ましたが、

被災者の気持ちは複雑で、その管理にも相当な経費が掛かることから、船主の意向で解体されることになりました。大槌町の民宿の屋根に乗り上げた釜石の観光船も同様でした。



大津波で駅前通りへ打ち上げられた大形漁船
(宮城県気仙沼市鹿折地区：H24.11.18.)



相模原キャンパス移転後の北里大学海洋生命科学部三陸キャンパス
(大船度市三陸町越喜来：H25.7.6.)

ところで、ここ二年来、大船渡市民の大きな関心事であった課題がありました。それは北里大学海洋生命科学部（元・水産学部）が大津波で多くの学生アパートが流失したことから、かつてあった三陸キャンパスから神奈川県相模原キャンパスへ全教職員と学生が移

転した事態でした。

そこで、当市では、当初目途であった五年後の三陸への復帰を強く要望して、早期再開を掲げた市議会議員連盟や再開促進期成同盟会が結成され、二万六千人の市民による署名運動も展開されました。しかし、大学側では三陸キャンパスは今後、国際的海洋生物研究や学生実習に使用する「三陸臨海教育研究センター（仮称）」とし、学部・大学院での教育・研究は相模原キャンパスの新築校舎で継続することが正式に決定（四月末）されたのです。

この件は私立大学の経営・運営上、苦渋の決断とされていますが、過去約四十年間の三陸での教育・研究実績と地元への貢献度や交流がきわめて高かっただけにこの決定は当市民にとって大きな衝撃でした。そこで、近く結成予定の両者協議会で今後の方針が審議されることになりました。

最後に国レベルのニュースをお知らせします。七月五日に天皇・皇后両陛下が被災地視察のため当地方へ御来訪になり、市長以下多くの市民が大歓迎しました。その他、今回の大震災を契機に環境省によって従来の

「陸中海岸国立公園」が新たに青森県種差海岸^{たねさし}などを含めた「三陸復興国立公園」と指定・変更されました。その趣旨は「甚大な被害があつた東北太平洋沿岸の復興に向け、地域資源を生かした観光振興や自然の脅威を伝える場として一層の活用を図る」（東海新報）ことにあります。

この時宜を得た環境省指定を弾みとして、大津波後の復興がさらに促進され、風光明媚な三陸海岸の景観が戻り、自然と共生した新しい沿岸都市が構築される日が一日も早く来ることを切に念願しています。

結びに、関東氷上郷友会の益々の御発展と会員皆様の御健勝を遥か三陸よりお祈りして、大津波被災地からの報告を終わります。

（昭和9年、山南町岡本生まれ／北里大学名誉教授・理博
／岩手県大船渡市三陸町在住）

留学生と第三次被災地訪問

上 高 子（氷上町）

「福島復興無くして、日本の再生無し」という言葉が、いつしか心を占めるようになって。3・11以来、岩手県大槌町を支援の対象として、留学生たちと二度にわたり訪問してきたが、次はどうしようかと考えたとき、「福島」が浮上してきた。それは根源的な問い、「何をすれば復興支援になるのか」ということへの応答でもあった。

四月二十九日、新宿発八時のチャーターバスに乗って、留学生七名と会員一〇名は一路南相馬市の仮設住宅へ向かった。カーナビにはその時々々の立ち入り禁止区域が反映されていないので、事前に現地の事務局から入手していた経路をバス会社に渡してあった。しかし、当日のドライバーがそれを無視してカーナビで運転したのだから、立ち入り禁止の「ストップ」に何回も引っかかり、すぐそばに福島第一原発の煙突を目にし

たときは、思わず留学生の顔色を窺った。

企画当初、南相馬市の南端で原発から二〇キロ圏内にある「小高地区」を見学したい、とスケジュールを留学生たちに諮ったが、「私たちはまだ若く、これから結婚や出産をする体ですから」とやんわり断られていた。それなのに、バスのすぐそばにテレビでおなじみの煙突が見える。でも誰も文句を言わない。そここに、交通整理用のライトを振りかざして黙々と大勢が働いている。それは、バスで通過するだけの我々が一瞬わずかの放射能を浴びようと、そんなことは大したことではない、と思わせるに十分な光景だった。

小高地区から避難した一万三千人が住む仮設住宅へ着いた。二六か所のグループに分かれているという。私たち一行は二手に分かれ、二つの仮設住宅の集会場へ入った。一つの集会場では、バスの遠回りでかなり遅れて着いた私たちを、二〇数名の主に老人たちが待っていてくれた。ここで二時間ほど、留学生の司会でカラオケのご自慢大会や、留学生の一人漫才、南国（ベトナム、中国、タイ）の紹介などで交歓した。もうひとつの集会場へ行った人たちによると、人数が少



小学校の授業でベトナムについて
プレゼンテーションするチャンさん

なかったので、ひとりずつ自己紹介し合って、苦労話など傾聴したらしい。「東京へ避難したら、福島の人と後ろ指さされた。仮設はみんな福島の人たちで安心」という話を聞いて、留学生が「自然より人の心の方が怖い」と感想を述べていた。

夜は宿泊先で夕食をとりながら、今回の手配をしてくださった南相馬市交際交流協会事務局長・若松容子さんと、「小高地区」から逃れ仮設住宅でNPOを立

ち上げた今野由喜さんから、被災者としての立場でお話を伺った。元英語教師だった若松さんはさまざまなデータを示しながら、「復興スケジュールに従ってすこしずつ前進している

と期待していると、東電の汚染水問題など、次々水を差すようなニュースで、みんな一喜一憂しています」と地域リーダーとしての苦悩を語った。

今野さんは、ある自動車部品の企業で国際的な取引に関わったビジネスマンだったが、退職後いよいよ故郷の「小高」で悠々自適のセカンドライフを、とUターンしてすぐ、地震と津波と原発の三重災害に遭った。山形へ一時避難をしたものの、故郷を見捨てることはできず戻ってきて、仮設住宅のまとめ役として毎日奔走しておられる。四世帯同居だった大家族が、息子たち夫婦と孫は都会へ、自分たちと両親は仮設へ、と分断された。「ご覧のとおり、仮設住宅は高齢者ばかり残っていますよ」。

話のあと、参加者が自己紹介をしながら、感想を述べ合った。ある会員が、「留学生のみなさんは、原発をどう思いますか」と尋ねたのをきっかけに、七人がそれぞれ感想を述べることになった。

ベトナムから京都大学へ留学中の、チャンさんの話が印象的だったので紹介してみよう。

チャンさんと私は、NPOアジアの新しい風がマッチ

ングした「Iメイト」というメール交換のカップル。ハノイの貿易大学で第二外国語として日本語を学んでいたとき紹介され、二〇一〇年の秋にメール交換を始めたときは、間違いながらもやつと自己紹介ができる、という程度の日本語力だった。その後日本の文科省の奨学金に合格（英語で受験）、二〇一一年の四月から東京外大へ語学留学が決まっていたとき、3・11が起きた。日本は一体どうなるのか、自国民にさえ不明だったのに、四月一五日には成田空港へ到着した。大きなスーツケースのほか、段ボール箱に千羽鶴の束が入った段ボール箱を抱えて。この辺については第一次「被災地に向かった留学生たち」（第42号）に掲載したので今回は省く。

チャンさんは第一次被災地訪問団で、大槌町へ行き千羽鶴を届けた。去年の第二次でも大槌町を再訪した。その時々、私は「ベトナムは日本から原発を買うのよね。原発についてどう思う？」と尋ねたことがある。すると、「上さん、ベトナムは電気が足りないので生産性が上がりず貧しいのです。でも原発ができればよくなるし、それにベトナムは地震がありません。福島

原発は古いけど、ベトナムにできるのは最新型です」と教科書に書かれたような模範的回答がすぐ返ってきた。

南相馬の宿舎で感想を述べるチャンさんはすっかり変わっていた。「原発は反対です。私はいままで大丈夫だと思っていたけど、日本人もそう思っていたのに、起きた。そして被災者は悲惨です。もし同じようなことが起きたら、ベトナムでは日本のような対応はできない」と発表した。頭で考えるのと、現実を見るということの違いを、はつきり悟った瞬間だった。

翌日は、相馬郡新地小学校6年生の国際理解の授業に留学生が参加。チャンさんはパワーポイントを使って、「ちびまる子ちゃん」の挿絵を入れながら、ベトナムと日本の比較を話した。「ハノイでは、気温が下がると学校が休みになります。それは何度でしょう」とクイズを出したら、〇度から少しずつ上がってきて、10℃とわかり、「暖房機がないからね」と説明を受け納得。

中国人の宋さんは、東大の大学院で日本語を研究しているが、同じ漢字が、日本と中国では意味が違うものがある、という話をした。手紙はトイレットペー



仮設住宅でじゃんけんゲームに興じる被災者たち

パー、娘はお母さん、などなど。「えっ」という驚きの声が上がった。質問コーナーでは、小学校6年生とは思えない「尖閣諸島についてどう思うか」、「中国の格差社会についてどう思うか」という問いに、政治問題とは一線を画したい宋さんは驚いたようだが、「棚上げ」とまずは答え、さらに、「格差問題は全世界の問題で真剣に取り組む必要がある」と無難に答えていた。あとで先生から、「これまで国際教育はほとんどが欧米、英語、という固定観念があったが、今回の訪問を児童たちが大変よろこんだ、また来てほしい、

というメールが届いた。

帰途は、3・11の津波で最も被害の大きかったといわれる「閑上地区」を視察した。バスから降りて、何も無い、見渡す限り荒涼とした大地を呆然と眺めると、墓地の一角だけがくつきりと見える。近づくと、新しい墓石が並んでいる。どんなに悲惨な状況でも、先の見えない現状でも、先祖を弔うことが優先、という日本人の原点を見た思いがした。

私たちはそれぞれの住まいへ帰る。南相馬の人たちはこれからも故郷への帰還を願って仮設住宅で暮らす。「もし私が同じ境遇なら」と想像することが大事だ。マスメディアの映像や新聞報道などを通じてだけではなく、個人として知り合ったひとびとのことは忘れられない。我々の被災地ボランティアは受ける側よりも、訪問する方が学ぶことが多いようだ。「何をすれば復興支援になるか」、そのつど被災者と自分自身に問いかけ、これからも一年に一回、留学生と共に被災地訪問の活動を続けていきたい。

(昭和19年生まれ、氷上町成松出身／NPO法人理事・事務局長)

山南町・上滝のまつり

大野 義 昭（山南町）

故郷を離れ五十年、折に触れ思い出すのは地域の人々が一堂に会し、故郷を離れている家族、親族も集う故郷の「まつり」である。どこか家庭もまつり料理を準備、家族、親族に振舞った。



獅子舞

明治期に廃仏毀釈もあったが、神仏は分け隔てなく、数多の路傍の地藏尊等も含め、人々は自然に對し畏敬の念を抱き崇めるのが、日本人の宗教心ではないかと、先頃、新聞で目にした歴史学者上田正昭氏の「日本人の精神基盤」にもある。

本年は平成の大遷宮の年と言われ、六十年に一度の出雲大社（本年五月）、二十年に一度の伊勢神宮（本年十月）の遷宮がある。この年に、自身の故郷のまつり、催事に想いを致すのは意味のあることと思う。

厄神さん（柏原八幡神社）の思い出

鮮明に記憶している市内のまつりは、母校柏原高校隣の柏原八幡神社の柏原厄除大祭である。小中学生時、日頃質素な我が家でも二月十七日には、父が母と姉、小生を引き連れ参拝し家内安全を祈願し、近くの食堂で少し贅沢に寿司を食した。厳格な職人氣質の父も時に家族に優しい一面があった。一九七四年、小生が海外駐在に赴任の折に、母が厄神さんのお守りを送ってくれた。大分傷んでいるが、母亡き後も日々上着のポケットに入れて持ち歩き、時に取り出し、今日の無事息災に感謝し母を思う。三年前に病に襲われ、後遺症が僅かに残る左足の回復状況を確かめ階段を上りながら、人間にとって神仏は存在すると思う昨今である。

上久下地区上滝のまつり

上滝は、山南町の東端に位置し、東は川代溪谷を経て篠山市丹南町に通じ、西は下滝に隣接し南北に開ける柏原藩主織田上野介の領地で、元禄年間に水谷信濃守・安藤駿河守の分領となり、後に諏訪両家及び安藤氏の三家に分領された。文化の頃は戸数一八戸で、現在一〇〇戸ある上久下地区最大の集落である。川代を少し下ると、丹波竜発見地の真上に近年修復の大正ロマンを彷彿とさせる赤レンガの旧上久下発電所の建物が在り、裏の小高い山頂の境内に巨木千年杉のある守り神山口神社がある。二〇〇段近い石段前の鳥居より少し西に歩くと里蛭子神社があり、更に西方には裏山で恐竜の龍魂石と命名された巨石が発掘された菩提寺説宗寺がある。歴史と古代ロマンに溢れるこの辺を上滝のゴールデン・トライアングルと勝手に命名している。

山口神社のまつり

旧来まつりは十月十日であったが、現在は十月第二月曜日に行われている。大和葛城山麓の一言主神

社の分霊があり、約八百年前に現在地に鎮座されたと言われている。毎年二月二十五日（現在は十月第二月曜日のまつり当日に実施）に御弓神事があり、裃着用の新旧御当人計四名が矢数四十八本を三つの的に射、矢の当たり具合でその年の稲の豊凶を占う。小中学生時には本殿前で奉納相撲を取った。二〇一一年十月十日に数十年振りに、姉達と実家に集まり、兄嫁、甥夫婦、姪らの世話で食事会を持ち、亡き兄を偲んだ。当日は甥の次男が子供奉納相撲で優勝し、青壮年団の本殿前での獅子舞を見た。還暦を迎えた男子が社殿から餅まきを行う慣わしがある。還暦時は出張中で参加出来ず、兄が代わりに餅まきをしてくれた。当日、義姉や甥夫婦が準備してくれた餅と菓子をも、甥と一緒に本殿前から撒くことができ、まつりを楽しんだ。

本殿前に、古木千年杉の大樹（根周り一二メートル、目通り幹囲七・二メートル、高さ三五メートル）が聳え立ち、兵庫県下でも屈指の名木で、御神木とあがめられている。実家は松皮屋根材の仕事を生業とし、十数年前に兄や甥達が葺替工事を行った伝統



山口神社まつり



奉納相撲の土俵

的な松皮葺の本殿と明治年間に合祀の天満神社、蛭子神社、金毘羅神社、祇園神社も松皮葺で神々しさを醸し出している。

まつり前日には兄達が青年団時代に再開した獅子舞が各戸の玄関先で横笛の音色に合わせ舞い、一年の無事息災を祈願しつつ全一〇〇戸を回る。一目でわかる兄達世代の方々のご子息や新しく村に転居さ

れた若い方が一緒に伝統を引き継ぐ様を見た。横笛、鈴、太鼓の音色は、昔のままで懐かしく、故郷を離れ偶に聴く者にも力を与えてくれる不思議な音色である。

菩提寺、名刹臨濟宗妙心寺派三会山説宗寺

本尊は聖観世音菩薩。天正八年（一五八〇年）

創立で、開山は中本山慧日寺百世の松月和尚。境内に薬師堂があり、薬師瑠璃光如来が安置されている。この薬師如来は、以前、里地区で村人の敬信を集めた法流山長福寺の本尊仏で、明治四十一年、二年頃、堂社合併により説宗寺境内に遷座奉安された。説宗寺薬師如来縁起で、この薬師如来像は行基菩薩御作とされている。一遍上人が当地に巡錫された折、村は数十日の干天続きで稲苗は枯死寸前の状態で、村人たちは

丹波のまつり



三会山説宗寺

上人を請じて雨乞いの儀を哀願した。上人は村人達の意をあわれみ、薬師如来の尊前に参り、民の憂いを救うことを誓い、鞍が淵（川代地内）の岩頭に端坐し厳修され、読経半ばにして晴天にわかにかき曇り、雷鳴とどろき大雨になり、村が救われたと伝えられている。戦時に供出された名鐘（薬師の鐘）は、

昭和五十四年

御開帳の折、

壇信徒の浄財

で鐘楼と梵鐘

を再建。昭和

二十七年十二

月、裏山を整

備し上滝出身

戦没者慰霊塔

が建立され

た。

二〇〇六年

丹波竜発見の

前年二〇〇五

年に寺の裏山で龍頭の形をした巨石が発見され、寺の本堂前庭に「龍魂石」として安置されている。現石田住職によれば、丹波観光で来丹する人達が立ち寄ることも増えつつあるようである。八月のお盆等の年間行事があり、五月には甘茶が振る舞われ、やかん持参で貰いに行っていた。当時の住職は柏原高校の教頭でもあった葛谷俊道先生であった。

川代公園の「さくらまつり」と儒学者伊藤東涯の詩碑「川代景勝の詩」

川代公園の「さくらまつり」

福知山線で下り丹波大山駅を通過後、最初のトンネルを抜けると右手に川代公園がある。桜の名所川代公園では春は桜まつりで賑わい、夏にはキャンプを楽しむ、秋には断崖絶壁の間に紅葉を満喫でき、四季折々の風景を鑑賞できる。福知山線沿いに堰があり、農業用貯水池や一時期地産地消電力の魁をなした水力発電所の用水池の機能も兼ね、「川代まつり」の時期にはボートは川代堰に浮び観光資源としても活用され、人々が自然と調和して生きて来た様

子が窺える。「春は桜の川代堤、夢に似たよな想いをのせて、浮かぶボートに日傘がゆれる……」と始まる艶のある名調子「山南小唄」や、「アー咲いた桜の千本よりも アリヤツヤサツサ あつい人情の花一つ ヨイヤナ……」と歌われる元気のいい「山南音頭」には、その光景やこの地の人情が巧みに詠い込まれている。

まつり考を書くに当たり山南町誌で、儒学者伊藤東涯（一六七〇—一七三六、儒学者伊藤仁斎の長男）が享保六年（一七二二年）に川代の地を通り村長むらなかと思しき人の家に滞在の際に詠った漢詩「川代景勝の詩」の存在と、その文学碑が一九八六年に川代公園内に建立されていたことを知った。

この古詩は見事に川代の自然を詠い、南北に開けた上滝地区の良田、周辺の人々の様子、東涯が投宿した宅の、恐らく村長であろう主人の礼節や古典に精通した見識と生き方に感銘を受けた様子が詠われている。今年七月十三日に帰省の折、甥の案内で伊藤東涯の詩碑を訪れた。更に山口神社、里蛭子神社、上久下発電所と山口神社そばの発電所への水道管敷

設跡地、発電所傍の丹波竜発見場所、説宗寺、川裾まつり跡等の現在の様子も確かめた。

伊藤東涯の詩碑「川代景勝の詩」

漢詩解釈に正確を期し、家内の知り合いの陽明学の第一人者である中国哲学者、吉田公平元東洋大学教授にご教授頂き、また小生在住市の国際交流会で知り合った中国の古典、漢詩に憧憬の深い四川省出身のITソフトエンジニアの黄孟華氏にもアドバイスを頂いた。とりわけ書下し文は吉田先生にご協力頂いた。紙数に限りあり、一部のみを紹介したい。

晨出篠山鎮 嶠嶂翠相連

長坡登且望 蒼松前路巔 両懸自是分

遼谷自欲眩 一路萬万木中 十里絶人烟

晨に篠山の鎮を出づれば、

嶠嶂の翠は相連なり。

長坡をば登りて且つ望めば、

蒼い松の前の路は巔。両の懸は是れ自り分れて、遼い

谷は自ら眩からんと欲す。

一路は萬木の中、十里は人烟を絶つ。

(中略)

溪盡始夷曠 山趾多良田 暮投主人宅 相見意欣然
 禮待鷄黍勤 親朋來蟬聯 叩我以古道 娛我以簡編
 誰識幽邃中 有箇物外天 耕鑿忘帝力 憲章誦聖賢
 嗟乎吾何識 叩習得禮傳 留止餘浹旬 免被百務囿



伊藤東涯 川代景勝の詩 石碑

溪盡きて始めて夷曠、山趾は良田多し。
 暮に主人の宅に投じ、相見て意は欣然たり。
 禮もて待つに鷄黍もて勤め、親朋來たりて蟬のごとく聯す。

我を叩くに古道を以てし、我を娛しましむるに簡編を以てす。

誰か識らん幽邃の中、箇の物外の天有るを。
 耕鑿しては帝力を忘れ、憲章して聖賢を誦む。

嗟乎、吾は何をか識らん、叩き習いて禮傳を得たり。
 留止すること浹旬に餘り、百務の囿を被むるを免れたり。

吉田先生によれば当時高級とされた鶏肉等で遠方からの訪問者をもてなし、奥深い山村にも然るべき教養を持ち素晴らしい生き方をしていた人がいた事が窺い知れる。また、黄氏によればこの古詩は晋時代の陶潜(陶淵明、三六五―四二七)の「桃花源記」を想起されとの事である。

上久下地区の他集落

上滝地区の他に阿草、広田、下滝、青田、笹場、畑内、太田、北太田があり、各地区は歴史的に様々な領主の所領となり、それぞれの神社、お寺や様々な道祖神があり、各地区のまつりがある。各地区で神社や仏閣の古くからの伝統行事を引き継ぎ、地区独特の神事、催事があり、それぞれ見事なものと思う。

おわりに

『等伯』などの作家安部龍太郎氏の日経新聞への寄稿「祭りと共に生きる」に「日本人は祭と共に生きて来た。それはとりもなおさず神仏と共に生きてきたということではないだろうか」とある。丹波市観光ガイドマップ「丹波市彩遊古路」に紹介されているように、丹波にも様々な領主の所領となっていた歴史的背景から柏原八幡神社の厄除大祭などそれぞれの地域独自のまつり、催事がある事がわかる。ご興味のある方は、篠山口駅で丹波路快速に乗り換え、下滝駅で途中下車し、上滝川代の季節の光景



篠山川と丹波竜発掘地跡

詩」の解釈にご協力頂いた吉田公平先生、知人の黄猛華氏、他種々の情報の確認に協力頂いた方々に感謝する次第。

また、神社、寺社の歴史的記述は、山南町誌（一九八八年九月二十日発行）を参照、引用させて頂いた事を付け加える。

を鑑賞し、「川代景勝の詩」を推敲したり、丹波竜発見地、発電所跡、山口神社、説宗寺等を見て頂ければと思う。

本稿の記述で資料を借用した姉の友人、東涯の「川代景勝の

ふるさと人物記



田ステ女の俳諧

小松 京華（市島町）

まえがき

田ステ女は、日本文学史上代表的な俳諧聞秀作家である。正岡子規は元禄の四俳女の一人として、「燕子花のごとし。美しき中にも多少の勢いありて、凜とした力を入れたるところあり」と賞讃している。ステ女について綴りたいことが珠玉のごとく、きらびやかである。この度はステ女の年譜を掲げ、ステ女の年齢の順に俳諧作品を紹介する案内文となろう。

田ステ女は、丹波国氷上郡柏原本町に寛永十年（二六三三）、父田季繁、母妙善の元に生誕す。時は江戸時代三代將軍徳川家光公。名望富力兼有の父の掌中の珠として育つ。ステ女三歳を迎える頃、生母が世を去り、後年季繁は後妻映智を迎えた。ステ女

の継母なる後妻は一人の男の連れ子季成が存在した。後ステ女の夫となる。

ステ女は、天賦の素質才能に富み俳諧の道を究め、世に丹波国にステ女ありと知らしめる。ステ女の生涯は俳諧の趨勢から述べると【寛永・寛文期】・【延宝期】・【元禄期前半】にあたる。封建時代を凜乎として美しく生き俳仙と讃えられる背景も考察しよう。田家が学問・文学・俳諧を好む気風であったこと。夫季成との結婚生活もめでたく代官の妻として、五男一女の母であったこと。夫と文学・俳諧の趣味が同じであったこと。さらに当時超一流の北村季吟・湖春・宮川正由を師とすることに恵まれる。丹波の山奥といわれることがあるが、丹波は山国であって、全国的視野から見ると京都に近い。京都の季吟の元へ田家一族と共に上ったのである。季吟もまた田家に招かれ丹波の地を訪ねた。かの松尾芭蕉も伊賀上野から季吟の元へ上ったのである。ステ女は、丹波の俳諧の席へも出席し共に俳諧を産む。丹波の俳諧の栄える風土にステ女は、自分の才能条件を生かし貢献す。

ふるさと人物記

一、田ステ女年譜

西暦	年号年	年齢	俳諧ことらが等
一六三三	寛永十	一	ステ女誕生
一六三五	寛永十二	三	母妙善歿す
一六三八	寛永十五	六	「雪の朝二のじ二のじの下駄のあと」
一六四二	寛永十九	十	「酒一升九月九日使い菊」
一六四四	正保元	十二	(松尾芭蕉生まれる)
一六四九	慶安二	十七	藩主織田信勝公にまみえる
一六五〇	慶安三	十八	信勝歿す。父季繁代官職となる
一六五一	慶安四	十九	季成と結婚
一六五二	永應元	二十	長男季厚生
一六五三	永應二	二十一	松永貞徳『俳諧御傘』編集す
一六五九	萬治	二十七	父季繁歿す。二男季鶴生る
一六六二	寛文二	三十	三男祖瑞生る
一六六三	寛文三	三十一	宮川正由撰『俳集良材』にステ女入集す
一六六五	寛文五	三十三	長女マン生る
			寺田重徳撰『俳諧独吟集』出さる。
			「梅か枝おもふきさまのかほり哉」 「梅か香はおもふきさまの袂かな」

西暦	年号年	年齢	俳諧ことらが等
一六六六	寛文六	三十四	四男祖兀生る
一六六七	寛文七	三十五	北村湖春『続山の井』選集す
一六七〇	寛文十	三十八	「ぬれ色や雨のしたてる姫つづじ」
一六七二	寛文十二	四十	五男来應生る
一六七三	延宝元	四十一	「はいがいのりのほな」 『俳諧法農華』丹波神池寺松若軒 句常刊行す
一六七四	延宝二	四十二	継母映智歿す
一六七六	延宝四	四十四	八月廿一日 夫季成歿す
一六八二	天和二	五十	北村季吟撰『続連珠』刊行
一六八四	貞享元	五十二	「むらさめの夕はあやし恋し鳥」(句集やるや)
一六八五	貞享二	五十三	「花をやる桜や夢のうき世もの」
			十二月廿一日に落飾す 妙融となる
			正月京に移る 井原西鶴『高名集』にステ女丹波一人、載る
			井原西鶴『古今俳諧女歌仙』を撰集す(ステ女三十六歌仙の一人)
			九月京を立つ同三十日姫路に着く

ふるさと人物記

西 暦	年号年	年 齢	俳 諧 事 業
一六八六	貞享三	五十四	尼妙融涅槃の弟子となり嶺雲貞閑と改む
一六八七	貞享四	五十五	長女マン歿す
一六八八	元禄元	五十六	六月家を求めて庵をはじめ二男李鶴歿す
一六八九	元禄二	五十七	北村季吟・湖春父子、徳川幕府の歌学方となる（芭蕉奥の細道の旅に出る）
一六九一	元禄四	五十九	（芭蕉大津の義仲寺無名庵に入る）
一六九二	元禄五	六十	庵号を不徹と定められ貞閑を庵主とせらる
一六九四	元禄七	六十二	（松尾芭蕉歿す 義仲寺に埋葬）
一六九五	元禄八	六十三	織田信休 柏原に転封 田家邸宅が仮館となる
一六九六	元禄九	六十四	退隠し庵主を栄感にゆずる。嫂妙雲綱干より柏原の帰途に歿す
一六九八	元禄十一	六十六	長男季厚歿す 八月十日貞閑尼示寂 首座職贈らる

田ステ女年譜 『参考文獻』を元に、筆者編集作成

二、参考文献・資料

（本稿は、文献資料の転載にあたり、本文中に現時点で不適切な用語・言語も当時の世相を理解するため、そのまま引用しています）

▼『田ステ女』編集発行田ステ女をたたえる会 印刷・丹波新聞社（平成五年刊）

史料豊富で、俳諧のみならずステ女の生涯がわかる気品に満ちた書物である。田季晴氏所蔵のステ女の色紙も写真で鑑賞味わえる。私は平成七年阪神淡路大震災に宝塚で遭い、春日町を経て柏原町に疎開し、資料館にてこの尊い書物を得た。

『山ざる』に寄稿文を綴るにあたり、引用・転載はじめ全般にわたり田ステ女を世に広めるためならと寛大な許可を会よりいただく。

▼『俳諧法農華』^{はいかいのりのはな} 神池寺住職松苔軒堂編集刊行 大阪市立大学森文庫

(<http://dlisv03.media.osaka-cu.ac.jp/Mori.html>)

ふるさと人物記

私は幼少の頃、武庫郡本山村（現神戸市）から氷上郡吉見村（現丹波市市島町）へ父母と離れ、祖父の元へ空襲を避けるため疎開した。祖父は近隣の村とお寺様、田ステ女について語った。菩提寺齋納寺・岩戸寺・神池寺は鮮やかに追憶にある。望郷の念。

▼『田捨女』 森繁夫著

柏原高校にこの書物が蔵されていると丁重なご案内くださったのは岩戸寺の丹生崇圓氏である。

文献として田ステ女が岩戸寺を訪ね「院前に咲くや岩戸の繪旨梅」を奉納した史実が記録されている。書物は丹波市役所図書館にも蔵されているとご案内。柏原高校在学中、私は図書委員として活動したことも懐かしく蔵書の存在に至福の念を抱く。

▼『岩戸寺史料・写真（句碑と梅・本堂）と『奉納發合』ご提供にご協力いただき。寺院案内DVD視聴。『奉納俳諧之發句』（元文元年）を蔵す。

▼『定本西鶴全集』第11巻（上） 中央公論社

寄稿先『山ざる』を申し出て転載許可いただく。右付録岡田利兵衛氏繪俳書研究文

▼『女性俳句の世界』 上野さち子著、岩波新書

山口女子大名誉教授がステ女の偉大さ、清冽な魂を著す。

▼『貞閑禅尼』 藤本槌重著、春秋社



郷土史研究家の泰斗・故松井拳堂翁の情操教育に資したい心実りし像である。

彫刻の名人、故磯尾柏里氏の手によるステ女の像（柏原町崇広小学校内）

『田ステ女』（田ステ女をたたえる云）より転載

ふるさと人物記

三、田ステ女の俳諧作品

(一) 六歳・十歳の俳句

雪の朝二のじ二のじの下駄のあと

雪の朝二のじ二のじの下駄のあと

下駄のあと

ステ女の句

季晴うし

『田ステ女』(田ステ女をたたえる会)より転載

五七五。繰り返しリフレインも鮮やかに情景を浮かび上がらせる。雪を知る人ならなおのこと。ASA・GETA・ATOのA音も明るさを生む。ブーツ長靴の現代でも親しまれ愛されるのは素朴であるからだろう。

酒一升九月九日使い菊

十歳の俳句。九月九日は重陽の節句、菊の節句である。ちなみに三月三日は桃の節句と称される。

句意はステ女が親類の造り酒屋で遊んでいると、

六歳にして詠ん

だこの俳句は、老若男女日本全国の人人に親しまれている。国語教科書にも載る。空でそら唱となえやすい。リズムよく、まさに

家内の人が出はらって、そこへ菊という女性がおつかいで酒一升を買いに来た。ステ女はこの句を長帳簿に書き留める。長帳簿は和紙半分に折り綴じたもので、多分筆に墨をつけさらさらとしたためたである。当時、日本女性の名は主に花・動物・自然などから名付けられた。女性はお菊さんとよばれたにちがいない。

懸け詞かけことばが使われていることに注目したい。菊の一つの言葉が、植物の菊と女性の名の菊と二つの意味を持つている。修辞法シュトリツポウを使いこなす才智。

(二) 逸話二話と俳句

栗の穂や身は数ならぬ女郎花

栗の穂の句碑は、田家菩提寺西楽寺に現存している。『田ステ女』(田ステ女をたたえる会編)から逸話を部分引用して、この句を詠んだステ女を理解したい。

【霊元天皇お戯れの句の逸話】天皇の句に「清十郎聞け夏が来て啼く郭公」というのがあり、返句にステ女が「笠かよう似た短か夜の月」とつけたこと

ふるさと人物記

が叡聞に達し、「かかる名の雲井にまがう歌人をかやはらの里に捨ておくは惜し」と詠んだそうだ。このことを聞いたステ女は恐縮して「かやはらにあるかなきかの露の身を捨つる捨てじと何思ひけん」と言ひ「粟の穂や身は数ならぬ女郎花」と謙遜して詠んだとも伝えられている。叡聞云々は立証する文献はないが、宮中とかかわりがあったと思われる。(以上逸話部分引用)

【十七歳藩主織田信勝侯にまみえ藩主の難題に応える逸話】藩主はじめ居並ぶ家来を驚嘆させた。藩主詠む。「かやはらに惜しや捨ておく露の玉」

(三) 三十歳『俳書良材』宮川正由撰入集

俳諧壇に登場ともいうべき入集である。

花よりもきにあたりぬるあらし哉

みやびやかに咲やいちはやき花の顔

花は世のためしにさくや一さかり

花やちらむみもおどろくかぜの音

喋々は花にはなれぬあいだ哉

なけやなけやいまはいつなんほととぎす

月や空にいよげに見えつすだれごし

刊行年から二十九歳の作と推定される。二十九歳以前と推察する研究家も在る。私は平成十九年から神奈川県相模の国に住まうも、風の強きことに戸惑い風に馴染みがたい。生涯の多くを兵庫県の摂津・丹波の趣きの中で暮らしたことによるのか、ステ女の風の二句に興味をそえられる。京への旅路、暮らしのなかの妻・三男母の女身の句。古典のパロディとは異なる。き(樹と気)・みみの言葉の採用はステ女独自のもの。平易な良さの中に非凡さを秘む。根底に仏教・アニミズムが流れる。

月や空にいよげに見えつすだれごし

いよげは「居よ気」で居心地よくの意。「伊予簾」で懸け詞である。簾はステ女の時代は無季。恋情を託すものとして詠まれるのは『万葉集』の額田王の歌にも知られる。『古今和歌集』に在原業平は「月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身ひとつはもとの身にして」と詠む。「月や」と句や和歌の発語は稀である。「つきやそらに」「つきやあらぬ」は字余が余韻を醸す。幽艶な情趣が漂う。簾に居心地よくかか

ふるさと人物記

る初秋の月を眺める句であり、古典をふまえている。

(四) 三十三歳『俳諧独吟集』寺田重徳編

梅がえは^(枝)おもふき^(葉)さまのかほり哉

寛文六年(一六六五)『俳諧独吟集』が出版され、ステ女は歌仙俳諧三十六句連句形式を載せる。「きさま」は「あなたさま」の意。「おもふきさま」は「恋しい貴方様」と解釈する。「かほり」は「梅の香」をさし、あなたそのものの香りとも読める。

梅が香は^かおもふき^きさまの袂^{たもと}かな 捨女^{すてにょ}

貞享元年(一六八四)井原西鶴は『古今俳諧女哥仙』に古今の閨秀俳人三十六人をえらびステ女の絵姿・文・「袂かな」の句を版に自ら彫る。

「かほり哉」と「袂かな」の句はいずれもステ女の句である。前者は気品、後者は優艶さに魅力ありとは世の定評である。次の頁に西鶴の絵姿等の作品をご覧に入りたい。

岡田利兵衛の繪俳書研究文によれば、「古今の閨秀俳人三十六人をえらび、一句を書画像をかき、右肩に角枠で圍つて、要領得た独特の短文で、各自の

傳記を紹介する。文字も繪もすべて西鶴の筆である。その風姿は西鶴独自のもので、手の指は極端に細く長く、目は引目に近いが細く開いているが多い。細嬾は女性の優麗さを盛り上げて、余すところがない。」(以上付録引用文)とある。

(五) 三十五歳『続山の井』に三十六句載る

寛永七年ステ女三十五歳の年に北村湖春は『続山の井』を選集した。父季吟の命によつて編集した俳書。

ぬれ色や雨のした^すてる姫^めつつじ

岩かどもむ^つくりとなる雪の綿

夕霧や落葉衣をか^つさね棲^す

「ぬれ色の句」について井原西鶴が『高名集』にすがた繪入りで描いている。(次次頁掲載)

(六) 『続連珠』北村季吟撰 延宝四年刊

むら雨の夕べはあやし戀^こし鳥 ステ

田季晴氏所蔵

ステ女色紙流麗典雅で晩年の筆致も珠玉である。

ふるさと人物記

奥山の櫻も梅もその匂ひに人もしるぞかし丹波の栢原の里に栗より外をしらぬ野夫迄今俳諧の道つけしは此女也（*）哥（*）学の窓より都を見おろし萬の事にくからず

○栢原—カイバラ。栢原とも書く。今、兵庫縣氷上郡栢原町。

○栗より外をしらぬ—井の中の蛙、見聞狭き田舎者。丹波→栗。

○哥（*）学の窓より—在郷住居ながら、歌學の心得ある故都人も恥しきほど風雅にして博識。

○梅か香は—この句「獨吟集」（寛文六年刊）所收獨吟歌仙の發句。「梅かえはおもふきさまのかほりかな。」句意は梅花の薫りかと思へば、方様の袂より匂ふ練香の「梅が香」にてありしといふ意。

○おもふきさまの—戀しき方様の。「きさま」は貴様。

○捨女—栢原の田（デン）季成の妻。北村季吟門。夫の死後尼となり法名妙融、京都に庵を結ぶ。後盤珪和尚に參禪、貞閑と改め、播州網干不徹庵に入る。元祿十一年八月十日寂、六十五歳。

梅（*）か香（*）はおもふきさまの袂（*）かな捨女（*）

奥山の櫻も梅ととも
匂ひぬ人と云ふぞう
丹波の栢原の里に栗
より外をしらぬ野夫
と今俳諧の道つけし
は女也（*）哥（*）学の窓より
都を見おろし萬の
事にくからず

梅か香は

わ

しる

秋あけ
捨女



（五ウ）

ふるさと人物記

中央公論社『定本西鶴全集』第十一巻（上）四七〇頁より転載



○ぬれ色やあめの下でる姫つゝし
花の風情をいふ。
○あめの下でる「指」は「下」
「下」は「下」に「下」をいひく。
「下」は「下」の女、天根彦
「下」は「下」の女。
○姫つゝし「小」は「小」。
○ステ（由）「指」は「下」。
の一人、後出（四七〇頁参照）

四、江戸時代俳諧が栄えた丹波

寺院はまさしく文化の殿堂、現代風に称するとカルチャーセンター的存在でもあった。如実に物語っている神池寺を文献により探訪したい。

『俳諧法農華』は、寛文十二年（一六七二）丹波

神池寺の住職松苔軒堂により編集刊行される。ステ女四十歳。如水二十句、季成十八句、ステ女十一句、その他田家一門の人や柏原十五人の句が収録されている。さらに、丹波の国の作者数は、「佐治五人、黒井八人、鴨之庄八人、神池寺十八人」と記述がある。如水とは、田家菩提寺西楽寺住職深蒼上人の俳号であり、季成ステ女夫妻とは親交が深かったことが窺われる。

丹波岩戸寺の『奉納發合』（慶応）に注目したい。文化史文学史俳諧史上貴重な稀なる史資料である。俳諧の作品發句を板に書き上げ、岩戸寺に奉納されたもので、平成二十五年本稿を綴っている現在も厳然と本堂に蔵されている。句会に出席した人達は多数の丹波の人間である。よく精出しよく学び合った。

ステ女も岩戸寺を訪ね句奉納す。

粟の穂や身は数ならぬ女郎花 ステ



西楽寺（高谷千日寺に寛政十年建立。昭和三十五年移される）



柏原町高谷
（平成二年捨女顕彰句会と
草紅葉俳句会により建立）

写真『田ステ女』をたたえる会編集発行より転載

五、ステ女ゆかりの地案内

（一）ステ女句碑

句碑建立の謂われ

句碑は苔むす風情や近年の趣きなどが建立の歴史を物語る。建立に尽力した人々の魂が宿っている。謂も存在する。「粟の穂や」の逸話は先に綴った。「おもふことなき」は、近代明治大正昭和平成の時代の今日もステ女をたたえ顕彰する丹波の風土を印象づける。「院前に」の句碑は、近年岩戸寺と世話方により建立された。

岩戸寺丹生崇圓氏の手紙を拝読し、私の手元のみに納めず一部引用ご紹介したい。

「院前に咲けや岩戸の綸旨梅」と田捨女さんが岩戸村でうたい、その句を書いた色紙が岩戸寺にあるという記録を本で見たのが、柏原高校在任中のことでした。探しましたが見つからず、当時の世話方と相談して句碑を作ることになりました。字は下手な

ふるさと人物記



梅

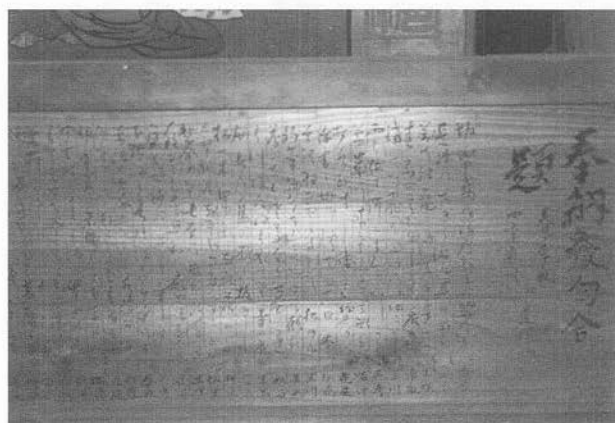
句碑（近年岩戸寺と世話方により建立）

田ステ女岩戸寺を訪れ「院前に」の句を奉納す
院前に咲けや岩戸の梅 旨梅 ステ



本堂と石段
庫裡の高さから本堂を見上げるといふ句碑のあるところ

(二) 句碑を訪ねて 岩戸寺の巻



『奉納 發句合』（慶応）

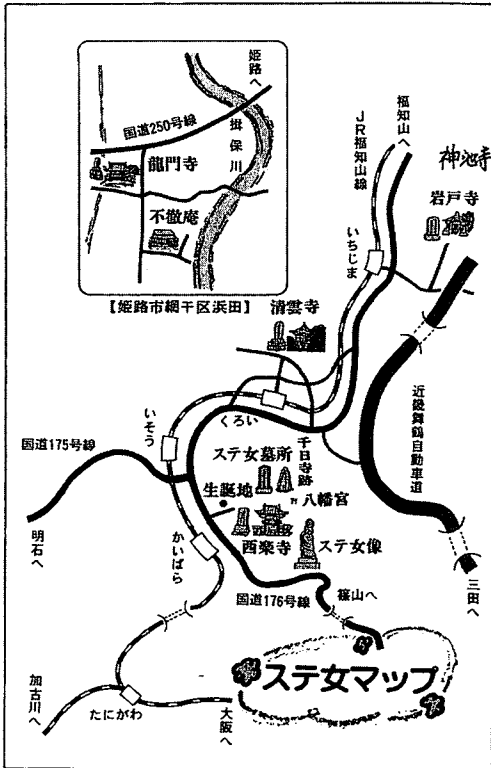
（他に『奉納俳諧乃發句』元文元年（一七三六蔵す）
写真提供 岩戸寺
撮影者 岩戸寺 丹生崇圓氏
撮影年月 平成二十五年春彼岸）

ふるさと人物記

私を書きました。繪旨梅の方は子供の頃宝蔵蔵の前あたりに梅の木があったのを憶えています……。
(以下省く)

あとがき

「田ステ女の俳諧」について紹介案内の心づもりで綴ってきた。参考文献・資料と真摯に対峙し、至福の時間をたまりなり述べてきた。



『田すて女』田ステ女をたたえる会編集刊行より転載
(筆者神池寺を本稿構成上付記)

山口女子大名誉教授上野さち子氏は、『田ステ女』(田ステ女をたたえる会編集発行)の序文に次のようにステ女をたたえる。

「田ステ女の偉大さは、俳諧史上、女性として最初のすぐれた作品を残した点が賞賛されることは勿論だが、それ以上に、人間としてたぐい稀な凜質をもつ彼女が、きびしい人生を真摯に生き抜いた清冽な魂にある」と。

俳諧閨秀作家、代官の妻、五男一女の母として幸せに暮らしていたステ女に、夫の死という人生の悲嘆がおし寄せて来た。夫の供養の後七回忌の翌年出家、名を妙融と改め京に上洛。四年間苦渋の求道さすらいは、出家したステ女の真実の師を求める生活であった。やがて盤珪禪師に入門が許され貞閑と名を改められる。俳仙ステ女は、後半生を貞閑尼として徳を積み悟道し敬愛され生涯を送ったのである。現代の世も敬慕される偉人なり。

■会員が書いた本

小松京華著

『筆立』

白地社

作者が師と仰ぐ俳人金子兜太氏の題字揮毫。金子夫人皆子氏に賜った愛着の筆立を句集名にする『筆立』は、「丹波の山頭火ここに現わる」のごとき読後感であった。

○のど痛む月光の錆びるように

○睡蓮へ載せるわたしの貧瞋痴

○いまははやひむがしの霧に遊ぶ

身体皮膚感覚を月光が錆びると詠む自在。未の刻に開花する睡蓮に載せるのは鋼のような怒りの気持ち。東国への転居さえも感嘆を伴って無なる霧に遊ばせる。花鳥風月に捕らわれることなく、字余り字足らず句またがりも何の其のとの自由であり、魂の浮遊である。

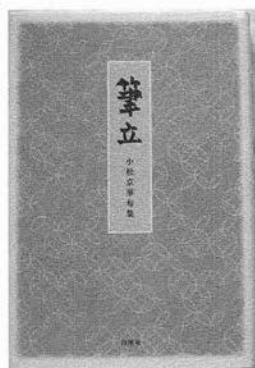
○正月や清荒神清澄寺

○帰り参道棕櫚簀買うて

俳諧連句の発句と脇句のような配列もあり、別の面白さに誘われる。

小松（旧姓能勢）京子氏は、戦争中に神戸から丹波吉見村の祖父母の元に疎開し、祖父齊氏に俳句の手ほどきを受け、田ステ女に驚嘆する。

柏原高等学校に入学、ステ女生誕の地へ通学し、ますます敬慕・憧憬の念を抱く（本誌139頁参照）。若き神戸時代に金子兜太氏と出会い俳句を作り始める。以来、教育に専念し妻に母に演劇やボランティア活動に勤しむ日々を日記代わりに俳句で綴っている。七十七歳の今も「私の日記俳句」とひそかに名付けながら



詠み続けておられる、エネルギーシユな女人である。

○劇的世界追究すれば晩春

○青春や長塚節の『土』演じし

○読み聞かせだつこおにぎりおふろかな

○履物を揃えし子等や歌留多並べ

大学時代に出会った演劇と俳句は実に巧みに融合し、兵庫県生涯学習リーダーとして、丹波春日公民館にて読み聞かせ講座の句など、その活力は女人句集の底力である。

丹波なる土着の匂いと懐かしさの香る作品群もある。

○母に飢ゆ煙の黒き汽車鈍行

○春分や日天様と山歩き

○注連縄や位置を正しゅう年納

○花祭りにゆきたし丹波斎納寺

縦横無尽の句集であるが、標題となった句と、『山ざる』誌への讃の句を記して紹介とする。

○愛着の筆立磨くや秋深み

○『山ざる』の猿の腰掛丹波かな

（原谷洋美）

井出恭子著

『凌霄花』

HOOD工房

「あとがき」に著者は記す。

へ父亡き後の七年間、氣丈に独り暮らす母への日々の思いを、短歌というより短歌らしき三十一文字に込めて綴ってきた。

東京生まれ東京育ちの母が決して歸りたがることもなく丹波に馴染み暮らした人生を理解するには、母と暮らした一年七ヶ月という時間は短かすぎた。もっともつと母に寄り添

凌霄花

い語り合いたかったという悔いばかりが残っている。三回忌も過ぎ、母が一番望んだ、私が家族の元へ戻り暮らす前に、もう一度母を見つめ、想い、私自身の人生の区切りとしてこの拙い歌をまとめる事を思い立った。十代で離れた故郷へ半世紀ぶりに戻り暮らした丹波で、多くの友人や出会えた人々の温かさ優しさに支えられてきた事を心から感謝、また私の稚拙な歌を、ひとつひとつ拾い上げ手作りの素晴らしい歌集にまとめて下さった友人の加藤昌男、俊子夫妻には深く感謝している。

母の生きた人生には、まだ残された時のある私……いつか母と語り合える日まで精一杯生きたいと思う。そして、母の好きだった橙黄色の凌霄の花が雨に濡れて美しい故郷丹波の季節には必ず訪れてみたいと……多くを書かずとも、本誌83頁からの、歌集『凌霄花』とこの「あとがき」で、母への慟哭の挽歌集だと判

るであろう。限定二十五部の丁寧な手作り歌集を掌に受けたとき、鎮魂の納経と思った。貴重な蛇腹折の復刻本を折り畳み、また開いてゆくゆかしい心持ちがしたものである。母親追慕の調べは、遠く深く、優しく柔らかにここに沁みてゆく。

凌霄花に寄せる哀切の母恋う歌の中に、亡父は金木犀の香りをまとって存在感があり、二層哀しみを誘う。

○金木犀はほのかに香りて在りし日の父の背中の懐かしき部屋

○父逝きて八年目の秋巡り来る金木犀の香りを連れて

○きゆるきゆると蛙鳴く夜は眠れず
に夫や子想い祈りおりたり

川崎の家族と離れ暮らした作者の深層の心根が垣間見える歌もあり、丹波での母晩年の一年七ヶ月の密度濃い生活が揺らぎ立ちのぼる。

六十五首の構成ながら、読み応えのある、静謐な歌集である。

(原谷洋美)

■郷土について書かれた本——

松田成文著

『二宮尊徳の破天荒力』

ぎょうせい／定価本体1524円

著者の松沢さんを改めて紹介する必要はないだろう。松下政経塾を終わるや米国連邦議員のスタッフとなり、帰国して最年少の神奈川県議、衆議院議員、神奈川県知事を経て現在は参議院議員を務める。知事を二期務める間に尊徳の実像も名前も知らない若者が多いのを知り、何とかしたいという思いから多忙な職務の中で筆を執った。

『破天荒力』というテーマも興味深い、本欄で紹介したいのは、昭和時代の尊徳研究家・実践家の第一人者として挙げられている旧葛野村出身の佐々井信太郎（一八七四—一九七二）である。父の事業挫折で小学校も中退し高山寺の小僧となっ

た佐々井は、一念発起して小学校教員、さらに資格を得て神奈川県立第二中学校（現、小田原高校）の地理・歴史教師となった。吉田松陰の甥である吉田庫三校長に「松陰を研究したい」と述べた佐々井は「ここは神奈川県だ。尊徳を研究してはどうか」と指導され、教務の傍ら尊徳研究に打ち込むことになる。

その後、県社会課長となり関東大震災後の県の復興を報徳仕法で担い、さらには大日本報徳社副社長に就任するが、吉田の名を不朽にしたのは、『二宮尊徳全集』（全36巻）であり、彼は編纂の中心的役割を果た

している。

戦後の一九四六年、GHQ（連合国軍総司令部）教育課長のインボーデン少佐が同社を訪問した際も尊徳思想について説明を行ったが、少佐は三年後に雑誌「青年」に寄稿して尊徳を絶賛し、若者に彼の再認識を求めている。

佐々井は尊徳に惹かれて神奈川県に定着するが、一高・東大を経て内務官僚となった長男の典比古（一九一七—二〇〇九）も尊徳研究の道に入った結果、神奈川県に長く奉職し、副知事を退職後は父と同様に尊徳研究者・実践家として活動する。最大の功績は昭和五八年、小田原市に開設された報徳博物館設立への貢献であったと著者は説く。設立直後に評者は二度参観したが、これに籠められた丹波人の熱情を知らなかったのは実に不覚であった。

（徳田八郎衛）



■郷土について書かれた本

週刊新潮 2013年2月7日号

『B級重大二ユース』

読者が入手できる商業出版の、原則として単行本を紹介しているが、全国版の週刊紙となれば数千部しか刷らない単行本とは比較にならない広報能力がある。しかも恥ずかしいことではなく朗報なので特記したい。それは「法律と智恵」と題して「現代の『駆込み寺』が兵庫県丹波市に出現した。法律では解決しない人生の悩みを見てきた33歳の弁護士が、仏教の知恵で悩みに応じ、48歳の僧侶と手を組んで、家族との仲が良くない、仲間外れにされる、といった様々な相談に応じる。「仏教では白か黒か決めつけず、楽に生きる知恵が多くある」とかという短い記事だが、「丹波市なんか過疎だから学校も法律事務所も蒸発中だろうに、こんな立派な人もいるのだね」



という祝辞を
何人かの法曹
界の知己から
頂いた。

情報源は1

月の神戸新聞で、実名人入りで報道された。

日本経済新聞 2012年12月28日号

『文化欄』

「唱歌・童謡里巡りを謳歌」と題して「技術系企業人」だった二宮清さんが、仕事の合間、あるいは仕事のついでに全国の唱歌・童謡ゆかりの地を巡ってきた楽しさを寄稿しておられる。もちろん記念館があれば、それを訪ねる。なくても教育委員会等を訪ねれば歌碑の所在地や遺族、関係者の連絡先を教えてくれる。目的の地は必ず鉄道で向い、どんなに遠くても歩く。土地の空気を五感で捉え、作曲家や作詞家の想いを連想す

るために。大分県竹田市、兵庫県たつの市等へ続き、著者は柏原を訪れる。「旅愁」の作詞家、犬童球溪を追って訪ねた出身地熊本県人吉市で「その歌を作ったのは柏原だ」と聞かされ、赴任校だった旧制柏原中を訪ねると「確かに第一節はここで書いたが第二節を書いたのは次の赴任校、新潟高女です」と教えられる。未だ新潟へは赴いていないそうだが、現地で知り得た数々のエピソードをまとめ、「唱歌・童謡で学ぶ 伝え続けたい日本のこころ」と題して5月書房から上梓した。続編も期待したい。(徳田八郎衛)



◆足立明子さん

ご案内頂き有り難うございます。今年も皆様にお会い出来ますこと嬉しく楽しみにしております。

◆足立かをるさん

本日10月16日、山ざる43号お送り頂きましてありがとうございます。楽しみに読ませていただきました。(ふるさとの会)は失礼致します。前にも申し上げたと思いますが、足を骨折しましたので……、折角ですがお許し下さい。皆様によりしくお伝え下さいませ。御盛会を祈ります。お元気にお過ごし下さいませ。

◆赤井紀男さん

いつもお世話になり有難うございます。「ふるさと会」の案内を頂きましたが、当日、公用が入っておりまして、残念ながら参加できません。ご盛会を祈念しています。

◆天野清子さん

いつも大変お世話になって居ます。残念ではございますが、欠席させて頂きます。皆様のご健勝と会の発展を祈って居ます。

◆足立和己さん

先日フランス在住の娘の所に行ってきました。この娘だけ結婚していて47歳になる長男と一番下の娘が未婚で我が家にいます。誰かよろしく願います。

◆足立 稔さん

ご案内をいただき有難うございます。当日は定年退職をしました企業の同期会と重なり、既に出席の返事を出しておりますので大変勝手ながら、欠席させて頂きます。

◆足立正美さん

遅くなりすみません。後期高齢者となり体調がすぐれません。残念ですが

欠席、幹事の皆様の御苦勞に感謝、益々の発展を。

◆足立洋子さん

お世話様です。「山ざる」43号楽しく拝読しております。今号同期生の方々の名を多く見る事が出来ました(昭和36年卒です)

◆井出恭子さん

丹波生活も五年半を過ぎて、今年でやっと川崎の方に戻ります。弟(藤田徹)がこの春から丹波に帰り古い家と墓守をしていくてくれる事になりました。故郷での有意義な年月でした。

◆井手梅野さん

ご案内いただきありがとうございます。今年は出席出来ません。ご盛会をお祈りしています。なお住所変更いたしました。441→440になりました。今后よろしく願います。

◆池田和子さん

山ざる43号と郷友会の案内をいただきありがとうございます。今年はぜひ参加させていただこうと思つて居りましたが、上司の偲ぶ会を催す事になり、出席できません。次回を楽しみたいと存じます。

◆池上忠志さん

次男死亡のため、心労が続き、出席する気になれません。悪しからずご了承下さい。

◆井徳正吾さん

当日は大学の教員採用の面接官をしなくてはなりません。盛況であることをお祈りしております。

◆井本宏行さん

5月に愛犬が天国に行つてすぐ落ち込みました。そのせいか8月になつて体調不良になり病院通いが続き、まだ完治していません。

◆井上五郎さん

体調おもしろくなく、入退院を繰り返しており、残念ながら欠席させていただきます。

◆植木十和子さん

「ふるさと会」のご案内ありがとうございます。出かける機会がすくなくなりましたので懐かしい皆様にお会い出来ますのを楽しみにしております。ご返事遅くなりまして申し訳ありません。

◆浮田信子さん

いつもお誘い下さりありがとうございます。いつも一度も参加せず過して参りました。失礼お許し下さい。皆様のお陰にて今年喜寿を迎える事が出来ました。今後は心豊かな日々を過せる様、努力して歩んでまいります。ご盛会を心よりお祈り申し上げます。皆様によりしくお伝え下さい。

◆植木一夫さん

誠に些少ですが振替にて払込み致しました。御査収下さい。急性心筋梗塞のためリハビリ中なので欠席致します。私事です。平成23年11月に東京都知事より、又平成23年11月に総理大臣より表彰状及び記念品の授与を受けました。

◆上村愛子さん

昨年卒寿のお祝いをして頂きましてありがとうございます。特に一年下の方々にお声をかけていただき、今年はお祝いに行きたいと思つていましたが、当日、市川市合唱祭に出演しなければならず残念です。

◆岡山 充様ご家族

長い間お世話になり、ありがとうございます。ございました。父岡山 充(2012年)7月30日に亡くなりました。父は丹波を離れて50年以上たつても「丹波の人」

であつたように思います。他の産地の物は食べる気がなくなつてしまふ大粒で味の濃い栗、いかつい形の山芋、未だ幻の松茸、食にまつわる思い出がたくさんです！ 一度だけ訪れた「立杭」の地もいつかまたと思えるすばらしいところでした。

◆荻野哲男さん

いつも御案内を頂きありがとうございます。10月に手術をし、今回は地元での文化祭とも重なり参加出来ません。御盛会をお祈り致します。

病室の窓を開ければ 壮大な鰯雲見
て 秋の日終わる

◆岡林逸男さん

ようやくお役ご免となりました。「ふるさと会」ますますのご発展をお祈りします。大変お世話になりました。

◆大野善三さん

戦争中に育つた人間として一國平和

主義として70年近く続いた社会方針が総て正しかつたのか、疑問を抱くような今日この頃です。不安定な世界状況がニュースで伝えられるにつけ、様々な思いが浮かび上がつて、現代を分析する本を読む機会が増えていきます。

◆大録和代さん

毎年お便りありがとうございます。知人にもお会いしたくて今年初めて出席させていただきます。諸先輩方の話も聞けたらと楽しみにしております。

◆荻野公三さん

御案内ありがとうございます。会の発展と皆様のご多幸を祈ります。私事です、そろそろ年を取ってきたと思う様になつてきました！ いわき市役所から「後期高齢者集いの会」という案内がきていました。妻と2人で笑いました！ この次の案内は「末期高齢者の集い」かね？ 皆様によろしく!! 失礼しました。

◆小田富士夫さん

今年も欠席、大変残念ですがお許し下さい。一日も早く体調を整えて皆様にお会いしたいと念じています。皆様のご健勝を祈ります。

◆逢坂サダ子さん

膝の痛みで整形外科に通つています。ご盛会をお祈りしております。

◆大垣忠男さん

旧制柏原中の在京同級生も毎年すこしづつ減り淋しくなりました。

◆岡本昌子さん

何時も郷土のふるさとの方に招待頂き有難うございます。当日は、急用が出来、出席出来ませんが、ご盛会をお祈り致しております。

◆大畑時子さん

いつも会誌お送り下さりありがとうございます。『ふるさと会』当日は

先約があり欠席致します。御盛会をお祈りしております。

◆大江範子さん

「山ざる」ご送付下さり有りがとうございます。前号の「丹波布」のこと、なつかしく拝見しました。母の実家は青垣、佐治の農協のとなりであり、子供の頃、佐治へ行くと祖母がまゆを糸にして、やがて縦糸を組んで織機で織っていたのを思い出しました。母の実家は「足立」です。

◆門山壽子さん

ご案内いつも有り難うございます。当日は仕事があり欠席させて頂きます。「山ざる」を拝読し、実り豊かな丹波に思いを馳せています。皆様の御健康をお祈り申し上げます。

◆可部美智子さん

折角のお祝いに出席出来ずすみません。全陶会の常任理事をしています

ので、全陶展の初日と重なってしまいました。残念ですが欠席させて頂きます。

◆金子 徹さん

ふるさとは遠きにありて思うもの。年寄るに従いますますこの感あり。直接的関わりはご遠慮申し上げます。そんな心境です。

◆形田恒夫さん

今回はじめて出席させて頂きだきます。64歳までサラリーマンを続けてきましたが、そろそろ幕をおろす時が近づいたかな、と思つています。元気なうちに……。

◆河本幸子さん

明日は早くも立冬、今年も少なくなつて参りました。何時も案内を頂き有難うございます。今年こそと思つておりましたが、急用が出来欠席します。どうか会員の皆様に宜しくお伝え下さ

い。盛会を祈っています。

◆岸本里子さん

いつもいろいろお世話になつております。参加させていただきたいのですが、旅行等予定があつて残念ながら欠席いたします。御盛会をお祈りいたします。

◆喜田綾子さん

此の度はふるさとの会へのご招待有難うございます。80とは身体が老人になるという事で、なかなか自分の思う様には動きません。残念ですが、出席出来ません。皆様方もお体お大切に暮らし下さい。

◆勢川雅弘さん

80歳を越えて体力が衰えニコンも70が重くなりましたので、昨年娘婿に進呈し、現在はニコンのコンパクトカメラ、クールピックスS8200を使用しています。

◆久呉道子さん

驚きました。ご高名の集いに！丹波新聞社の小田会長様？恐縮至極に存じます。二年前逝去の足立勲平は従兄でございます。在丹時、上高子女史の講演会、柏陵同窓会で行いましたのに孫の結婚式にて惜しまれます。長男高博に、スーブの冷めぬ距離で、ケア付きホテルを探してくれる様頼み、ここに移りました。上高子女史には高博もお世話になり有難うございました。この会誌は忝く拝読させて頂きます。後日振り込みさせて頂きます。老いの身に喝を頂きました。24年度NHK俳句コンクール作品でございます。

虎が雨晴れて 端正富士の嶺

◆児玉安正さん

「山ざる」第43号及び「ふるさと会」のご案内をいただきましたが、小学生2、3年前に健康等の事情で退会しておりますので、よろしくお取り扱いの程お願いします。貴会のますますの発

展と「ふるさと会」の成功を祈ります。

◆古倉徹夫さん

いつもお世話になりまして、ありがとうございます。せっかくご案内いただきましたのに、どうしても都合がつかず、欠席させて頂いたできます。ご盛會をお祈りしております。

◆小谷 崇さん

最近の尖閣をめぐる中国煽動や、安部、石原、橋下ら右翼の台頭に、戦時中の少年時代（崇広小、旧制柏中時代）を思い出します。若い人々に「平和憲法を、変えないで、世界と将来にひろげてほしい」と訴えたい、と思います。

◆小笠勝啓さん

ふるさとの会に出席出来ず申し訳ありません。山ざるをなつかしく読んでおり益々のご活躍を念じております。既に退職しておりますが、専門の科学の仕事は続けております。

◆小松京子さん

前略、立派な会のご運営感謝いたします。前会長様が「二玄社」の会長様と存じ上げ驚きましたのが数年前、横浜に転居いたしました折りでございます。書道に親しむ暮らしをいたしておりまして、以前より「二玄社」様の御本は愛蔵活用させて頂いております。皆様によりしくお伝え下さい。早々

◆後藤まち子さん

申し訳ございませんが欠席させていただきます。皆様の御健康とご多幸をお祈り申し上げます。幸い元気に過ぎて頂いております。

◆笹倉鉄平さん

当日は以前より動かせぬ仕事が入っていたため、誠に残念ながら欠席させて頂きます。今回も楽しくご盛會になる事を想像して、皆様のご健康を祈っております。

◆坂上五朗さん

刻の経つのは早いものです。もう郷友会の季節になりましたね。年を取るにつれ、ふる里のことが思いめぐる今日この頃です。今年も郷友会がご盛況でありますこと祈念いたしております。会員皆様様のより一層のご健勝をお祈り申し上げます。

◆笹倉 強さん

いろいろと事務局ご苦労さまです。お世話いただき感謝いたします。くれぐれもご自愛下さい。

◆齋藤陽子さん

いつもお知らせをありがとうございます。申し訳ありません、用があり出席できません。「ふるさと会」のますますの発展をお祈り致します。

◆澤田みさをさん

山ざるをお送り下さいましてありがとうございます。又「ふるさと会」にてお祝いをして下さるとの事、心より感謝申し上げます。残念ながら夫が入院中で、出席不可能だと思います。かげ乍ら他の皆様のご長寿を御祝福し、今年も会が盛会であることをお祈りします。

◆財家順子さん

ご案内頂きありがとうございます。

関東にもたくさんの丹波出身の方がいらつしやることを初めて知ることが出来、とても嬉しく思っています。皆様の益々のご発展をお祈りしております。

◆正呂地悟さん

いつもご案内ありがとうございます。申し訳ありませんが欠席します。「ふるさと会」の益々のご発展とご盛會を祈っています。

◆鈴木和榮さん

立派に編集されました「やまざる」

毎年嬉しく拝読させて頂いております。皆さんの丹波への思いは年と共に深くなります。丹波出身の方と時々電話で近況を話し合うのが楽しみです。もちろん丹波弁で丹波の話です。話は尽きません

◆杉岡明美さん

目黒区政80周年記念行事にかかわり忙しい日々を過ごしております。欠席いたしますが、御盛會をお祈りしております。

◆谷 敬三さん

いつもお世話になります。楽しみにしているのですが、当日は義母の看護の都合あり（同居）どうしても調整ができません。申し訳ありません。皆様によりしくお伝え下さい。ご連絡が遅れてしまひすみません。日々は油絵を描いたり、合唱に参加したりして過ごしております。

◆高松常太郎さん

義兄の法事の為欠席します。いつも裏方さんの努力に深く感謝申し上げます。有難うございます。

◆谷口 捷さん

機会を見つけての寺院めぐりは、秩父、坂東及び西国の札所、そして吉野、高野山でしばらく休み、最近では城址、特に山城の跡を訪ねています。各地を歩いていると得る事あり、世の中には考えるべき事多いと感じています。欠席ですが郷友会の発展を念じています。

◆高橋世志子さん

何時も勝手ばかりして申しわけ有りません。この年になっても仕事ずきでがんばっています。皆様によろしくおつたえ下さいませ。

◆千葉淳子さん

前略、いつも大変お世話になって居

ます。益々関東氷上郷友会のご隆盛お

喜び申し上げます。慣例の「ふるさと会」にお招き頂き「卒寿の祝」を賜わる由誠に有り難うございます。是非出席させて頂きたく友人との話し合いで、この様な機会でなければなかなかこのようなチャンスはないとの話でございました。が、私事誠に残念ではございますが来る26日より入院の予定でございます。早く退院出来ればと思つて居りますが、どうか皆様方に呉々もよろしくお伝え下さいませ。皆様のご健勝ご多幸をお祈り申し上げます。

◆富田貞子さん

いつもお世話様でございます。この度の講演で音に関するお話が聴けると楽しみに致しております。よろしくお願い致します。ご連絡遅れまして申し訳ございません。

◆西川宣孝さん

山ざる楽しく拝読しました。11月は

丹波で中学校の同級会、上野で在京の高校同級会、12月には氷上でゴルフ同好会に参加し、忙しく過しています。ご盛会を祈ります。

◆野村節三さん

所用に追われ出席出来ませんが、「東日本大震災」に際しご心配をおかけしました事を感謝しております。復興に向けて頑張っていますが、なかなか思うように進みません。会員の皆様のご健勝と郷友会のご発展をお祈り致します。

◆橋本真二さん

欠席で申し訳なく、ご盛会を祈ります。ライオンズクラブや森林づくりボランティアなど元気に過しております。

◆廣瀬安伸さん

当日は、午前・午後・夕方からと日程が詰まっております、出席出来ず、本当

に申し訳ございません。ご出席の皆様のご健康とご盛会を、家内共々に心よりお祈り致しております。

◆福田治子さん

娘の結婚式の前日なので欠席させて頂きます。御盛会を御祈りしております。「山ざる」43号、89ページの「山ざる文芸」で「停年」という言葉が二回出てきますが、私はちゃんと「定年」と書きしたので校正ミスだと思えます。「停年」なんて失礼ですよ。定年退職された方。

◆藤田玲子さん

郷土について書かれた本に「八分目な診療室から」を楽しく紹介して頂きありがとうございます。

◆藤井宏次さん

関東氷上郷友会「ふるさと会」への御案内拝受致しました。誠に残念ですが、当日は生憎先約があり、出席出来

ません。ご盛会を祈っております。

◆藤田正雄さん

柏中の同学年も年々少なくなり、賀状のやり取りも谷垣尚君一人だけになりました。

◆細見充彦さん

本会の盛会をお祈り申し上げます。月刊誌「自遊人」11月号で丹波特集を観て、丹波も知名度が更になること期待します。

◆細木敦子さん

初めまして、いつも懐かしく拝読させて頂いております。今回初めて市内の御近所の方と参加致します。どうぞよろしくお願い申し上げます。

◆本城英明さん

いつもお世話になりました。ありがとうございます。今年は介護支援専門員再講習の年となっております。「ふるさと

会」には出席できません。いつもは多くの方に参加を呼びかけているのに大変申し訳ありません。

◆前田武彦さん

関西で法事があり欠席します。盛会を祈っております。

◆前川享英さん

故植田憲雄先生が幸世村青年団陸上競技大会100Mで優勝された姿を今でも鮮明に覚えています。紅い顔に白いハチマキ、鳩胸。国体に出ました里 勝安君とは同期です。

◆村上高廣さん

世話人、編集委員の皆様本当に御苦勞様です。この度もまた欠席させて頂きますが、何卒御容赦下さい。

◆森田栄子さん

お世話様です。是非出席して皆様にお会いしたいのですが、丁度その頃は

田舎に行かなくてはならず、出席する事ができません。どうぞ皆様によりしくお伝え下さい。

◆山口敏之さん

2012年春よりオランダマーストリヒトに転勤になりました。田舎へは春、秋の2回帰国の際しか帰れなくなりました。

◆山岸幸子さん

いつも「山ざる」を楽しみにしています。今号では『植田先生を偲ぶ座談会』で初めて先生のお人柄や母校の為に献身的に尽くされた事を知りまします。ご冥福をお祈り致します。

◆山本述(紀) 子さん

「山ざる」お送り頂きその日のうちに一気に読んでしまいました。記事も多面的でありカラー頁なども加わり懐かし興味深く拝読させて頂きました。「郷友会誌山ざるの届く日は何も

せず 唯懐かしく嬉しみて読む」

◆吉田素子さん

今回も帰柏と重なり、出席出来ません。次回は11月を東京にします。この夏祭り(年輪の里)では下町連が最優秀賞を取り、皆500円もらい、地藏盆祭りではカラオケでタコ焼器をもらい、成松の花火大会には皆で参加と大活躍でした。やまざる良かったよ!

◆吉竹 寛さん

申し訳ありません。当日はウォーキングで役員として参加しておりますので悪しからず。また過日「山ざる」の原稿の依頼がありました。小生文筆がだめなので申し訳ありませんでした、心から陳謝します。

◆吉見弘文さん

父(文憲)が生前大変お世話になりました。厚かましくお邪魔させて頂きますが、よろしくお願いいたします。

◆渡邊貴美子さん

健康には歩くのがベストと勧められ毎日元気に歩いております。

◆若森敏郎さん

家内が入院中のため最近病院に日参していますので、残念ながら欠席致します。

◆訃報

平成24年10月から25年8月までに事務局にご連絡いただいたものです。掲載して謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

白井	三訓様	平成24年10月9日
岡山	充様	平成24年7月30日
梶原	清様	平成24年2月9日
近藤	田治様	平成23年12月20日
仲矢	美恵様	平成24年3月
田中	昌子様	平成24年8月30日
野村	正隆様	平成22年2月10日

平成25年度柏陵同窓会 東京支部総会・懇親会開く

今年の総会・懇親会は平成25年7月13日(土) 10時半から、会場は昨年同様「八重洲富士屋ホテル」にて開催されました。

今年の担当幹事は昭和42年卒・19回の皆様。今年は例年より30分早い開始でしたが、入念な計画のもと、当日早朝から集まり総会・懇親会の運営を乗り切っていました。

例年になく早い梅雨明けで懸念された猛暑による欠席も無く、村山校長、同窓会本部谷水会長・赤尾副会長、阪



谷口支部長挨拶

神山下・京滋高見・東海畑各支部長、辻丹波市長、榎本兵庫県東京事務所長、鹿島東京兵庫県人会常任幹事、荻野丹波新聞社社長の合計10名のご来賓、他支部からの参加者を含め約120名の懐かしい顔が集まり大盛会でした。ま



前川進吉氏のセミナーに熱心に聴き入る出席者

た今年も西山酒造場様から日本酒・発泡酒の差し入れを頂きました

総会では会務報告、会計報告が承認されたほか、支部長より昨年皆様にお呼びかけた「くすのき基金」への寄附が142名の方から総額193,500円に上り、この寄附を元に東京支部として20万円を本部に寄附したことの報告と共に、多くの皆様のご協力への感謝とお礼の言葉が述べられた。

恒例の柏陵セミナーは幹事学年19回生、丹波在住 前川進吉さんによる「丹波の野生児、丹波鹿と格闘す」と題する講演。特にメス鹿を保護対象にしたことから高い繁殖力を生かしどんどん増加、兵庫県全体で10万頭と言われる。毎年35,000頭(内丹波市1600~1700頭)を捕獲するも減少傾向に無い。一方で鹿肉は低カロリー(牛肉の3分の1)、低脂肪(牛肉の86分の1)、高タンパク、鉄分豊富と優れた食材であり、熟成と料理の

◆インフォメーション



山下阪神支部長の乾杯音頭で懇親会開始

仕方を工夫すれば美味しく食べられる。人だけでなくドッグフードとしても有用であり、鹿・イノシシの有効活用により人間との共生を図るべきとお話でした。

山下阪神支部長の乾杯の音頭で始まった懇親会は途中に荻野丹波新聞社社長のスピーチを挟んで、時を忘れた

4時間の最後は校歌・応援歌・高見京滋支部長の音頭による万歳三唱。思いの1ページとなるテーブル毎記念写真を手し、来年の再会を約しての解散となりました。

来年度の総会・懇親会は7月12日（土）の開催です。より多くの同窓の皆様のご参加をお待ちしています。会場が八重洲富士屋ホテルから学士会館



恒例の柏高校歌の大合唱

に変更になりますのでご留意ください。

近年関東に來られたご友人・お知り合いがおられましたら事務局までお知らせください。

柏陵同窓会東京支部のホームページに総会風景等アップされておりますので、是非ご覧ください。

（支部長・谷口浩章 15 回生 氷上町出身・記）

同好会

●氷上ゴルフ同好会／回を重ね次回は131回目を迎えます！

年4回開催で実に30年を超える歴史を誇る我が「氷上ゴルフ同好会」。

熱心な会員の皆様に支えられどんどん開催記録を伸ばしています。現在会員数50名弱、最近健康に不安が出てリタイアされる会員もあり会員数の減少に少々心配もありますが、新しい会員の増強に努めています。（グロス は70

◆インフォメーション

点代より130点代といろいろです。

各例会は会員の紹介もあり、良いゴルフ場で安いプレー代を心がけ、茨城、千葉、埼玉、神奈川等と会場を回りながらの開催で、各回の参加者20数名で推移しています。

丹波他の地域にお住まいの同好者にも声を掛けながら、他地域との交歓も更に進めていきたいと思っています。

ゴルフを楽しまれていらっしゃる皆様へ、都合の良い会場の時だけでも参加されませんか、気楽にお声を掛けて下さい、新会員大歓迎です。

ご連絡を頂ければご案内を差し上げます。ホームページにもその都度結果と予定を掲載していますのでご覧下さい。

この1年の成績は次の通りです。

○第127回 24年9月7日／日本カントリークラブ

優勝 大賀 勝恵

2位 松下 克三

3位 山本 喜則

○第128回 24年12月14日／筑波東急ゴルフクラブ

優勝 荻野晴一郎

2位 堀 博之

3位 山本 喜則

○第129回 25年3月8日／取手国際ゴルフ倶楽部

優勝 赤井 紀男

2位 上野 忠明

3位 高見 秀史

○第130回 25年6月7日／森林公園ゴルフ倶楽部

優勝 荻野 智司

2位 藤田 純

3位 岡林 逸男

※

<http://pcc-taiyo.co.jp/hikami>又は「水上ゴルフ同好会」で検索して下さい。

水上ゴルフ同好会事務係 岡 吉明

☎ 048-460-1601



第129大会の参加者（取手国際ゴルフ倶楽部で）

◆インフォメーション

◎同好会「どんぐり会」より♪♪

―郷友会コーラス同好会のお知らせ―

念願の郷友会コーラス「どんぐり会」が平成25年3月28日（木）に発足しました。

指導者には音楽家の笹倉強先輩をお迎えし、丹波への郷愁に浸りながら思いつきお腹の底から声を出し、誰もが知っている歌を楽しく歌っています。

歌がお好きな方、声が出ないと心配される方も、健康のために、ワイワイと楽しみながらプロの指導者の下で一緒に歌いませんか？

月1回の金曜日を定例会としています。会場の都合で変更する場合もありますが、日程は郷友会のHPにてお確かめいただくか、世話人にお問い合わせ下さい。

皆様のご参加を心よりお待ちしております。

日時・毎月1回（金）午後2時～4時まで

場所・板橋区仲町区民センター B1

音楽室

東上線中板橋駅南口より徒歩8分

（バス利用は赤羽駅～日大病院行、仲町区民事務所前下車すぐ。池袋駅～赤羽行、仲町区民事務所前下車1分）

指導者…笹倉 強先生

楽 譜…みんなのコーラス（野ばら社

550円各自ご持参下さい）

参加費…1500円（施設費&謝礼&

のど飴、飲み物など）

*お問合せ先

三贅（みつはし）洋子

☎090（4376）2568

岡田昌子 nrk46297@nifty.comまで

*世話人

坂上勝朗・三贅洋子・岡田昌子

演奏会

◎笹倉 強先生演奏会

ブルク・バツハ室内合唱団主催、笹倉 強主宰・指揮によるブルク・バツ

ハ室内合唱団第4回演奏会（ア・カペラ&カンタータの世界Ⅳ）が3月20日（水）13時45分から浜離宮朝日ホールにて開催されました。プロの歌手4名（笹倉先生のご子息含む）、管弦楽の皆様、ブルク・バツハ室内合唱団47名の皆様（笹倉先生の奥様含む）による素晴らしい演奏会でした。合唱に癒されたのもさることながら、家族3人が演奏会で活躍できることの素晴らしさに感動させられました。（岡田昌子・記）



創業享保元年



山名酒造

奥丹波

兵庫県丹波市市島町上田211
t e l 0 7 9 5 (8 5) 0 0 1 5
w w w . o k u t a m b a . c o . j p

今、求められている

新しいスタイルの物流トータルサービスをあなたに

情報誌・SP販促物などの梱包・発送管理、DM発送
データ入力等の情報処理、コールセンター、
事務局代行、在庫管理など一連業務を代行いたします

——— いつでもよりよいサービスを ———



株式会社ベターサービス

代表取締役 絹川 正 (山南町池谷)

本社：〒262-0003 千葉市花見川区宇那谷町 1501-2
TEL：043-257-0414 FAX：043-257-2865
<http://www.betterservice.co.jp>
e-mail：kinugawat@betterservice.co.jp

認定NPO法人アジアの新しい風 理事・事務局長

<http://www.npo-asia.org>

上 高 子 (氷上町出身)

〒154-0016 東京都世田谷区弦巻 2-18-22-414

TEL / FAX 03-5426-6714

e-mail takako-ue@t05.itscom.net

アジアの有名大学で日本語を学ぶ学生を支援する NPO です。

国税庁によって認定 NPO に認定されました。当 NPO への寄附金は、確定申告をすることで、税額控除の対象になります。

すなわち、寄付総額から 2000 円を差し引いた金額の 40% が税額より差し引かれます。ご支援をよろしくお願いいたします。



エクステリア専門商社



株式会社 トコナメエプコス

代表取締役 広瀬 寿和 (山南町和田)

〒160-0003 東京都新宿区本塩町23 第2田中ビル

TEL 03-3354-0211 FAX 03-3354-7767

あなたの町の「石屋さん」
そんな石屋をめざしています！！

墓石・霊園・建築石材・造園石材

(株) 丹波総合石材

代表取締役 堀 公二 柏高 昭和 36 年卒

いしやは ここよ

 **0120-1480-54**

工場・事務所 TEL 0795-72-3032

FAX 0795-72-4343

<http://www.tanba-sekizai.com>



くすの木 14 14 回生関東支部会

足立 悦雄

足立 真一

石倉 良介

井上 巖 (総合幹事)

井出 恭子

上田 道代

岡 洋子

岡田 昌子

小野 勝弘

古倉 克實

松田けい子

山本 栄子

三觥 洋子

山本 喜則

吉田喜久夫

株式会社 アイ・ケイ・アイ I.K.I co.,LTD

株式会社 ホームワールド

Urban Cocoon 「風を感じる時」

暮らしに潤いと幸福感を提案・都市生活者のオアシスの店

インテリアブリックス・アパレル・雑貨全般

輸入卸&生産管理 & 小売り

代表取締役社長 岸田 勇 柏高 昭和 36 年卒

東京都中央区日本橋人形町 3-7-10 Doll3

TEL 03-3249-5261 / FAX 03-3249-5262

大和

丹波市氷上町石生水分れ

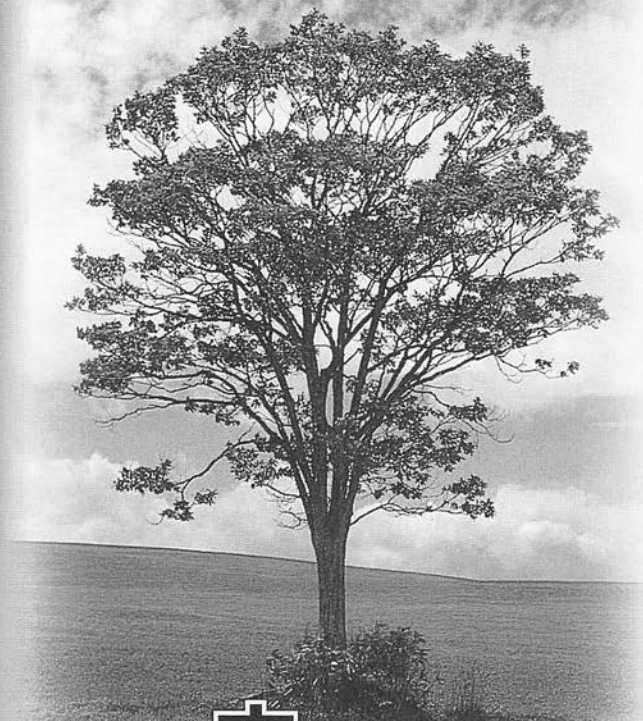
電話 (0795)82-6010

FAX (0795)82-6630

<http://tanbayamato.jp/>

本誌にご協力有難うございました ◆

人はだれでも、一生に一冊の本が書ける



メモリアルブックスのホンゴ出版

あなたの本 作りませんか

自分史・評伝・記念誌・小説・エッセイ・句集・詩歌集・写真集

弊社は長年、自分史の制作を手がけております。
自費出版のご希望がございましたら、お気軽にご相談下さい。

安価で明瞭な35万円システム

少部数でも費用は安心！

A5判 100ページ・100部の印刷で

判 型：A5判（タテ21cm・ヨコ14.8cm） 頁 数：100ページ
部 数：100部／組み方：10ボ×40字×16行（標準・1ページ640字）

株式会社 **ホンゴ出版** 代表取締役社長 池田 忍

〒247-0005 神奈川県横浜市栄区桂町1-1-1
TEL 045(895)2712 FAX 045(895)4338

伝えたい

柏原織田まつり

届けたい

丹波新聞

丹波新聞

検索

丹波新聞社

〒669-3309 丹波市柏原町柏原201

tel.0795-72-0530 fax.0795-72-1956

週2回(日・木)発行 1ヶ月1,220円(郵送料200円)

郷友の皆様へお願い

▼同じふるさとをもつ者の親しさは、親兄弟にも似て心よく、その気がねのない交りは、互いに清新なほげみを呼びおこします。そんな仲間のひろがりやを、この小誌は求めつづけます。

▼この雑誌は毎号全会員に贈ります。同郷者の全員が会員ですから、登録のない方や住所変更等がありましたらぜひお知らせください。

▼関東氷上郷友会は、すべて有志のボランティア活動によって運営されています。『山ざる』誌や通信費等の資金源も、有志の寄付、協賛広告料、郷友会会費等によって支えられています。

▼広告料は名刺広告五千円、半頁広告一万五千円、全頁広告三万円です。何卒ご協力お願い致します。

▼年会費の二〇〇〇円は強制的なものではありませんが、右の事情ご賢察の上、同封振込用紙にてお振込みくださいますようお願い致します。

▼これだけ充実した会誌をもつ同郷会はないとうらやましがられるたびに、"丹波のきずな"の強さを思います。

(山ざる編集部)

芦田重秋

あだち眼科院長／医学博士
順天堂大学眼科 非常勤講師

足立和孝

〒347-0015 加須市南大桑字下鳩山一六二〇一
TEL 〇〇四八〇—六五—五九八八
FAX 〇〇四八〇—六五—六〇九七
E-mail: kazu358@paste.ocn.ne.jp

足立和巳

東京都渋谷区日中友好協会理事
日産労連・エルダークラブ理事
E M ネット 埼玉 京 理事

〒183-0051 東京都府中市栄町一—一五—二七
TEL・FAX 〇四二—三六四—七二二七

株式会社ナレッジリンク
足立国際会計事務所

代表取締役
税理士・米国公認会計士 (Certificate)

足立知佳子

〒152-0035 東京都目黒区自由が丘一—三—四 U I W I I 自由が丘ビル六〇二
TEL 〇三三七—一八—八〇四七 FAX 〇三三七—一八—一四七
E-mail: cadachi@ata.gr.jp

足立静雄

飯田光雄

〒285-0025 佐倉市錦木町九八—一—一〇四
電話 〇四三—四八五—〇五〇三

生 田 清 弘

東京都世田谷区成城一―七―七
電話〇三―三四―一五一―八九三

井 本 義 一

上 野 重 喜

氷上郷友会監事

臼 井 小 五 郎

〒 275 0025 (丹波市氷上町絹山出身)
習志野市秋津二―一―四―五〇二
TEL 〇四七―四五三―八八五七

有限会社 PCC大洋

岡 吉 明

〒 351 0014 朝霞市膝折町四―四―三〇
TEL 〇四八―四六〇―一六〇一
FAX 〇四八―四六〇―二三九七
<http://www.pcc-taiyo.co.jp>

岡 田 昌 子

金
出
一
郎

上
武
正
次

〒299-1166 君津市陽光台一-四-二二

荻
野
哲
男

〒350-1331 埼玉県狭山市新狭山三-一〇-三三
電話〇四二-九五三-八五七一

栗
田
功

久
保
春
雄

〒300-0031 土浦市東崎町十三-二-六〇四
電話〇二九八-二二-二九七八

木
呂
子
惠
美
子

坂
上
勝
朗

坂
上
明

近
藤
仁
司

〒112-0012
東京都文京区大塚二丁目四十八番五〇一
電話 〇三―三九四三―九一一五

合唱指揮者

笹
倉
強

〒352-0014
新座市栄四丁目一五番二五
TEL・FAX 〇四八―四七七―五六四〇

仲 山 坂
口 上
一 泰
聰 男 登

仙台市在住

坂
上
豊

高 見 嘉都司

〒173-0025

東京都板橋区熊野町四〇番十一号

電話 〇三―三九五六―〇六〇〇

電話 〇三―三九七三―六〇五六

高 見 秀 史

いい眠りと健康の為のNPO法人
<http://www.sas-j.org/>

谷 口 浩 章

「柏陵同窓会東京支部」で検索いただくと
東京支部ホームページがご覧いただけます。

株式会社 シードコーポレーション

代表取締役 千 種 倫 幸

〒104-0061 東京都中央区銀座二丁目二―九

電話 〇三―三五六七―九七〇〇

日本画家

常 岡 幹 彦

〒357-0205

飯能市白子一七三―七
電話 〇四二―九七八―二〇九八

鶴 田 宏

原 谷 洋 美

西 山 裕 三

〒 669-4302 兵庫県丹波市市島町
中竹田 一一七一

日本舞踊 西 崎 祥
端 唄 根 岸 妙

〒 224-0027 横浜市都筑区大圃町五〇〇-八
電話 〇四五-五九一-六六五五

渡 邊 隆 男

山 口 和 久

恵理子・賢一・寧々・藤吉郎秀吉・
由佳・愛々・茶々・風人・愛莉・思温
〒 196-0031 東京都昭島市福島町二一〇-二七
電話 〇四二-八四八-四〇五五
<http://plaza.rakuten.co.jp/yamaguchi.0330/>

青葉山 真照寺 都立八王子霊園隣り
八王子 青葉霊苑 第二期墓地区議案内中
和合廟(永代供養墓) 受付中
住 職 堀 井 隆 川

〒 193-0821 東京都八王子市川町四九三-二
電話 〇四二-六五二-一〇一一
FAX 〇四二-六五二-一〇三三

集	編
記	後

★猛暑の終焉を告げるが如く、つくつくぼうしが鳴いている。7月は丹波へ、旧盆には宮城の家

内の実家に行き、以前訪れた石巻の牡鹿半島を一周した。もと海水浴場の浜辺に立ち尽くす80歳前後の老人と話をした。150戸あった集落は現在15戸程で、殆どの人々は他の地域に移り住んでいるとのこと。関西の若い方々が修復したという神社の鳥居の朱色が心に残る。被災した人たちが故郷に戻られるよう祈るばかりである。

★「山ざる文芸」欄へのご寄稿、ありがとうございます。42号より43号と人数も増え、嬉しい知己も授かりまして有難い限りです。ますます充実の誌面になりますように、たくさんの方々の皆様からの投稿をお待ちいたします。

★8月下旬にヨーロッパを旅した。スイスのツエルマットで、単独バックパック旅行をしている日本人女性2人に会っ

た。2人はいずれも30代で、UAEの航空会社の客室乗務員と、ロンドンに住みフリーランスのライター、というグローバル人材。日本人女性の活躍というか、適応力の柔軟さが力強く感じられた。2人とも、日本への愛郷心は高く、日本人の行儀の良さは天下一品、と評価しながらも、老年の男性への厳しい目が共通していた。「長く甘やかされていると、適応力を失う」ということらしい。(上)

★「あれが貴殿の父上や藤原先輩が幽閉されていた古城です。今の日本人は誰も当時のことを知りませんが」と印度の高官にデリーを案内された後、日本大使館で「私も柏原高校です」と告げられた時の驚愕と歓喜は文字で表せません。強い表示すれば「御縁」「同胞」「絆」です。

★「山ざる」関係者皆様のふるさとを思う気持ちとボランティア精神に助けられ44号が完成しました。今号から表紙は笹倉鉄平画伯に代わります。2号・36号は

常岡文亀・幹彦画伯親子が、37号・43号は可部美智子彫塑家が表紙を飾って下さいました。毎号立派な衣装をまとい「山ざる」は幸せものです。皆様ボランティアなので恐縮しつつも厚かましく感謝感激感動しています。前号から新設のマイギャラリー欄で写真・絵画・生花・書・陶器・手芸・彫刻などの作品を募集しています。次号に奮ってご応募を。(岡田)

山ざる 第44号 定価500円

平成二十五年十一月一日発行

〈編集委員〉
足立静雄 池田 忍 井出恭子
井徳正吾 上 高子 上田正文
大野義昭 岡 吉明 岡田昌子
木呂子恵美子 坂上勝朗 常岡幹彦
鶴田ゆき子 徳田八郎衛 原谷洋美
藤原ひさ子 本城英明

発行者 関東水上郷友会会長 坂上勝朗

〒351-0014 埼玉県朝霞市膝折町4-4-30
関東水上郷友会事務局(岡吉明)

電話 〇四八(四六〇)一六〇〇一
振替 〇一〇一三二二二三三〇

製 作 株式会社ニ玄社
編集協力 株式会社ホンゴ出版

新社屋 落成

平成23年10月吉日 埼玉県桶川市に新社屋が完成
敷地面積 4,000坪 建物面積 2,000坪

最新鋭設備を備えた物流センターが、いよいよ稼働
明日への発展を祈願して10月11日大安に営業開始



三協運輸株式会社新社屋 完成図

住所 埼玉県桶川市坂田字向 990-1

〔主要取引先〕 順不同

三井化学(株) 味の素(株) ダイキン工業(株) アサヒビール(株) 三菱商事(株)
キリンビール(株) 沖電気工業(株) 古河電工(株) ハウス食品(株) 帝人(株) 新神戸電機(株)

三協運輸 株式会社

代表取締役会長 岸本 勲(氷上町出身)

本 店 埼玉県桶川市坂田字向 990-1 TEL. 048 (728) 9380
E-mail : sankyounyu_saitama@h6.dion.ne.jp

本店配車センター 埼玉県桶川市坂田字向 990-1 TEL. 048 (729) 0466
大阪支店 大阪府大東市新田中町 3-3 TEL. 072 (806) 2821

物流倉庫所在地 東京・埼玉・神奈川・名古屋・大阪



文・安元 剛
書・谷内弘照

空海の人間像と真言密教の教えを再現。密教学者と守護寺住職の書による理想の合作。

B6判変型・160頁
●1260円

「お大師様」の言葉を親しみやすく紹介。

空海の言葉

ほっとする



悩み抜く一人ひとりに深く響く。

ほっとする親鸞聖人のことば

川村妙慶文／高橋白鷗書
●1050円



捨てて生きることこそ幸福への道。

ほっとする仏教の言葉

[捨てて生きる]
ひろさちや文／村上翠亭書
●1050円



日頃の疲れた心を癒す。

ほっとする禅語70

渡會正純 監修／石飛博光書
●1050円



話題の著者、エッセイ画集。

ほっとする老子のことば

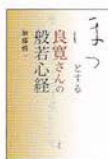
[いのちを養うタオの智慧]
加島祥造 画・文
●1050円



楽に生きるための知恵を説く。

続ほっとする禅語70

野田大燈 監修／杉谷みどり文
石飛博光書
●1050円



良寛さんの、心にふれる…。

ほっとする良寛さんの般若心経

加藤偉一 著
●1260円



人生の知恵を優しい言葉で。

ほっとする論語70

杉谷みどり文／石飛博光書
●1260円



もっともやさしい仏の教え。

ほっとする般若心経

野田大燈文／高木大字書画
●1260円